

三賜ノ地歩併テ二十一萬七千九百三十五步餘トナル。此領狀官ヨリ遞與、奥村壹岐加印。是目今官達ノ正數也。寛文以來、江戸地圖ニ行ルトイヘ、此邊ニ不、至名ヲ書ノセシ也。且北ノ方、併知。按ルニ這邸ハ、舟行水便ノ利アレハ、永代島等ノハ此邸惣界圍ノ圖ニテ可併知。數邸ノ地ヲ上サセラレ、此平尾巨萬歩ノ邸地ヲ得玉フカ。其水便トハ板橋川此邸中ニ通スレハ也。抑此發源ハ、武州秩父ノ山澗ヲ濫觴トシ、熊谷驛マテ十四里餘。ノ迤南ニ流レテ荒川ト云。夫ヨリ入間川ト溝合、藤驛ノ西ニテ。戸田川トナリ、其下流板橋驛ニ至テ板橋川ト云テ、畢竟千住隅田川トナリ、永代橋ノ南海へ達ス。此水便ヲ求メ玉フ方略ニハ種々遠圖アル可キナレ、今臆度ヲ舉ケ流俗ノ喙ヲ容ンテ諱テ閣筆ス。

東邸沿革圖譜

駒込之内○中

松平加賀守屋鋪之内、延寶度同人下板橋宿下屋鋪之内拜領之節差上候。

駒込之内○中

延寶七未年中松平加賀守板橋宿下屋鋪之内拜領之節、同人當所屋鋪之内差上候由。

御府内場末其外沿革圖書

下板橋宿○中

小名 平尾 江ノ方ヨリ入所ナリ。コ、ニ西ノ方ニ分ル道アリ。上板橋ヘノ往、小田原役帳ニ、元板橋知行平尾分ト載ルハ是ナリ。○中略。

松平加賀守下屋敷 宿ノ東ニアリ。二十一萬七千五十坪餘。寛文年中ニ賜フ所ト云。

新編武藏風土記稿

勅使院使隅田川饗應

四月廿一日乙酉延寶七年(紀元二三三九年)乙酉(三正綜覽)幕府、勅使花山院定誠納言前大千種有能納言前大法皇使池尻共孝納言前中本院使高倉永敦納言前大新院使今城定淳納言前中及醍醐冬基納言前中ヲ隅田川市ニ饗ス○日記柳營日記。

勅使院使隅田川饗應事蹟

勅使院使隅田川饗應 延寶七年四月十三日勅使前大納言花山院定誠、同千種有能法皇使前中納言池尻共孝、本院使前大納言高倉永敦、新院使中納言今城定淳、及少將醍醐冬基城ニ登リテ將軍家綱ニ面接スルコト、日記嚴有院殿御實紀其他ニ見ユ。是ニ至リテ幕府之ヲ隅田川ニ饗應ス。

○延寶七年四月廿一日雨降○

一、今度下向之勅使院使并醍醐、少將爲御馳走、隅田川ニ遊興之儀、被仰出之、依之吉良上野介○義央。大澤右京大夫○基恒。令案内也。

御船

同

御賄

天野孫左衛門○重時 坂井八郎兵衛○成令 伊奈半十郎○忠常  
○船手頭 ○船手頭 ○關東郡代

日記○柳營日次記同。



廿一日○延寶七年。けふ勅使はじめ参向の公卿墨田川遊覽せしめられれば、高家吉良上野介義央、大澤右京大夫基恒館伴せしめられ、船手頭天野孫左衛門重時、坂井八郎兵衛成令御船よそひして、關東郡代伊奈半十郎忠常饗應の事つかさどる。

——嚴有院殿御實紀

〔附記〕 築地西本願寺前橋架換

一、鐵炮洲門跡前之橋、新規之御懸直し被成候之付、入札之被仰付候間、望之者ハ、今日ハ十五日迄之内、樽屋所へ參、繪圖御注文寫取、入札可仕候旨、町中不殘可被相觸候。以上。

五月十二日○延寶七年。

町年寄

人

附記  
築地西本願寺前橋架換

堺町火災

五月廿九日癸亥

延寶七年(紀元二三三九年)○癸亥三正綜覽。

堺町○市内日橋區

火有リ、延燒若干町ニ

——町觸

蹟  
堺町火災事

及ブ。○變災篇參照。

堺町火災 變災篇ニ記ス。

廿九日○延寶七年五月○中略。

一、五月廿九日辰刻、堺町大坂七太夫座より出火、薺屋町少し、堺町東側壹町、泉町壹丁、堺町横丁北側半町、稻荷町壹丁、富澤町南新道壹丁、雪蹈丁、少長谷川町南側壹丁、富澤町壹丁、同新道壹丁、大門通同貳丁、新大坂町河岸通濱町三町目、堺町西側壹町、高砂町壹丁、

——柳營日記記

右之通燒失申候也。  
○延寶七年五月廿九日晴。

一、辰下刻、自堺町火事出來、餘程燒及數町、依之火消被仰付之。

南部 遠江守○直政 溝口 信濃守○重雄  
戸澤 能登守○正誠 津輕 越中守○信政  
京極 甲斐守○高住

——日記

右之通、從老中以切紙達之。

〔附記〕 屋鋪給與

十六日○延寶七年七月。

右被仰付之。且亦米津周防守上ケ屋敷被下之旨、被仰出之。

駿府御目付代 大關勘右衛門○公增

——柳營日記記

十六日○延寶七年七月○中略。

大關勘右衛門

一、同日、米澤周防守上ケ屋敷ヲ大關勘右衛門へ被下之。

——萬天日錄

七月廿九日壬戌

○延寶七年(紀元二三三九年)○壬戌三正綜覽。

備夫取締令有リ。○町觸大成令撰要永久錄。

備夫取締令  
事蹟

覺

備夫取締令 左ノ如シ。

市街充實時代

附記  
屋鋪給與  
大關增公



一、諸日用之者札なくして日用取者有之由、日用座頭共訴訟申出候。前々相觸候處不用之、右之仕合不届成義ニ候。町々ニ有之、鳶口手木之者持込日用、車力并米つき、かるこ、せをひ、其外諸日用之者共、日用座會所ニ參、札ヲ取可申候。若向後爲無札日用取者於有之、日用座之頭共急度相改捕之、兩番所ニ召連來候様可申付候事。

一、日用取候者之宿仕候々、日用札之儀致穿鑿宿可仕候。札無之者ニハ、一切宿仕間敷事。

一、諸日用直段之儀、兼々定置候外、少々高直ニ取申間敷候。附、方々日用請負仕候者共ハ、日用座へ罷越帳ニ付、諸日用之直段承届、其通相守、札なし之者一切つかい申間敷事。

右之趣、町々之名主家主致吟味、無油斷可申付候。若相背者於有之、遂穿鑿、急度可申付者也。○大成令、撰要永久録同。

延寶七年未ノ七月廿九日

右三條之趣被仰付、髓承届申候間、町中家持々不及申、借屋店借り地かり等迄爲申間、堅相守、諸日用之者共日用座へ罷越、銘々ニ札を取、日用賃御定之外、少も高直ニ取申間敷候旨、急度可申付候。尤日用取之宿仕候ハ、日用札之儀致、僉儀宿可仕候。若右之通相背候ハ、何様之曲事ニも可被仰付候。爲後日町中連判手形差上申候。仍如件。

延寶七年未ノ七月廿九日

御奉行所様

一町觸

城門掃除營繕心得

八月六日戊辰○延寶七年紀元二三三江戶城門守衛者ニ掃除營繕等ノ心得ヲ訓示ス。○教令類纂

城門掃除營繕心得事蹟

城門掃除營繕心得 教令類纂ニ、延寶七己未年八月六日

一、御門番所柱根土臺ハ土不掛様ニ仕、勝手廻迄常々無油斷掃除可申付事。

附、冠木御門闔之儀、御番替之節、致明立相改若不自由候ハ、斷可被申事。

一、御番所廻り破損有之候ハ、小破之節支配方へ可被申届事。

一、勝手水つかひ所同下水道廻り、塵芥不捨置、下水無滯様被申付、御番替之節相改、請取渡可被致事以上。

未○延寶 八月六日 右令條記

土屋賴直除封

七日己巳○延寶七年紀元二三三久留里○上邑主土屋賴直○伊ノ封ヲ除キ、其邸ヲ收公ス。○日記、嚴有院殿御實紀。

土屋賴直除封事蹟

土屋賴直除封 久留里邑主土屋賴直狂氣シテ除封セラル。收邸ノ事之ヲ記ス者無キモ、

下文其邸石川乗政ニ給賜セラル、コト見ユ。

○延寶七年 八月七日 曇○中略。

一、土屋伊豫守○賴事令亂心、成長之子雖有之、一類共ニ不申聞、常々仕形非法、其上終

市街充實時代



御目見不奉願之付、領知被召上之。雖然御代々之召仕筋目依被思召、子主稅、土屋被召出之、新規之領知三千石被下之旨、上意之趣、土屋相摸守直。政神尾若狹守。元々老中列座有之、加賀守保忠朝傳之。

—日記

七日延寶七年八月中略。上總國久留利領主土屋伊豫守頼直狂氣して、年たけし子あれども、一族にもかくし置、今にいたり見參をも願はず、かた、ひが事多をもて所領二萬石收公せらる。されど祖先の筋目を思召、長子主稅遠直に新に三千石たまはる。

〔附記一〕 山口重長采地收公

七日延寶七年八月中略。寄合山口半左衛門重長年若くてうせ子なきをもて、采邑五千石收公せらる。——嚴有院殿御實紀

〔附記二〕 堀凌

一、水戸様前々牛込土橋迄御堀さらへ御普請、入札ニ被仰付候間、望之者來九日、十日迄之内、阿倍四郎五郎殿重。大久保甚右衛門殿昌。本多忠左衛門殿之。御宅へ、勝手次第參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。  
八月七日延寶七年。町年寄  
人

附記一、山口重長采地收公

附記二、堀凌

神田神社修理

神田神社修理

廿七日己丑延寶七年。紀元二二三九。神田神社市内。ヲ修理シテ成ル。續

神田神社修理 左ノ如シ。

本社 間口三間三尺六寸。

幣殿 間口三間三尺六寸。隨身二軀、狗二匹を置。

拜殿 間口九間四尺八寸。（中略）

公儀より初御造營、元和三巳年出來、明曆三年御類燒、後寛文元丑年御造營、後延寶七未年御修復。（中略）

延寶七未年棟札寫

御奉行

四海泰平	御願主征夷大將軍正二位右大臣源家綱公	小菅伊右衛門源正武	下奉行
一社一向	武州豐嶋郡江戸惣鎮守	神谷長五郎藤原直重	林 新右衛門
玉殿安穩	奉修復神田大明神社頭一字	神主芝崎宮内少輔吉連	陰山新兵衛
万民豊樂	延寶七己未稔八月廿七日	花井次郎左衛門藤原定安	猪 善右衛門
		湊田次郎太郎源祇寛	大草半右衛門

市街充實時代



——續府内備考

覺

一、神田明神御修覆入札ニ被仰付候間、望之者ハ、來月朔日二日小普請御小屋へ參、御注文寫取、同三日四日兩日之内ニ明神ニ參、破損之場所致見分、入札可仕候。札御披キ候義ハ、六月八日五ツ時分ニ小普請御小屋へ持參候様、町中不殘可被相觸候。已上。  
町年寄  
五月廿八日〇延寶七年。

——町觸

是日

〇延寶七年(紀元二三〇九年)八月廿七日。

屋鋪ヲ賜フ者若干。〇日記。柳營日。屋敷書拔。

屋鋪給賜  
屋鋪給賜事  
蹟

〇延寶七年八月廿七日快晴。〇

一、屋敷被下之面々所謂、

石川總氏

石川市正〇總氏。

是ハ居屋敷狹付、土岐伊豫守上ケ屋敷被替下之。

松平定澄

松平佐太夫〇定澄。

是ハ宅地無之故、石川市正之屋敷被下之。

中山勝之

中山茂兵衛〇勝之。

是又屋敷狹付、尾張黃門屋敷之近所明地三千坪被下之。何處老中列座傳之。席御黑書

——日記

書院。

廿七日〇延寶七年八月。

屋敷拜領之面々、

土岐伊與守上ケ屋敷。

大森賴直

大久保和泉守上ケ屋敷。

石川市正上ケ屋敷。

服部龜之丞上ケ屋敷。

尾張殿御屋敷近所にて。

右之通被下之候。

——柳宮日記

同(〇役名不知)中山茂兵衛

右同人預地

役名不知大森信濃守

同川合平太夫

役名不知石川市正

同松平左太夫

市街充實時代

川井久文

延寶七年己未年九月十七日渡。上ケ地不知。

一、市ケ谷千五百坪。外ニ增坪百貳拾坪、同日渡ス。

同日預。一、同所地續明地貳千六百五坪。九月十八日渡。同斷(〇上ケ地不知)。

一、小石川千六百拾坪。但、建家共。

九月十八日渡。同斷。一、表猿樂町六百七拾三坪三合。

九月廿五日渡。上ケ地不知。一、八重洲河岸千八百廿八坪。

十一月四日渡。上ケ地不知。一、麻布臺町千六百六拾五坪六合。



土屋政直等  
賜邸

九月四日丙申延寶七年(紀元二三三)正綜覽。土浦陸國常城主土屋政直相摸守。大手前

邸市內ヲ還上シテ、山形前國羽城主奧平昌章次郎小ノ日比谷門内邸市

内賜ヒ、老中土井利房登守能ハ政直相摸守土屋舊邸市內ヲ賜フ。日記。柳營日次記。若年寄松

平信興幡守因ハ利房能登守土井舊邸市內ヲ賜フ。萬天日記。柳營日次記。

土屋政直等賜邸 傳フラク、

九月四日延寶七年雨降。○

一、土屋相摸守直。○政 大手前之屋敷差上之付、與平小次郎章。○昌上屋敷。○日比谷門内。被下之

旨、老中列座、雅樂頭忠清。○酒井 傳之。

一、於御前拜領之所謂、

土屋相摸守上屋敷

能登守上屋敷。

右之通、御直被仰含云々。

四日延寶七年○中略。

右願之付、大手屋敷被召上之、則爲代與平小次郎上ケ屋敷被下之。

土屋相摸守

土井能登守老利房、

松井因幡守若年寄、

——日記

土屋政直

土井利房

松平信興

賜邸事蹟等

土屋政直等

賜邸

——屋敷書拔

九月五日延寶七年同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

土屋相摸守上ケ屋敷。

能登守上ケ屋。

右之通被下之旨、於御前被仰付之。○萬天。

廿五日延寶七年九月。

右今度拜領屋敷、明廿六日移徙也。

土井能登守源利房幼名七之助

一、同年延寶七年。九月四日、大手前土屋但馬守上屋敷被下之。但、此節是迄之神田橋内屋

敷差上候義と被存候得共、不詳候。

昌章從五位下。美作守。幼名小次郎。

延寶七己未年日比谷御門内屋敷就御用差上候様被仰付候。

延寶七己未年日比屋門内ノ邸官地トナル。此邸賜ハリシ。年、月、日不レ知。

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

同(○役名不レ知。)

大島 雲 八 郎○義

近。

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪

同(○役名不レ知。)

大島 雲 八 郎○義

近。

右同人預地

市街充實時代

附記 屋鋪給賜

延寶七己未年

九月五日渡。同斷。○上ケ地不レ知

一、六本木木貳百四拾八坪八合

同日預。明地。但、麻布屋敷之内御用地之被召上、爲代地渡。

一、同所地續貳百拾五坪



松平直堅  
屋鋪

松平直堅屋鋪

——屋敷書拔

松平直堅ハ、權藏ト稱シ、初直興ト曰フ。福井城主松平光通一男也。

○延寶七年九月十三日辰后刻より

一、雅樂頭忠清。酒井老中波間着座申渡有之。所謂、

松平備中守○直

右宅地無之付、山口半右衛門上ケ屋敷被下之。

——日記

一、同日九月十二日。二、松平備中守屋敷無之ニ付テ、山口半左衛門長○重上ケ屋敷被下之。

——萬天日錄

延寶七己未年

九月廿二日渡。同斷。○上ケ地不知。一、麻布溜池端三千六百坪。但、同斷。○建長屋共。

松平備中守

——屋敷書拔

一、同年九月。二、松平越前守光通之實子松平權藏殿、越前ノ國ヲ立退玉ヒ、江戸ヘ

參ラレ、松平但馬守直富ノ屋布ヘ駈入玉ヒ、暫ク介抱メ、公儀相濟テ後、延寶二年三月廿

四日ニ權藏殿召出サレ玉ヒ、一萬俵御合力米トノ被下之。則松平備中守直興ト改メ玉

ヒ、山口平兵衛上ケ屋布ヲ賜フ。

——玉露叢

十六日戊申。○延寶七年(紀元二三三九)年九月○戊申、三正綜覽。若年寄石川乗政○美作守。其他屋鋪ヲ賜

石川乗政等  
屋鋪賜給

石川乗政等  
屋鋪賜給事

フ。○日記。柳營日次記。

萬天日錄。寛政呈譜。

○延寶七年九月十六日晴○中略。

石川乗政等屋鋪賜給 傳フル所左ノ如シ。

石川乗政

土屋透直

一、於御前石川美作守政。○乘事、土屋伊作守直。○頼上ケ屋敷被下之旨、御直被仰含、云々。

一、土屋主稅直。○達、松平因幡守興。信上ケ屋敷被下之旨、同氏相摸守直。○政、能登守井利房。傳之。○柳營日次記同。

一、同日九月十六日。土屋伊豫守上ケ屋敷石川美作守ニ被下。

一、同日九月十六日。土屋伊豫守上ケ屋敷石川美作守ニ被下。——萬天日錄

一、同日ニ、松平因幡守上ケ屋敷土屋主稅ニ被下之。九月十六日○延寶

石川乗政○從五位下。美作守。后改能登守。又改美作守。幼名助十郎。九月十六日○延寶

屋敷替被仰付、常盤橋内土屋伊豫守上ケ屋敷被下之。

透直○主稅。枕垂。

同年○延寶七年。九月十六日、常盤橋屋敷被召上、神田柳原外松平周防守屋敷被下之。——寛政呈譜

岩村藩松平家

一、常盤橋内上屋敷 三、四七四坪。

下賜 延寶七年十月七日

——子爵松平家回答村藩。

市街充實時代



附記、一  
萩毛利氏  
抱屋鋪

〔附記、一〕 萩毛利氏抱屋鋪

領地城宅	場所	又ハ祿高表	所領年月日	時代	沿革	現今推定地
岩國 今井谷邸	江戸赤坂 今井谷	三千五百 坪餘	延寶七年十月八日毛利 宗藩ノ有トナリ實永元 年吉川氏抱屋敷トナル	吉川勝之助 廣達	元治元年 七月沒收	麻布區今井町四十番地邊

正徳二年九月毛利吉元

○民部

書上ニ左ノ如ク記スコト、邸記ニ見ユ。

——もりのしけり

一家來抱屋敷

赤坂今井谷伊奈半左衛門支配所  
無年貢地三千五百坪餘  
家作園相濟候

右拙者家來吉川勝之助屋敷

日本橋迄壹  
里拾五町程。

〔附記、二〕

金杉堀土手石垣修築

覺

一、芝金杉御堀新網町土手竝石垣築直し御普請、入札ニ被仰付候間、望之者ハ、明十九日、廿二日迄之内、阿部四郎五郎殿、本多忠左衛門殿、大久保甚右衛門殿三人之御宅、手寄次第參御注文寫取、入札可仕候。札御披候日限ハ廿四日ニ至候間、大久保甚右衛門殿御宅へ持參可申旨、町中不殘可被相觸候。以上。

九月十八日〇延寶七年。

町年寄

人

町觸

附記、二  
金杉堀土  
手石垣修  
築

松平光長家  
宰等訴訟裁  
決

松平光長家  
宰等訴訟裁  
決事蹟

十月十九日辛巳〇延寶七年紀元二三三高田後國城主松平光長後守越ガ家  
宰等ノ訴訟ヲ裁シ評定所ニ於テ申渡有リ〇日記。柳營日次記。

松平光長家宰等訴訟裁決

〇延寶七年  
十月十九日快霽。

一、今朝評定所ハ彦坂壹岐守〇重島田出雲守政。忠市岡五左衛門政。定會我權之亟壽。助被遣之、今度松平越後守〇光家來不義之輩所々ハ御願之以充書壹岐守申渡之所謂

覺

一、永見大藏事、今度小栗美作儀付、萩田主馬一統之者相靜可申處、左様不仕、其上越後守在國候處、相伺不申、美作宅ハ押寄せ、騷動爲仕候事。

一、萩田主馬一統之者以誓詞徒黨爲仕候事。

一、大藏儀、越後守當地ハ召寄之處、無遠慮居屋敷ハ直落着、頭取仕候者共度々相集、密談致し候事。

右之段、越後守三河守〇松平綱國。ニ對し不届被思召、遠島可被仰付候得共、御用捨、大藏

事松平大膳大夫〇毛利綱廣。被成御預也。

覺

一、萩田主馬儀、今度小栗美作儀付、越後守在國之處、不得下知、永見大藏ハ致一味、徒黨之者共誓詞爲仕候事。

市街充實時代



一、越後守參觀以後、又不義之所謂申出付る、あやまり候旨誓詞仕候以後も、一味之者共、不相靜様に仕候義、不届事。

一、越後守三河守爲こよろしく存由申義共願之通申付候處、又候哉我儘成ル義共申出候事。

右之段、越後守三河守に對し不届被思食候。切腹可被仰付候得共、代々相勤來候者之候間、被成御用捨、主馬義松平出羽守○綱御預也。

覺

一、片山外記事、今度小栗美作義申立、永見大藏致一味之儀、越後守爲を不存、我儘なる訴訟申出、國許江戸屋敷中騷動爲仕候事。

一、越後守僉議之上、誓詞を以被申付候以後も、不相靜様に申なし候段、不届之事。

一、中根長左衛門事、江戸留守居仕り罷在、越後守に不届、永見大藏方より誓詞之儀申越候處、當地に罷在候者共誓詞取集之、隱密に國元へ遣し候事。

一、今度あやまり候一統誓詞仕候以後も、不相靜様に申成、騷動仕らせ候事。

一、渡邊九十郎事、目付役をも仕候處、大藏主馬中合、荷擔候事。

一、騷動以後も、一統にあやまり之誓詞仕候以後も、不相靜様に申なし、不届事。

右之段、越後守三河守に對し不届被思召候。切腹雖可被仰付、被成御用捨、片山外記事ハ、伊達遠江守○宗に御預、中根長左衛門事、松平越前守○綱に御預、渡邊九十郎儀

と、松平大和守○矩直御預也。

右順に申渡之、畢、林内藏介片山主水に、右被仰出之通、越後守可達之旨、彦坂壹岐守傳達之。

——日記○柳營日次記同。

十九日○延寶七年十月中略。けふ松平越後守光長が家の長等訴訟の事、上裁有て令せらる。永見大藏は、こたび小栗美作と萩田主馬が黨争論の事、とりしづめもせず、けつく光長にもうかゞはす、美作が宅へ衆人をしてをしよせしめ、又主馬が黨與の徒をして血誓をなさしめ、その身こたび召を蒙りて参りしに、公をはからずをのが居宅へ落つき、かの徒首謀のものを私宅に會集し、密談を遂る條、その主に對し大不敬なるをもて、遠流せしむべしといへども、一等を減じ、松平大膳大夫綱廣にあつけらる。主馬は、光長が命をも受ず、大藏等と一味し、徒黨血誓をなし、光長參觀の後、一旦過を謝して誓詞を捧げし後も、とかく黨與のもの評論しづめず、光長父子の爲なりとて申立し事ども、その請所のごとくなし、あたへし後も、いよく我意を申つるにより、切腹せしむべしといへども、歴世相つひで國老たるをもて、一等を減じ、松平出羽守綱近にあづけらる。片山外記は、大藏美作と志を同じくして、府邸竝に封地騷擾せしめ、この事光長查檢ありし後、誓詞をもて命じけれども、猶靜謐せしめずとて、伊達遠江守宗利に預けられ、中根長左衛門は、府邸の留守居にてありながら、光長にも申さず、大藏と同意し、府邸在番の家士をあつめ、ひそかに一味の血誓をなして、大藏がもとへをくり、渡邊九十郎は、目付を



勤ながら、大藏主馬に加擔したりとて、長左衛門は松平越前守綱昌、九十郎は松平大和守直矩に預けらる。世に傳ふる所をもて考るに、小栗美作代々光長が家の老として、奢侈につのり、姦曲のふるまひ多かりしかば、永見大藏、萩田主馬をはじめ、宗徒のもの光長にうたへて、美作を罪に處し、國政を改革せんとせしかど、そのことおもふほどにもかなはざりしにより、大藏主馬か同意のものに御爲方と唱へ、一味同意して血誓し、上裁を仰ぐ。しかりといへども、美作はさる姦計ふかき者なれば、酒井雅樂頭忠清はじめ、當時權要の人々とことく親しみ、常に阿諛したれば、評定所裁斷のさまも、をのづからかくさだかならぬさまになりゆきたるなり。かくては遂に御代あらたまりて、このうたへ再び興り、はては忠清が御勸氣蒙りしも、この時裁斷のさま不正なりとの事、第一に命ぜられしに至れり。

——嚴有院殿御實紀

光長家宰等ノ訴論ハ、柳營日記ニ左ノ如ク見ユ。

廿九日○延寶七年  
正月○中略。

松平越前守出入之覺

一家老小栗美作知行高壹萬五千石、組與力共ニ美作内室爲形領貳千石、市正死已後市正知行之内千石、美作内室被遺、都合三千石、兩方合壹萬八千石、内室死去以後も三千石其儘被下候由。

一、越後守弟永見市正、知行高三千石、是ハ三河守實父也。

一、市正弟永見大藏知行二千石、市正死去以後、市正知行之内、貳千石被下都合四千石。

一、安藤次左衛門小性立也、只今家老竝ニ知行高千五百石被下候、次左衛門實子無之養子有之候、次左衛門立退ニ付、養子家中御預ケ、様子ハ知不申候得共、先年三河守ニ毒害可致手立有之、加様之事相知候哉との取沙汰有之。

一、萩田主馬、加州堺之城主大名分也、知行高壹萬貳千石。

一、家中惣竝にて、知行高ニ應し、用金藏ニ入置候、美作義三千兩入置候、此金取可申由申候ニ付、出入出來候由。

一、美作ニ越後守妹總領掃部御妹子之腹ニ、越後守御甥、美作事奢重疊仕、家中最負之者共ハ取立、或ハ百姓ニ非分之課役申付、國中土民迄及困究、或ハ自分之家來を忤三河守小性ニ出給分取らせ、其者ハ自分ニ其儘召仕、同役中不和諸事心儘仕候事、家中權ニ伏候得共、悉疎果候。

一、小栗美作不届候段、萩田主馬を以、大藏ニ申上候由也。

一、藏ニ入置之金達、取可申旨ニ付、家中之者美作立退候心得候、侍共數百人、正月九日夜、美作宅ニ二重三重ニ取巻候、此段越後守被聞召、近習之者を以て奉公仕候者共、過半其場ニ懸ケ付、既ニ理不盡之沙汰可及躰、依之越後守ハ又近習之者被遣、漸御しづめ、夜明引退候。

一、家老安藤治左衛門儀、無ニ之美作最負之者ニ候。



一、正月十七日美作隱居被仰付、掃部へ壹萬五千石被下、永見大藏並之諸事相勤候様被申付候由。但領分者三千石上り候由。

一、江戸に可爲被成言上、大目付兩人御下し候、千石取壹人、五百石取壹人。

一、七人衆其外近習役人物頭迄不殘被召之候、美作ケ様の不忠之ものに候處、只今まて何も不申聞事、對上不忠にて候哉、美作權威恐候哉、不届思召候。江戸に言上候間、其上之可被仰付候由、御直之被仰渡候由。

廿三日乙酉○延寶七年(紀元二三三三)年十月〇乙酉、三正綜覽。家屋新營及借家ニ關スル布令有リ。

嚴制錄。

家屋新營及借家令事蹟

家屋新營及借家令

新規之家作並借宅之御觸

覺

從此以前如被仰出之、所々明地之家を作義堅爲制禁之條、明春以御檢使被相改之、若新規之家を作輩於有之ハ、可爲曲事矣。

奉公人屋敷之内商賣人ハ借之義、彌御停止也。萬一借輩於有之ハ、是又可爲曲事矣。

自今以後、御料私領之百姓、并寺社等之地を、借家をつくらせ候者於有之ハ、可爲曲事矣。附所ニより斷之上可任差圖事。

以上。

武家嚴制錄

十月廿三日○延寶七年(紀元二三三三)年

十一月十六日丁未○延寶七年(紀元二三三三)年東福門院○德川和子

附屬ノ士其他

東福門院附屬士其他屋鋪給與

二、宅地ヲ給ス。○日記、柳營日次記、屋敷書拔。

東福門院附屬士其他屋鋪給與 左ノ如シ。

十一月十六日晴。

一、東福門院衆宅地無之輩に被下之。所謂

三宅陳忠

下谷淨安寺上ケ地 小屋料三十五兩被下。

三宅玄蕃○陳忠

川原彈正

同所正覺寺上ケ屋敷 小屋料同斷。

川原彈正○監就

遠山政就

同所瑞泉院上ケ屋敷 小屋料拾兩。

遠山將監○政就

右一同呼出之稻葉美濃守○正申渡、大久保加賀守朝。忠土井能登守房。利堀田備中守正俊。列座。席御右筆部屋縁通り。此外御臺所衆御賄并伊賀衆御小人等に屋地被下之。

本多師重

丸山片町關長右衛門上ケ屋敷 小屋料十二兩被下。

御臺所人 本多三九郎○師重

山下十右

坪數百八十四坪三合。小屋料同斷。

山下十右衛門

湯淺清元

牛込十坪。與兵衛預リ屋敷 同斷。

湯淺彌次兵衛○清元孫作

市街充實時代







十一月廿一日渡。同斷。  
十一月廿一日渡。同斷。百拾壹坪七合  
十一月廿一日渡。同斷。百拾壹坪壹合三勺  
十一月廿七日渡。同斷。百拾壹坪壹合三勺  
十一月廿七日渡。同斷。百拾壹坪壹合三勺  
同斷。同斷。橋伊賀町三百廿坪三合  
同斷。同斷。橋伊賀町三百廿坪三合  
同斷。同斷。橋伊賀町三百廿坪三合  
同斷。同斷。橋伊賀町三百廿坪三合  
同斷。同斷。橋伊賀町三百廿坪三合  
同斷。同斷。橋伊賀町三百廿坪三合  
一地名不知九拾貳坪六合

善信 小兵衛。  
○小倉。

同年延寶。十一月廿九日、小石川春日町居屋敷拜領仕候。

〔附記、一〕 妙國寺塔修理

一、伊奈半十郎殿常。御代官所品、川妙國寺塔破損ニ付、御修覆入札ニ被仰付候間、望之者半十郎殿御宅へ參、御注文寫取、入札仕候様ニ、町中不殘可被相觸候。以上。  
町年寄 三人  
十一月廿日延寶。七年。

〔附記、二〕 借米返納

一、先日相觸候御拜借米代金之内三ヶ一、當月中上納仕候ニ付、集申候上、小判致吟味、

覺

此書付之通、其町々々來廿五日喜多村所ニ持參可有候。少後油斷有間鋪候。以上。  
町年寄 三人  
十一月廿一日延寶。七年。

右三分一割付金高御書付相廻り候ニ付、御觸之通相納候。

〔附記、三〕 兩國假橋

一、兩國橋假橋御普請、伊奈半十郎殿被仰付候間、望之者ハ、明朝々半十郎殿御宅へ參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。  
十一月廿九日延寶。七年。

十一月廿九日延寶。七年。

晦日辛酉。延寶七年。紀元二二三三九。屋鋪ヲ賜フ者有リ。十二月八日己巳。延寶七年。紀元二二三三九。屋鋪ヲ賜。十二月癸酉。紀元二二三三九。

九年。己巳。三正綜覽。九日庚午。延寶七年。紀元二二三三九。十二月。庚午。三正綜覽。十二日癸酉。紀元二二三三九。

癸酉。三正綜覽。亦同ジ。次記。延寶遺錄。屋敷書拔。

屋鋪給賜 左ノ如シ。

一、同。延寶七年。晦日、石川美作守上ケ屋敷ノ内、朽木和泉守綱。則拜領之。

一、同日。延寶七年。二、屋敷拜領ノ衆、

屋鋪給賜事  
蹟  
朽木則綱  
榊原政喬  
天野富重  
平賀玄純

朽木和泉守  
上ケ屋シキ。  
高木善左衛門  
上ケヤシキ。  
井上惣右衛門  
上ケヤシキ。

市街充實時代

榊原 采 女。政  
天野 傳 四 郎。富  
平賀 玄 純

附記、一  
妙國寺塔  
修理

附記、二  
借米返納

附記、三  
兩國假橋

屋鋪給賜

屋鋪給賜事  
蹟

朽木則綱

榊原政喬

天野富重

平賀玄純

同 竹内源右衛門  
同 天野五郎大夫組  
同 井出九兵衛  
同 新久兵衛  
同 吉田久八郎  
同 天野五郎大夫組  
同 本多三九郎  
同 山高宇右衛門組  
同 小倉小兵衛。善  
屋敷書拔

寛政呈譜

町觸



久保玄貞

佐藤慶南

杉本忠惠

原田宗叙

笠原養古

久保玄貞

佐藤慶南

杉本忠惠

原田宗叙

笠原養古

萬天日錄

堀田正俊

○延寶七年十一月八日晴略

一、堀田備中守○正澁谷におひて下屋敷近所屋敷被下之。

○延寶七年十二月九日晴略

一、天野傳四郎事高木善左衛門上ヶ屋敷被下之。於御黒書院老中被傳之。

一、榊原采女事朽木和泉守上ヶ屋敷被下之。於芙蓉間被傳之。

一、本道外科衆屋敷被下之。所謂

久保虎之助上ヶ屋敷。

井戸惣右衛門上ヶ屋敷。

鹽町女院様御使屋敷。

兩替町銀座町五間半口。

右同所五間口。

久保玄貞

平賀玄順

佐藤慶南

杉本忠惠

笠原養古

本多忠恒

右於御右筆部屋縁頼、大久保加賀守朝○忠被傳之。松平因幡守興○信石川美作守政○乘侍座。

上原宇右衛門上ヶ屋敷  
被下之。  
鳴海宗圓上ヶ屋敷  
被下之。

神尾次郎兵衛

日記

一、本多織部○忠事、同姓隱岐守屋敷隣六間ニ三十間被下之。

九日○延寶七年十二月。

一、御屋敷被下候面々、

榊原采女 天野傳四郎

平賀玄純 久保玄貞

佐藤慶甫 杉本忠惠

笠原養古 御數寄屋組頭 原田宗馭

右朽木和泉守上ヶ屋敷之内ニ被下之。

十日○延寶七年十二月。

本多織部

右同姓隱岐守隣ニ六間ニ三十間之屋敷被下之。

神尾次郎太夫

上原宇右衛門

右上ヶ屋敷被下之。右々昨日被仰付之。

十三日○延寶七年十二月。

市街充實時代

神尾次郎  
太夫  
上原宇右



右澁谷下屋敷於近所去八日屋敷被下之。

九日○延寶七年十二月。

一御屋鋪拜領之面々、

朽木和泉守上ケ屋敷ヲ

右々於芙蓉之間、老中列座ニシテ。

高木善左衛門上ケ屋敷ヲ

右々御黒書院溜ニシテ、老中列座ニシテ。

久保虎之助上リ屋敷ヲ

井戸惣右衛門上リ屋敷ヲ

京橋町屋

右同斷

鹽町

右々御右筆部屋縁頼ニシテ。

鳴海宗圓上リ屋敷

堀田備中守

——柳營日次記

榊原采女

天野傳四郎

久保玄貞

平賀玄純

杉木忠惠

笠原養古

佐藤慶南

原田宗馭

——延寶遺錄

十一月十四日渡。同斷。(○上ケ地不知)

一南八町堀貳百四拾九坪七合五勺

一鷹匠町百七拾五坪壹合貳勺

同日渡。同斷。但、建家共。

一麴町八町目横町貳百九拾五坪

同日渡。同斷。但、同斷。

一元御臺所町三百四拾坪七合五勺

十二月廿三日渡。同斷。

一愛宕下六百四拾坪壹合

十二月廿七日渡。上ケ地不知。

一鐵砲洲築地千三拾六坪七合五勺

十二月廿七日渡。同斷。

一駿河臺三百九拾壹坪

延寶八年庚申年。

正月廿三日渡。伊奈半人御代官所。

一下澁谷八千七百廿五坪八合

但、同所屋敷續ニシテ。

——寛政呈譜

堀田備中守

——屋敷書拔

同(○役名不知)

本多織部

原田宗馭

役名不知。

平賀玄純

神尾次郎兵衛

役名不知。

天野傳四郎

榊原采女

同

久保玄貞

——寛政呈譜

〔附記〕 綾瀨川掘替

一、武州綾瀨川掘替御普請伊奈半十郎殿に被仰付候ニ付、掘方日用人足入札ニ被仰

付候間、望之者ハ、半十郎殿御宅へ參御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可相觸候。

十二月十二日○延寶七年。

——町觸

土屋茂直

附記 綾瀨川掘替



市街地異動  
芝片門前

是年

元〇延寶七年(紀)市街地ニ移動有リタル者若干。〇府内

市街地異動 延寶七年中市街地ニ異動有リタル者ヲ舉グ。

芝片門前 道敷ノ内橋番預地トス。

六月九日預  
芝片門前通拾三坪  
但、道内ニシテ渡

橋番  
長兵衛預地  
屋敷書拔

赤坂新町

赤坂新町 町屋鋪拜領者有リ。

赤坂新町三丁目 〇中

一、武家拜領人姓名。〇中

是ノ西之方飛地之分。〇中

小普請神尾豊後守組  
淺沼儀兵衛

表京間四間三尺三寸。裏幅同躰。  
裏行同貳拾貳間壹尺。坪數百坪八勺。  
右ニ先祖淺沼儀左衛門於櫻田御殿延寶七年三月四日御持頭秋山忠右衛門組同心  
被召出候處、屋敷無御座候ニ付、奉願右屋敷草創ニシテ拜領致シ、是迄屋敷替不致候。

——文政町方書上

牛込末寺町

牛込末寺町 町屋鋪拜領者有リ。

末寺町 〇中

一、町内起立之義ニ、往古武州豊島郡野方領牛込村之内ニ有之候處、町屋起立之義ニ、書

物等燒失仕、相分不申候。町名之起ニ、寺町之末ニシテ、末寺町と唱來申候。〇中

一、拜領町屋鋪名前左之通。〇中

一、三百六坪

小普請  
井手佐太郎

右ニ延寶七年十一月日不知拜領仕候處、年久敷相成候ニ付、其已前拜領主相知不申候。

——府内備考

末寺横町

末寺横町 起立年代ヲ知ラズ。町屋鋪拜領年代ヲ知ラズ。今末寺町ニ因ミテ此ヲ附記ス。

末寺横町 〇中

一、町内起立之義ニ、往古武州豊島郡野方領牛込村之内ニシテ、有之候處、其後町屋ニ相成候年月之義ニ、書留燒失仕、相分不申候。町名之儀ニ、末寺町横町ニ付、末寺横町と唱來申候。〇中

一、町内拜領地主名前左之通、

御留守居番同心  
宮山清五郎

一、拜領町屋敷八拾七坪五合

——府内備考

右拜領年月書留燒失仕相知不申候。

大塚龍門寺門前

一、右ニ小石川牛天神別當龍門寺持ニシテ、右牛天神境内四千六百六拾坪餘之内、明曆三酉年八百拾九坪餘御用地ニ被召上。〇中 右爲代地萬治三子年四月中大塚之内於當所

市街充實時代

大塚龍門寺門前



百拾九坪餘之地所被下置候。○中

一、右門前町家ニ被仰付起立年月駁と相分不申候得共、延寶七末年右門前屋鋪地改稻生七郎右衛門様盛。○正近藤作右衛門様用弘。御改。○下  
府内備考

〔参考〕江戸町數

一、江戸中ノ惣町數都合八百八町也。此分ハ公役ヲ勤メ、尤町奉行ノ支配也。外ハ寺社奉行支配、サテハ御代官衆ノ支配也。右ノ八百八町ノ内ニテ、乗物醫師ノ分五千人餘、此外或ハ歩行若黨一人ニ藥箱持、或ハ僕二人、或一人ノ醫師六萬人餘、尤木道、外科、兒醫師、婦人醫師等ヲ合テ也。但、寺社門前御代官方支配ノ町々ニ住居ノ醫ヲハ省ク。是延寶七年ノ春改ル處ナリ。

一、大阪ノ家數ハ八萬千六百八軒、橋ノ數ハ八百八橋ナリ。

一、京都ノ家數ハ前ニ見ヘタリ。○寛永十一年上洛條ニ、「今度洛中ノ民屋ニ銀一、家一軒ニ付テ百三十四匁八分二厘」。

一、家一軒ニ付テ百三十四匁八分二厘。

玉露叢

寺院ノ起立轉移其他ノ異動有リタル者若干有リ。

○文政寺社書上。御朱印寺社帳。地子古跡寺

社帳。古跡寺社帳。屋敷書拔。

寺院異動事蹟

圓德寺

延寶七年寺院ニ異動有リタル者ヲ舉グ。

圓德寺

芝金杉ヨリ久保三田ニ移ル。

本寺下總國葛飾郡八幡庄中山村正中山法華經寺末芝三田小山

日蓮宗 常祐山 圓德寺

一、境内不殘御年貢地

拜領地除地等ハ、無御座候。

坪數四百三十八坪。表間口十間三尺。奥行四十五間。

一、開闢起立之儀ハ、寛永元甲子年但シ、月日相知不申候。芝金杉裏四丁目横町南側ニ建立、境内坪數三十五坪也。其後二代目了智院日昌代延寶七己未年建立、五十六年日、久保三田

常喜院屋敷ニ引移リ、境内坪數百四十八坪有之候。——文政寺社書上

一、金杉ニ寛文八申年迄四拾五年罷在候處場所惡敷候ニ付、寺社奉行所へ訴訟申、公儀相濟、延寶七末年當地常喜院屋敷へ引移、金杉之寺ニ致破却、跡ハ俗家ニ仕候。

上高輪久保三田

小湊誕生寺末寺

圓德寺

寺

一、寺内百六拾五坪

中山法華經寺末寺

上高輪村古跡地法花宗圓德寺持來候伊奈半十郎御代官所芝金杉ニ有之、俗地之抱屋鋪、同村久右衛門町々人仁右衛門方へ借金之代差遣度由、寺社奉行所迄願出候通ニ申付候。併以來寺地ニ仕間敷旨、仁右衛門ニ證文申付候由、貞享三丙寅年十月坂本内記重治。より斷之手紙差越圓德寺仁右衛門も此段申來候。且又圓德寺儀、蒙前ハ小湊誕生寺末寺ニ候處中山法華經寺末寺ニ罷成候旨、是又内記より斷申來、右之趣申上候。

地子古跡寺社帳

立行寺

立行寺 是年正月廿六日白金村ノ地ヲ割渡サル。

市街充實時代



延寶七己未年  
正月廿六日渡伊奈半十郎御代官所  
一、白金村千八百拾貳坪六合

立 行 寺

屋敷書拔

寺傳此事ヲ逸スト見エ、文政寺社書上ハ左ノ如ク傳フ。

京都本禪寺末  
麻布白金村  
日蓮宗 智光山立行寺

一、古跡拜領地 千八百拾貳坪六合。  
一、寄進地 四百貳拾壹坪。

安永九年子十二月 佐野屋市左衛門納之。

一、此惣坪貳千貳百三拾三坪。  
一、間數之儀ニ繪圖面略ニ御座候。

右當寺ニ、寛永七庚午年開山日通聖人爲法儀弘通之、於麻布市兵衛町ニ百姓地を求、一  
宇建立仕候。○中三十九年之間年貢地罷有候。其ノ寛文八戊申年二月大火事之砌類火

ニ寺燒失仕候。其節御用地ニ被召上、替地三田白金村當時之場所拜領被仰付候。

本妙寺

本妙寺 圓德寺ニ本妙寺ノ寺號ヲ移ス。  
一、當地 延寶七未年從碑文谷村、  
古跡之寺號引移申候。

白銀村  
碑文谷法善寺末  
本妙寺

一、寺内三百四坪

正源寺

正源寺 芝金杉ヨリ白銀村ニ移ル。

芝増上寺末  
武州荏原郡麻布領白金村  
萬榮山淨喜院正源寺

碑文谷村法花寺末寺同所本妙寺ニ、古跡ニ御座候得共、及頽破相續難成ニ付、白銀村  
ニ御座候同末寺守心比丘尼開基圓德寺地子新地ニ御座候處、圓德寺之潰寺號本妙  
寺を引移申度之旨、本寺法花寺社奉行所へ訴訟申候處、願之通公儀相濟延寶七己未  
年引移申候。  
右坪數亥之年御檢地ニ、拾三坪増、三百拾七坪ニ成申候。由名主申候。  
地子古跡寺社御帳之内白銀村碑文谷法花寺末寺本妙寺と有レ之。

地子古跡寺社帳

一、境内表間 四拾八間、與 六拾壹間、白金村分。  
此坪數貳千九百廿八坪歟。但、御年貢地と古跡地と入。  
組次第相分リ兼候。坪數之儀表相分ケ候義出來兼候。  
大門通表間 五間三尺、與 貳拾貳間餘。  
此坪數百貳拾五坪歟、白金臺町分。  
但、町役町竝相勤候。

一、當寺起立之義ニ慶長八卯年於木挽町一字建立御座候處、其後御用地ニ相成、元和四  
午年芝金杉に轉地之處、其後同斷ニ延寶七未年七月十三日寺社御奉行松平山城守

市街充實時代



殿。○忠於御役所、白金村の轉地被仰付候。當時三代目卓譽林花代の御座候。

——文政寺社書上

地子古跡寺社帳ニハ、延寶八年ヲ以テ引移ルコト見ユ。

芝金杉燒跡  
增上寺末寺

正源寺

- 一、當地五拾壹年
- 一、寺内百五拾八坪

右坪數、亥年御檢地ニ拾六坪增百七拾四坪ニ成申候由名主申候。

白金臺町増上寺末月光院隱居因慶院抱屋鋪へ、芝金杉同末正源寺延寶八庚申年三月寺號引移申付、此地破却仕候。尤跡地町屋ニ不仕、出家職人商人指置申間敷由、正源寺竝所之名主證文仕候。

龍穩寺宿

龍穩寺宿寺地ヲ領受ス。拜領寺社帳ニハ、延寶六年三月ト記ス。

延寶七己未年  
三月十三日渡。伊奈半十郎御代官所。  
一、麻布村七百六拾六坪七合  
但、是迄抱屋敷拜領ニ付渡。

龍穩寺

麻布新堀端御藥園  
屋敷書拔

龍穩寺宿寺

- 一、境内
- 一、拜領地七百六拾六坪七合。

外、三拾三坪之所讓請地。

右の曹洞宗大僧錄關三箇寺之内武藏國越生龍穩寺宿寺境内、前書繪圖面略。之通、延寶七未年當寺貳十六世耕屋普春和尚代拜領仕、御役義相勤罷在候。外之三十三坪之所、文化三寅年八月中五十世慧楷和尚代百姓地面讓請申候。且當宿寺地面往古之儀、竝延寶年中之記錄等々、延享寶曆兩度之類燒たる諸記錄過半燒失仕候ニ付、巨細ニ相分不申候。尤讓請地願濟之儀々、大久保安藝守殿。○忠寺社奉行御勤役中御掛り御座候。

- 一、宿寺開闢々、當時廿五代耕屋普春和尚之御座候。
- 一、權現様御朱印寫、左之通、

龍園寺

寄進 武藏國高麗郡越生之内

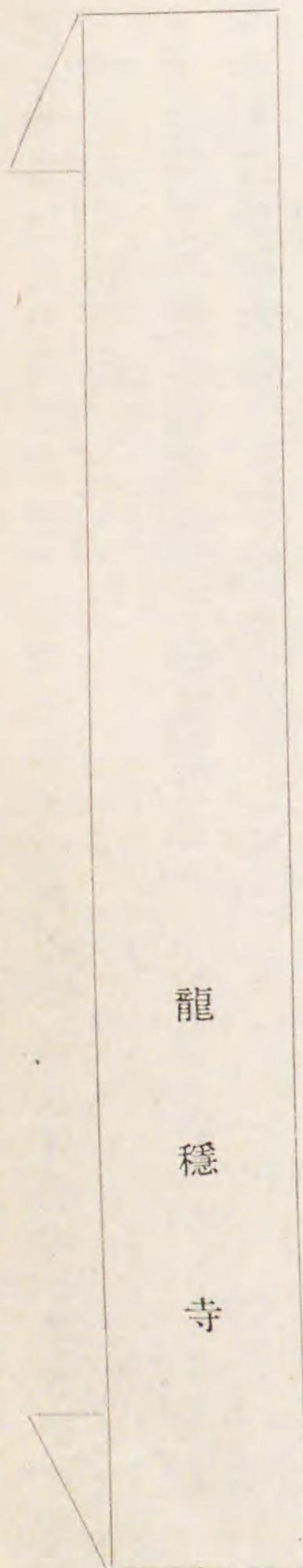
百石之事。

右如先規令寄附訖、殊寺中可爲不入、彌守此旨、佛法相續不可有怠慢之狀、如件。  
大納言源朝臣御花押

天正十九年辛卯十一月日

右御本書、團紙立紙之御認、上包團紙ニ龍穩寺と計有之。

龍穩寺



市街充實時代



一、權現樣御法度御朱印曹洞宗僧錄被仰付拾四代大鐘良賀和尚被下置候寫左之通。

天下曹洞宗法度

一、不在三十年修行成就之人立法幢事。

一、不在二十年修行致江湖頭事。

一、寺中追放之惡比丘僧於諸山許容事。

一、致江湖頭不經五年轉衣事。

竝修行未熟之僧轉衣事。

一、爲末山背本寺之掟事。

右條々若於背此旨之可寺中追放者也。

慶長十七年五月廿八日丸御朱印

龍 穩 寺

台德院樣御法度御黑印寫左之通。

曹洞宗法度

一、非二十年修行成就之人立法幢事。

一、不遂二十年修行致江湖頭事。

一、寺中追放之惡比丘於諸山許容事。

一、致江湖頭不經五年求轉法衣或修行未熟之僧衣事。

一、爲末寺背本寺掟事。

右條々若於違背之輩之速可追放寺中者也。

慶長十七年十月朔日丸御黑印

龍 穩 寺

一、大猷院樣御朱印寫左之通。

當寺領武藏國高麗郡越生之内百石竝寺中守護使不入事。任去天正十九年十一月日

先判之旨永不可有相違。彌佛法興隆不可懈怠者也。仍如件。

寬永十年四月十八日丸御朱印

龍 穩 寺

一、嚴有院樣御朱印寫左之通。

當寺領武藏國高麗郡越生鄉之内百石之事竝寺中守護使不入。任天正十九年十月日

寬永十年四月十八日兩先判之旨令收納。永不可有相違者佛法紹隆無懈怠可動仕者

也。仍如件。○中

一、權現樣御陣中必被下置候御奉札寫左之通。

當表在陣爲屈使僧殊相原并扇子送賜祝着候。委細全阿彌可申謹言。

三月廿八日

大 納 御言  
龍 園 寺



右々奉書紙貳ツ折。

一、太閤様寺中禁制之御朱印寫左之通。

禁制

一、軍勢甲乙人等濫妨狼藉事。

一、放火事。

一、對寺家門前之輩、非分之儀申懸事。

右條々堅令停止訖。若於違犯之輩、忽可被處嚴科者也。

天正十八年四月日丸御朱印

右々御本書團紙立紙ニ御認。

一、太閤様被下置候御奉書寫左之通、

當寺門前并寺領之百姓等、如前々寺家可令馳走候。誰々郡司被仰候共、無異儀之様、涯分可申理候。聊不可有疎意候。恐々謹言。

天正十八年六月朔日

利家 朱印

武龍州

穩寺

右々奉書貳ツ折。

越生山中之畧支蹟

一、地名武藏國高麗郡越生郷境内山林周匝若干畝。

一、開基足利尊氏公六代之後、胤征夷大將軍源義教公嘉吉元年創草之道場ニ御座候。法名之儀、普光院殿從一位大相國善山道慧大居士。

一、山號 長昌山。寺號 龍穩寺。

一、開山 無極慧徹和尚。永享二年十二月廿八日遷化。

一、中興開基備中太守太田右衛門大夫源資清殿世子同苗資長殿、文明年中諸伽藍建立有之、只今之由中興開基と相稱。法名之儀、香月院殿春苑道灌庵主。

一、中興 三世泰叟妙康和尚。明應九年十一月四日遷化。

一、再中興 貳十六世耕屋普春和尚。元祿六年十月廿日遷化。

——文政寺社書上  
麻布村藥園前  
相州最乘寺末寺曹洞宗  
龍穩寺

一、寺内八百壹坪餘

御四代之御朱印頂戴仕、曹洞宗支配仕候。今度於麻布村百姓四人之畑居屋鋪地代之由、求寺地ニ仕度由、寺社奉行所ニ訴訟仕候處、公儀相濟申候由、延寶六年三月板倉石見守○重被申渡候。寺建申儀、園之願相濟申候。——拜領寺社帳

寶運院 正善寺ニ併ス。

今井村 正善寺隱居  
法花宗 寶運院

一、當地 四拾五年

一、寺内 三拾八坪餘

正善寺隱居寶運院、三年以前已年相果、其後正善寺寺内一所ニ成申候由、延寶七己未年

市街充實時代



御帳吟味ニ付、正善寺申來候。

是ニ寺社方カ之帳ニ無御座候。

本妙寺 持添地ヲ買得ス。

——地子古跡寺社帳

越後本成寺末

丸山

日蓮宗 本 妙 寺

本妙寺

古跡拜領地  
一境内四千八百坪。

外ニ無年貢持添地貳百四拾七坪半。

右本妙寺作事願出候處、境内坪數拜領地四千八百坪、無年貢持添貳百四拾七坪半ニ書出候處、寺社方帳面持添地之儀無之ニ付、於寺社方見分差遣、遂吟味候所、延寶七年御仲間七人之屋敷續橫幅五間長サ四拾九間半之地所、引料金差出、家代替ニ仕候。其節、寺社奉行誰方ヘ相頼被差免候と申儀、書留等燒失仕、相知不申由也。右引料金御仲間頭畔柳助九郎大岡金三郎内田與左衛門請取連印之證文差出候。證文之通り右持添地之坪數貳百四拾七坪半と御座候ニ付、隣家之者爲立合、相違無之と申ニ付、拜領地と持添地之境相定候處、生垣爲仕、右持添地之内、家作ニ不及申、貸地等堅ク仕間敷證文申付、寺社方帳面張紙仕候旨、西尾隱岐守○忠方より印形之斷手紙を以て申越候。依之持添地之場所私共見分仕候處、相違無御座候。御帳面ニ相記候様可仕段、享保十八癸巳年三月廿日伺之、御帳面御張紙仕候。

中央寺

中央寺 開山石安禪師是年寂ス。寺ハ元ト真言宗ノ古寺ナリシモ、不安長慶寺ヲ創シテ

——古跡寺社帳

後、是寺ニ隱退改宗スト云フ。

日照山中央寺 深川安宅

境内百七拾坪。

開闢起立之儀、大同三年空海歸朝之砌、此處ニ本尊を安置して住居有之候。大日堂と申傳ニ御座候。其已後覺王院と號し、真言宗にて堂守仕候由。後年無住ニ相成候を、長慶寺開山不安禪師當寺ヘ隱居已後、只今之山寺號ニ改、壹寺ニ取建申候よし申傳ニ御座候。

一、開山大事不安禪師、長慶寺開山ニ由、同開山ニ相立、是より禪曹洞宗ニ相續仕候。延寶七己未年四月十六日寂。大同三年より開山迄真言宗ニ由、其後之義ニ委細相知不申候。

——續府内備考

中央寺 御船藏前町ニアリ。日照山ト號ス。森下町長慶寺末ナリ。大同三年空海カ創建セシ大日堂ト傳ヘ、モトハ覺王院ト號シ、真言宗ノ僧居住セシカ、後長慶寺ノ不安隱棲所トナシ、改宗シテ今ノ山寺號ヲ唱フ。故ニ不安ヲ開山トス。延寶七年四月十六日寂ス。

——府内誌殘編

警火令

八年庚申○延寶〇〇紀元正月十日辛丑○辛丑、三江戸市内ニ警火ヲ令ス。○撰

要錄。

警火令事蹟

警火令 撰要永久錄云フ。

市街充實時代



一、町中火之元念を入候ニ付、近年ハ町方々出火無之處、去年ニ無念ニ仕候と相見、度度町方令燒失候。若重シ火事出來候ハ、遂穿鑿火之本不汰汰ニ仕たる様子ニ候ハ、火元店借は不及申、家主五人組迄爲致籠舍、急度可申付候事。

一、正月さきちやうかさり道具燒候儀、無用ニ可仕旨、被仰渡候間、町中堅相守、向後一切燒立申間敷候事。

一、町方火事之節、火消人足出し候義、頃日懈怠之町々有之、不届ニ候、自今以後、家持致番、壹町々當番兩人相極、人足召連、火元近所ハ早々罷出、町奉行乘廻り候邊ハ相詰、差圖次第情を出し、火消可申事。

右之趣於相背、僉儀之上、當人ニ不及申、五人組名主ニ至迄、急度可申付者也。

申八〇延寶八年正月十一日  
申八〇延寶八年正月十一日  
右御觸、町中連判。  
申渡覺

一、火事之節、町々出候、火消人足、火消候ニ及、其儘罷在、町御奉行衆之御跡ニ殘被申候、與力衆之差圖次第、燒跡之火しめし可申候。尤與力衆差圖無之内ハ、罷歸間鋪候以上。

本所奉行更

任

本所奉行更

任

右ニ奈良屋ニ町々月行事ニ可申渡、致請判候。

廿五日丙辰延寶八年紀元二三四〇年正月〇丙辰三正綜覽本所奉行曾根善次源左衛門辭免シ、書院番林勝明權左衛門代リテ本所奉行ニ任ズ。柳營日記萬天日錄柳營補任寬政重修諸家譜

本所奉行更任 左ノ如シ。

廿五日〇延寶八年正月

本所奉行 曾根源左衛門善次跡

右被仰付之。

一、青山信濃守組曾根源左衛門善次病氣ニ付、本所奉行御免。

柳營日記記

一、同年正月延寶八年廿九日五カ、本庄奉行曾根源左衛門依病氣願ノ通御役御免ナリ、爲代御書院番岡部美濃守組林權左衛門被仰付之。

萬天日錄

本所築地奉行 西御番出役

同〇延寶八年正月廿九〇五歟日願御免。

曾根源左衛門善次

同〇延寶八年正月廿五日御書院番内藤隱岐守組。

林權左衛門明勝

善次左京勝藏源左衛門曾根。

柳營補任

延寶二年五月四日より本所の奉行をつとめ、八年正月二十五日これを辭す。



勝明左兵衛。權左衛門。左兵衛。權左衛門。

承應三年二月二十三日御書院番となり、略。○中延寶八年正月二十五日より本所の奉行をつとめ、略。○下

賜宅記

〔附記〕 賜宅

延寶八庚申年

二月朔日渡。同斷。（○上ヶ地不<sub>レ</sub>知。）

大岡金三郎畔柳助九郎組

御中間壹人分

——屋敷書拔

町奉行更任

二月廿三日癸未

○延寶八年（紀元二三四）

町奉行宮崎重成

○若狹守。病免シ、新番

頭松平忠冬

○與右衛門。町奉行ニ任ズ。

○柳營。日記。萬天日錄。嚴有院殿御實紀。柳營補任。寛政重修諸家譜。撰要。永久錄。町觸。

町奉行更任  
事蹟

町奉行更任

延寶八年二月廿三日町奉行宮崎重成病免シ、松平忠冬之二代ルコト、左ノ諸書ニ見ユ。

廿三日○延寶八

病免。

宮崎若狹守○重成。○中略。

右願之通御役御免。

廿六日○延寶八

町奉行 宮崎若狹守跡。千石御加増。

新御番頭

松平與右衛門冬○忠

——柳營日記

一、同日○延寶八年。二、御役御免ノ面々、

町奉行

宮崎若狹守

一、同○延寶八。廿六日、御役替被仰付。

町奉行

宮崎若狹守跡  
松平與右衛門

——萬天日錄

廿三日○延寶八

町奉行宮崎若狹守重成○中病免す。

廿六日○延寶八

新番頭松平與右衛門忠冬町奉行になりて、千石くはへられ、○下

——嚴有院殿御實紀

政泰半十郎。七郎右衛門。若狹守從五位下。今の呈譜重成に作る。

延寶元年正月二十三日町奉行に轉じ、廩米千俵を加へらる。二年七月二十一日御座間にめされ、政務をとほせたまふの序、政泰が職事に心をつくすことを賞せらる。八年二月二十三日職を辭し、寄合となり、四月朔日死す。年六十一。

忠冬鶴松丸。長八郎。權兵衛。與右衛門。隼人正。從五位下。

延寶四年十月十三日新番頭に轉じ、○中八年二月二十六日町奉行に進み、常陸國眞壁郡の内に於て千石を加へられ、○下

町奉行

——寛政重修諸家譜



延寶八申二月廿三日辭。  
延寶八申二月廿六日新番頭。  
同年八月八日三千石御加增。  
館林殿家老。

宮崎若狹寺重成。  
松平與右衛門忠冬。  
年入正

柳營補任

覺

一、頃日宮崎若狹守様御病氣之付、如御願今日御役御赦免被成候間、町中之る公事御訴  
訟申上候者、出雲守様忠政。島田御番所、可罷出、尤若狹守様御役御赦免之爲御祝義罷出  
候事、常々別御出入仕候町人之外、堅無用之可仕旨、被仰付候間、此旨相心得可申候  
以上。

二月廿三日○延寶八年。

町年寄 三人

撰要永久錄

覺

一、今日松平與右衛門様町御奉行被仰付候、就夫町中之者共御祝之與右衛門様赤坂之  
御屋敷に伺公仕義、前々御出入申候町人之外、一切無用之可仕旨被仰付候、重此方  
申渡候迄、無用之可仕候。面々支配之町中、可被申渡候。以上。

二月廿六日○延寶八年。

町年寄 三人

覺

一、松平與右衛門様、明十六日之町中之者、御禮御請可被成之旨被仰渡候間、町々名主

可罷出候、御進物ハ無用可仕候。尤さかやきそり、麻上下着し、明朝五ツ時奈良屋所迄可  
被參候。御禮之罷出候者共之名を書付、唯今ならや所迄持參可仕候。少も油斷仕間敷候  
以上。

卯月十五日○延寶八年。

町年寄 三人

町觸

將軍家綱葬儀

將軍家綱葬儀事蹟

五月八日丙申○延寶八年(紀元二三四)將軍家綱○德川○薨ズ。十四日壬寅○延寶八年(紀元二三四)之ヲ東叡山下谷區。ニ葬ル。○柳營日記。萬天日錄。撰要永久錄。

將軍家綱葬儀 將軍家綱薨去。

九日○延寶八年。

御一門方諸大名諸役人登城之處、老中列座被仰出候之、昨晚被遊薨御候。大納言様川網  
吉。に御奉公可仕旨、御遺言之趣、被仰渡之。——柳營日記  
一、同年五月。九日御家門方並諸大名登城御黒書院下段、雅樂頭忠清。美濃守葉正  
則。老中列座、公方様御不例、御養生叶ハセラレス。昨夜亥ノ上刻薨御被成候。大納言様  
へ不相替可被勤之旨、御遺言之趣、演達ス。——萬天日錄

東叡山葬儀。

十四日○延寶八年。

一、酉刻北跳橋より御棺出御供奉行列。

市街充實時代



一、大納言様申刻御本丸へ渡御於御休息間被遊御燒香還御。  
一、御遺體於東叡山就可有御送葬酉刻北跳橋より御出棺供奉行列。  
一、御道筋辻固。

一、北刎橋より竹橋迄、

小笠原壹岐守長 石川若狹守良 總

一、竹橋より一橋御門際迄、

松平伊豆守輝 信 酒井日向守能 忠

一、一橋より御堀際中山勘ヶ由脇迄、

松平備前守信 正 三浦志摩守次 安

一、勘ヶ由脇より津輕越中守屋敷迄、

津輕越中守政 信 小堀和泉守恒 政

一、内藤和泉守屋敷筋違橋御門際迄、

内藤和泉守勝 忠 永井信濃守長 尙

一、筋違橋より本多下野守屋敷前、

本多下野守平 忠

一、御步行町、

松平加賀守綱 紀 前田藤堂和泉守久 高

一、御步行町を黒門迄之間、

榊原式部大輔倫 政 石川主殿頭憲 之

二王門より本坊へ御入棺及戊刻既而御棺前に御靈供七五三奉備之御法事光明供御執行日光御門跡御燒香御作法等有之。

一、今日大久保加賀守朝 忠 自八時分東叡山に相越所々巡見及刻限爲御棺御迎登城此節凌雲院實成院信解院護國院覺成院同道之實成院護國院を御供但九條袈裟懸之殘

三人を先達る歸山。  
一、今夕供奉衆之事、

神尾飛彈守知 元 堀山城守行 直  
瀧川相摸守章 具 小出下野守里 守

右四人之御小性衆自帷子長袴着之御棺之御先御刀御脇差替々持之。

一、御側衆三人之内二人。

一、御輿之番頭。

一、御小性衆小納戸衆非番不殘。

一、大森信濃守直。頼 竝新番頭遠山半左衛門則。景 兩人を御先に參上。

一、御膳奉行二人但一人は御先。

横山甚右衛門通。一 坪内柰助昌 定



一、御右筆二人。

是々今朝落髮之儀申上付、任其意今夕御供可仕之旨、因幡守松平信興、美濃守稻葉正則、

一、御書物奉行、

池田勘兵衛貞雄

一、御鷹師頭、

清水權之助吉春

小野吉兵衛次隆

一、御厩方、

小栗庄右衛門重正

諏訪部彦兵衛直定

御馬口取三人

一、御細工頭、

矢部四郎兵衛房定

一、御臺所頭、

天野五郎太夫勝正

但、組頭と平組之者、御先に參上。

一、御同朋三人、

細阿彌 仙阿彌 長阿彌

一、御大工、

鈴木修理長頼

御披官大工 壹人。御手大工頭 壹人。

平大工 五人。同心小頭 壹人。

一、御小人頭、 牧野金助重正

御挾箱持 六人。

御傘持 二人。

御草履取 二人。

一、御駕籠頭、 高橋與左衛門

御駕籠之者 十人。

一、御鍵持 五人。但、御鍵五本。

一、御膳所組頭壹人同御臺所人四人。

一、小間遣頭一人。

御膳所小間遣五人。内一人御組頭。

御膳所六尺四人。

一、不落髮、御供之面々、

市街充實時代



中奥御小性衆。同御番衆。

柳生對馬守在。宗

御目付 日根野權十郎方。弘

御腰物持御藥込之衆一所。

寄合 村越伊與守直  
御日付 源兵衛治。重  
御小性組 矢島三左衛門充。義

右之外御供之事、御在世之時、上野御佛殿御參詣之供奉行列之通也。

一、押之事、例々四人雖出之、今度ハ八人也。

但、常ハ侍と中間入交付、侍と中間之間爲可相隔之四人増之。

一、今日御先ハ參上之衆、

酒井雅樂頭清。忠 稻葉美濃守則。正 松平因幡守興。信

御奥番頭 酒井壹岐守忠。同上

安宗恪。吉田 宗悅直。塙 上池院宗。純

一、御先ハ參上之内、御番之事。

御目付二人、御歩行目付四人、御小人目付六人、火之番五人、内一人頭、右之分々從本坊

御席所ハ奉移御遺體迄ハ毎日件之通可相勤之。

但、御目付衆々自翌日一人充不絶可爲勤仕。

一、黒門より二王門迄、百人組勤番也。

御廟所ハ御遷座迄、毎日晝夜一組充可勤仕、但、御入棺事畢、以後、御宮後脇と車坂兩所ハ出入ニ勤之。

一、本坊表門、惣御持弓御持筒より一組充、毎日晝夜可勤之。

但、御入棺事畢、以後ハ、清水町口屏風坂兩所ハ出入ニ勤仕すへし。

一、御宮後脇 笥五郎太夫近。正 一、車坂口 蜂屋七兵衛吉。定 一、屏風坂口 松平内藏

助勝。正 一、清水町口渡邊彌之助。

一、松原之内ハ惣御先手之内より四組充勤番、但、御弓頭二組、御鐵砲頭二組、是々今日計勤仕也。

一、仁王門 松平和泉守久。乘 鐵砲廿挺、弓十張、鎗廿本、侍十四五人、

一、清水口 青山大膳亮利。幸 徒侍共、足輕三十人。

一、常行堂 酒井日向守能。忠 鐵砲十挺、弓五張、鎗廿本、侍六人、足輕廿五人。

一、法華堂 久世出雲守之。重 右同斷。

一、車坂 増山兵部少輔彌。正 鐵砲五挺、弓五張、鎗十本、侍五人、足輕廿人。

一、屏風坂 毛利刑部少輔知。元 右同斷、但、六人ハ御廟所ハ御入棺以後令勤番。

一、本坊之御番、御書院番一組之内より半組晝夜勤仕。

一、本坊之玄關、御歩行頭壹組之内半組勤番。

一、御遺體御廟所ハ御遷座迄、小納戸衆當番晝夜詰不寢、御寺迄可相勤之、但、如常可爲

隔番。

一、小性衆小納戸衆當番御先。

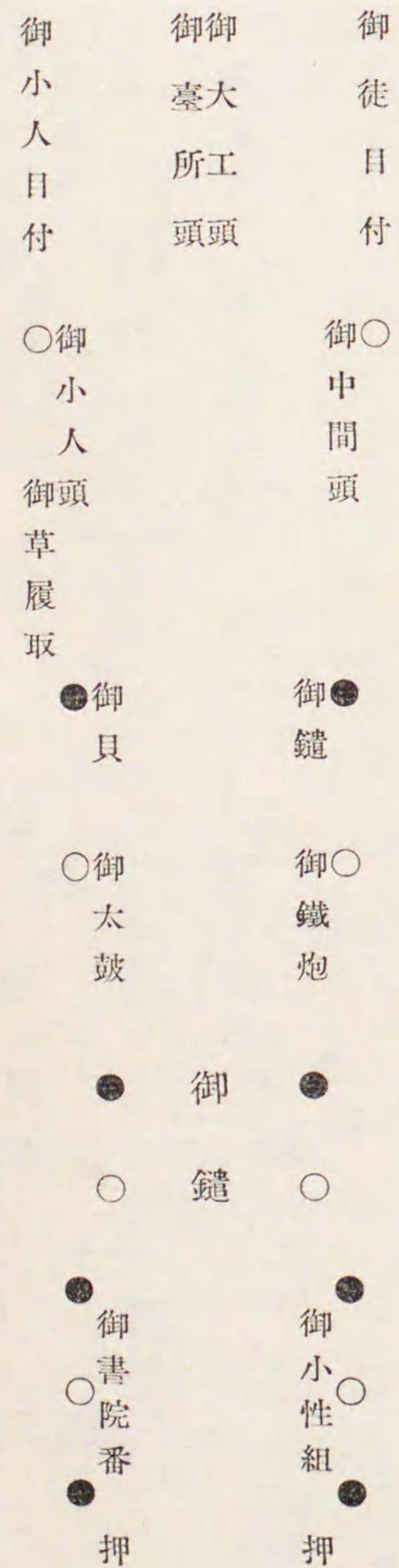
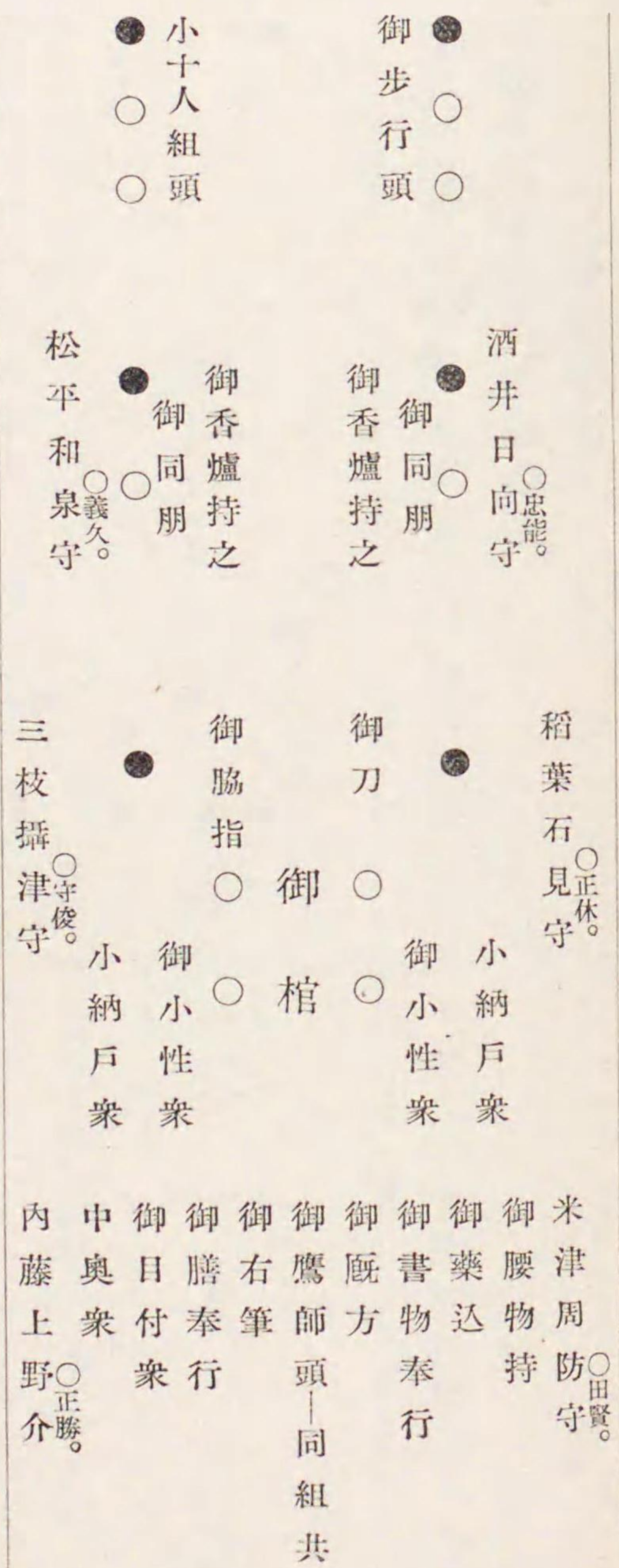
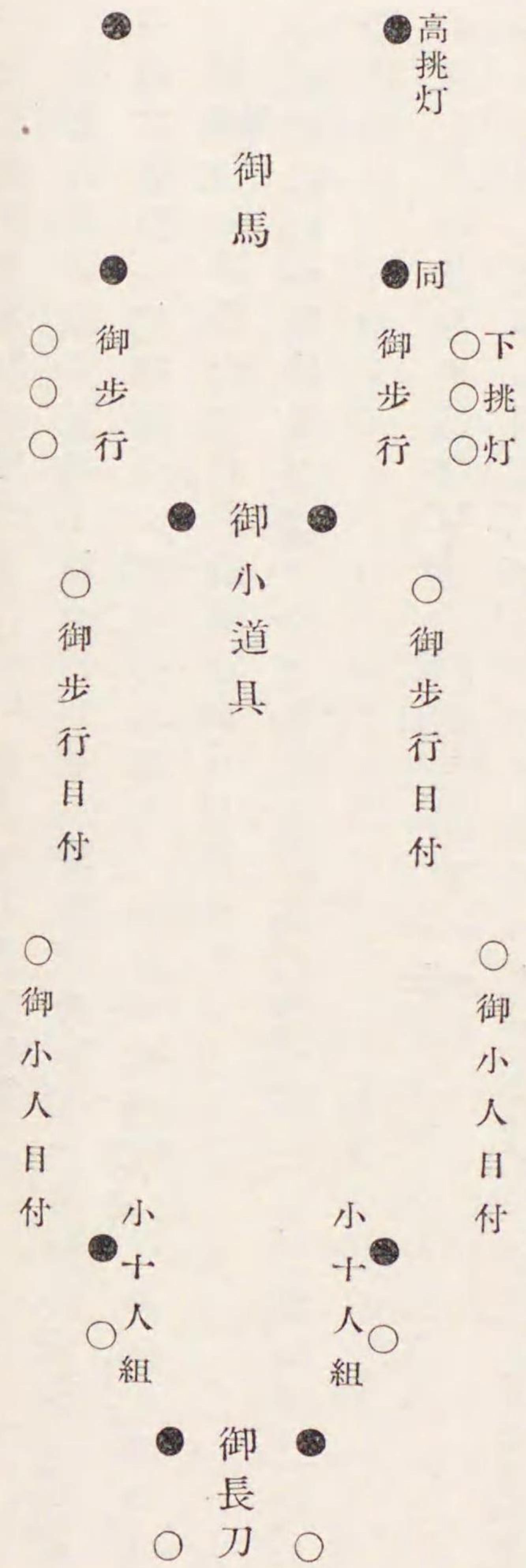


但、小納戸衆之内圖取之三人御本丸相殘。

一、小納戸衆、大久保兵九郎直○忠、松平傳左衛門正○利、甲斐庄三郎左衛門衛門正興○次田、市兵衛輔○盛、大久保一郎右衛門好○長、坂本小左衛門治○重、上野之相詰、御本丸御番不勤之、於殘内晝夜勤番之。

一、御右筆杉浦半左衛門勝○爲、小鳥次郎左衛門貞○重、兩人兼日依被仰付、東叡山參上勤之。

一、落髮之輩御本丸に御用付る罷出候節も、羽折白衣之可令登城由也。  
一、今夕御本丸、堀田備中守俊○正、石川美作守政○乘、二丸、内藤若狹守頼○重









御挑火 酒井雅樂頭

衣冠 奧番頭之内二人

落髮之御小性御小納戸中奥衆表向落髮之面々此所御跡供奉

右

御棺 御脇差

御挑火

衣冠 奧番頭之内二人

稻葉美濃守 土井能登守 松平因幡守 右三人御先

左

但御脇差御劍之御棺之前堀山城守神尾飛驒守瀧川相摸守小出下野守替々持之

衣冠 松平山城守 平野丹波守 那須遠江守 久世雲守 酒井日向守

挑火

御鍵 御步行目付

挑火

阿部美作守

挑火

衣冠 松平泉守 青山大膳亮 增山兵部少輔 毛利刑部少輔 板倉石見守

挑火

挑火

衣冠 甲府中將殿之御使

御步行目付 挑火

衣冠 德松殿御使

押

千代姫君御方之御使

御步行目付 挑火

奉葬畢。

正面案一脚構。三具足備之。

次誦經行道。此間衆僧燒香。

次後唄。三拜退出。

一、御鷹三居於御廟前令放之。

一、同年五月八日。十三日。中東叡山へ御入棺ニ付彼御山ノ所々勤番被仰付面々、

柳營日次記

二玉門

清水口毘沙門

堂前谷中口

法花堂表口

常行堂表口

市街充實時代

松平和泉守 青山大膳亮 久世出雲守 酒井日向守



車坂

屏風坂

火之番

同斷

右招殿中、御老中傳達之。

黒門ヨリ二王門ノ間

御本坊表門

御本坊遣持

同大廣間

右ハ、晝夜替々可相勤之旨。

御番所四ヶ所

是ハ、此夕御目付被遣之場所。可引渡旨也。明十四日計勤仕之。略。中

一、同○延寶八 十四日○中尊棺今晚東叡山へ被爲入ニ付、供奉被仰付之。

一、御入棺御道筋

北勿橋御門ヨリ出御、竹橋御門、一ツ橋御門通御堀端、三浦志摩守前通、宮崎織部、中山勘

解由脇坂道、津輕越中守前迄、夫ヨリ内藤和泉守前脇坂戸田采女正脇松平加賀守脇道、

御先手筒。

増山兵部少輔  
毛利刑部少輔  
那須遠江守○彌○資  
平野丹波守○長○政

百人組  
御持筒  
御歩行一組  
御書院番半組宛  
御小姓組

松平和泉守 酒井日向守

石川主殿頭道通、上野黒門へ戊ノ上刻被爲人。  
右御道筋警固ノ面々、

北ハ子橋ヨリ

竹橋マテ内

竹橋御門當番

同御門之外

一ツ橋御門當番

同御門之外

宮崎織部屋敷

中山勘解由脇

津輕越中守前マテ

内藤和泉守脇ヨリ

筋違橋御門際マテ

筋違橋御門當番

同御門外

御歩行町

市街充實時代

石川若狭守

小笠原壹岐守

稻垣信濃守○重

酒井日向守○伊豆

松平伊賀守○伊豆

小出伊勢守○英

三浦平備前守

小出和泉守○小

津輕越中守

内藤和泉守

永井信濃守

西尾八兵衛○包

本多下野守

松平加賀守

五九三



同石橋迄ノ内

石橋ヨリ黒門迄ノ内

黒門ヨリ内

仁王門ヨリ本堂迄

谷中道通稻荷迄ノ内

右之通辻々警固横町ハ竹垣ニテ結切提灯立置侍足輕凡差置。

一家綱公薨御春秋四十歳今十四日酉刻御城御出棺戊ノ上刻東叡山御着棺。○行

一、同日○延寶八年。酉刻御送葬。自御本坊へ。

着衣袖袈裟。

御導師

諸天讚

鑪

鉢

九重錫杖

同智讚

藤堂和泉守

松平飛騨守○前田  
榊原式部大輔○利明。田

石川主殿頭

百人組近藤彦九郎  
○用將。

大久保加賀守

松平大藏大輔○前田  
正甫。

毘沙門堂門跡

寒松院

護國院

松林院

等覺院

明淨院

福聚院

薰香

遊圓珠院

奉納箱

禪智院

燒香

長樂寺權僧正

鎖龕

喜多院權僧正

起龕

宗光寺權僧正

尊塔

千妙寺權僧正

嘆德

凌雲院僧正

始經

真光寺權僧正

御送棺行粧

一 觀

理光院

二 實成

院

三 叡

門院

四 妙道

院

五 普

龍院

六 津梁

院

七 現

城院

八 覺成

院

九 教

禪院

十 護光

院

十一 修

院

十二 唯心

院



十三	明	王	院	十四	養	壽	院
十五	樓	本	院	十六	元	光	院
十七	吉	祥	院	十八	常	照	院
十九	東	漸	院	二十	寶	勝	院

○行列略。

一、御引導 毘沙門堂門跡。

智白汝知日之所爲善善之法偏宜遠之積惡之道益其川之口無代自心無自欺勿抱內壺勿揚外儀欲人之譽畜己之私投義之始陷禍之基自特其德必有餘議自矜其達必有餘非眷屬集樹汝宜日之綴誦意勿他思安禪禮像其則勿虧利羶毛繩汝宜畏之自行之際擇而思之懲惡之餘何則是宜清香式炷紅蓮數枝口勿非量衣節食其志勿移造世文筆如佛誠之說之人長短如法譏之縱對賓侶口勿多辭頻驚光影座而勿銷時芭蕉質非汝久期蓮華淨土是汝真俾夜作畫勤而行之

延寶庚申五月廿六日

一、御棺ノ上ノ書付 人見友元書之、如左。

寬永十八歲辛巳八月三日降誕。

征夷大將軍正二位右大臣右大將源家綱尊大君之柩。

延寶八歲庚申五月八日斃。

後龜山院今上皇帝御武臣

征夷將軍新田大納言從二位源朝臣綱義略。中

一、御棺ノ寸法、四方六尺、高九尺。但二重ナリ。木ノ厚サ四寸。棺ナリ。底板ハ、椀也。  
 御束帶飾太刀、靴ノ御沓、御笏。但、御手ヲ紐セ玉ヒテ持レ之セラル。  
 御棺ノ内、明礬ト朱ト小キ袋ニ入テ詰之。棺ノ下ニ臺アリ、足付也。棺昇榿、榿長六間。人數百七十人ニテ昇。

覺

——萬天日錄

一、明十四日晝七ツ半時分、御棺榿上野に被爲入候間、町中之者共、何方に去不罷出、火之用心之儀念を入、月行事ハ、自身裏々迄度々廻り、無油斷可申付候。尤御棺榿御通道筋に一切罷出申間鋪候。前方相觸候通、表之間數に應じ、手桶に水を入出置可申候。町々之名主月行事、前後之木戸に附居、喧嘩口論萬事物噪敷事無之様、愈念入可申付候。以上。

五月十三日〇延寶八年。

町年寄

人

——撰要永久錄

嚴有院靈屋  
營造

十一日己亥〇延寶八年(紀元二三三四)〇己亥、三正綜覽。幕府忍〇武藏國城主阿部正武〇美作守ニ命  
 故將軍家綱〇徳川ノ廟所ヲ東叡山下〇市内ニ營造セシム。十二日庚子〇延寶八年(紀元二三三四)〇庚子、三正綜覽。廟所及靈屋用地ノ寺院ヲ外ニ移ス。六月十一日  
 戊辰〇延寶八年(紀元二三三四)〇戊辰、三正綜覽。勅使臨ミテ家綱〇徳川ニ嚴有院ノ謚號ヲ贈ル。

市街充實時代

五九七



嚴有院靈屋  
營造事蹟

七月廿九日丙辰○延寶八年(紀元二三三四年)○丙辰三正綜覽老中佐倉○下總國城主大久保忠朝○加賀守命ヲ受ケテ靈屋營造ヲ總督ス。大久保忠直○兵部松平利正○傳左衛門坂本重治○小左衛門奉行タリ。八月十三日己巳○延寶八年(紀元二三三四年)○己巳三正綜覽小濱○若狭國城主酒井忠義○左衛門尉靈屋營造ヲ助役ス。九年辛酉○延寶九年(紀元二三三四年)○辛酉三正綜覽四月廿一日甲辰○延寶九年(紀元二三三四年)○甲辰三正綜覽上棟シ。廿二日乙巳○延寶九年(紀元二三三四年)○乙巳三正綜覽遷座ス。是ヨリ先三月十六日庚午○延寶九年(紀元二三三四年)○庚午三正綜覽正武○阿部美作守ノ家士ニ授賞有リ。十九日癸酉○延寶九年(紀元二三三四年)○癸酉三正綜覽忠義○酒井左衛門尉及家士ヲ賞シ。四月十六日己亥○延寶九年(紀元二三三四年)○己亥三正綜覽奉行以下ヲ賞ス。五月十五日丁卯○延寶九年(紀元二三三四年)○丁卯三正綜覽忠朝○大久保亦賞ヲ受ク。此外七月廿四日乙亥○延寶九年(紀元二三三四年)○乙亥三正綜覽及天和元年辛酉○紀元二三四一年十二月廿五日甲辰○延寶九年(紀元二三三四年)○甲辰三正綜覽一〇延寶九年(紀元二三三四年)乙亥三正綜覽。二〇延寶九年(紀元二三三四年)丁卯三正綜覽。三〇延寶九年(紀元二三三四年)己巳三正綜覽。四〇延寶九年(紀元二三三四年)辛酉三正綜覽。五〇延寶九年(紀元二三三四年)癸酉三正綜覽。六〇延寶九年(紀元二三三四年)乙巳三正綜覽。七〇延寶九年(紀元二三三四年)丁卯三正綜覽。八〇延寶九年(紀元二三三四年)己巳三正綜覽。九〇延寶九年(紀元二三三四年)辛酉三正綜覽。一〇〇延寶九年(紀元二三三四年)癸酉三正綜覽。

命有リ。  
十一日○延寶八年五月。

阿部美作守○正武

右召之於上野御廟所御普請御手傳被仰付之。

柳營日記記

十一日○延寶八年五月。奏者番阿部美作守正武東叡山御廟處之普請人夫を出す事を奉る。

憲廟實錄

一、同○延寶八年五月。十一日東叡山御廟所出來ニ付御手傳。

阿部美作守

萬天日錄

播磨守正能嫡子幼名善七郎後美作守。

四代日  
阿部姓  
阿部豊後守正武

一、同○延寶八年庚申五月十一日東叡山嚴有院樣御廟御用被仰付之。

寛政呈譜

用地寺院轉移

十二日○延寶八年五月。

一、御廟所御佛殿出來之地元光院津梁院圓壽院東漸院裏之上迄右四ヶ寺立替地被下之引料可被下之旨。

柳營日記記

一、同○延寶八年五月。十三日略。中叡山ノ内衆徒坊中三ヶ所元光院圓珠院津梁院等ノ寺地、今度御廟所ノ御用ニ付被召上、竝同所東漸院後ノ山、是又就御用被召上、右ノ替地引

萬天日錄

料可被下之旨、昨日被仰出。  
○延寶八年九月十七日○終日雨天。

市街充實時代



一、嚴有院樣御用地付<sub>〇</sub>替地竝引料被下之次第、

一、金子七拾兩

右唯今迄之屋敷差上、於本庄今村傳助上ヶ屋敷被下之、爲引料右之金拜領之。

一、金四百五拾兩

一、同百八拾兩

一、同百五拾兩

一、同百三拾兩

一、同百貳拾兩

一、同四拾兩

一、同三拾兩

右嚴有院樣御佛殿御用地付<sub>〇</sub>被召上之替地并右之通以坪數積少餘分、爲引料金子被下之。

一、同月<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>十九日<sub>〇</sub>中<sub>〇</sub>太田久米之介上野谷中口ノ屋鋪、嚴有院樣御用地ニ付

テ被召上之、爲替地本庄ニテ屋敷被下、金子七十兩被下。

假竣成 柳營日次記ニ、

廿二日<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>五月<sub>〇</sub>

吉田 乘之助<sub>〇</sub>久馬助<sub>〇</sub>貞侯<sub>〇</sub>敷

元 光 院

等 覺 院

林 廣 院

圓 壽 院

長 福 寺

加 納 院

本 龍 院

— 日記

— 萬天日錄

阿部美作守

右御廟所假出來に付、二九<sub>〇</sub>登城。

十三日<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>七月<sub>〇</sub>

一今度上野假御廟所御普請中相勤、御褒美被下之。

金十兩

稻生兵右衛門

菊池彦太夫<sub>〇</sub>重

靈屋營造掛員任命及助役

〇延寶八<sub>〇</sub>七月<sub>〇</sub>廿九日<sub>〇</sub>曇<sub>〇</sub>

一、嚴有院殿御靈屋御普請付<sub>〇</sub>、大久保加賀守朝<sub>〇</sub>、忠被仰付之。

一、嚴有院殿御靈屋御普請付<sub>〇</sub>、大久保兵九郎直<sub>〇</sub>、忠松平傳左衛門正<sub>〇</sub>、利坂本小左衛門重

治。事奉行被仰付之。

— 日記

二十九日<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>七月<sub>〇</sub>中略<sub>〇</sub>。執政大久保加賀守忠朝嚴有院贈大相國公之靈廟造建之惣奉

行を奉ル。

六日<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>八月<sub>〇</sub>中略<sub>〇</sub>。嚴有院贈大相國公靈廟營建之人夫ハ、酒井左衛門尉忠義奉る。

— 憲廟實錄

廿九日<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>七月<sub>〇</sub>中略<sub>〇</sub>。

一、嚴有院樣御靈屋御普請惣奉行大久保加賀守被仰付之、且大久保兵九郎坂本小左衛

門、松平傳左衛門、同斷奉行被仰付之。

十三日<sub>〇</sub>延寶八<sub>〇</sub>八月<sub>〇</sub>中略<sub>〇</sub>。

市街充實時代



右嚴有院様御佛殿御普請奉行被仰付之。○七月廿九日  
條ニ見ユ。

大久保加賀守○忠

右御同所御手傳被仰付之。

酒井左衛門尉○忠

追諡

柳營日記

十一日○延寶八年 勅使大炊御門内大臣經光公法皇使小川坊城大納言俊廣卿本院使  
綾小路中納言俊景卿新院使今城中納言定淳卿女院使西洞院三位時成卿宣命使平松  
少納言時方朝臣ならびに山口少内記定清青木右兵衛尉某等參向ありて、東叡山に參  
堂し、日光新門跡天真法親王毘沙門堂門跡公海出座し、酒井雅樂頭忠清稻葉美濃守正  
則はじめ諸老臣をよびその事にあづかる輩みな伺公し、少納言時方靈幄にむかひ宣  
命をよむ。正一位大政大臣ををくり進らせられ、嚴有院殿と御諡進らせ給ふ。主上法皇  
本院新院女御御手寫の經ををくりたまひ、其ほか攝録竹園門跡清華院近の月卿雲客、  
みな書寫の經をおさめ奉らる。

嚴有院殿御實紀

立柱上棟等日時定

三月十日○延寶九年 雨下。今日從頭中將隆□朝臣御教書到來嚴有院佛殿方  
日時定宣下也。

三月十三日○延寶九年 晴。今日令東帶參内。巳刻嚴有院佛殿堂供養□陣義、上卿勸修寺大  
納言奉行頭中將□辨瀨定、兩局少外記友昌、少史利昭。其外如例參集也。

師庸朝臣記

三月十三日○延寶九年 晴。今日嚴有院殿魄屋上棟立柱開眼供養遷座等日時定。  
朝間立柱上棟。午刻開眼遷座云云。

上卿	勸修大納言	三條大納言
奉行	宗顯朝臣	隆真朝臣
辨	瀨定	基量卿記

地形築初

○延寶八年 八月廿八日快晴○  
略。

一、嚴有院様御靈屋、今日地形築初ニ付、奉行并御普請手傳之面々、相越東叡山、所謂大久  
保加賀守、并大久保兵九郎松平傳左衛門坂本小左衛門、御普請手傳酒井左衛門尉阿部  
美作守也。

——日記

二十八日○延寶八年 略。今日より嚴有院贈大相國公之靈廟之址墓を築く。奉行大久  
保加賀守忠朝なり。酒井左衛門尉忠義阿部美作守正武人夫を出ス。宴を奉る。

——憲廟實錄

材料及工事入札其他 町觸ニ、

覺

一、今度嚴有院様御佛殿御作事ニ付、槻檜松榊末口物此外何木ニも、江戸又ハ何方ニ  
市街充實時代



持候とも書付仕、明十一日晝迄之内、駿河臺ニ有、大久保兵九郎殿御宅へ持參仕候者共、樽屋所へ理ニ可被參候、急之儀ニ有之候間、少々遅々仕間敷候旨、町中不殘可被相觸候。以上。

八月十日〇延寶

町年寄

人

一、今般上野御佛殿御作事ニ付、町中石屋所持仕候石書付、明日中ニ大久保兵九郎殿御宅へ持參可申候。若當地ニ無之、何方ニ成共持候、其分ヲ書付持參。右之書付持參候者共ハ、樽屋所へ其斷可申來候。此旨、町中不殘可被相觸候。以上。

八月十七日〇延寶

町年寄

人

一、上野御佛殿御造榮、御入用之材木、入札ニ被仰付候間、望之者ハ、來廿六日、廿八日迄之内、大久保兵九郎殿御宅へ參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

八月廿三日〇延寶

町年寄

人

一、上野御佛殿御造榮、ニ付、御入用之小買物、入札被仰付候間、望之者ハ、明三日、四日兩日之内、松平傳左衛門殿、大久保兵九郎殿ニ手寄次第參、御注文寫取、入札可仕候。札御披候日限、來ル八日五ツ時分、坂本小左衛門殿御宅へ參、請人召連、入札持參可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

閏八月朔日〇延寶

町年寄

人

一、今度上野御佛殿井戸御ほり被遊候付、桶師井戸ほり日用三色入札被仰付候間、望之

者ハ、明十五日坂元小左衛門殿御宅ニ參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

閏八月十四日〇延寶

町年寄

人

一、先日相觸候上野御佛殿御作事ニ付、桶師井戸堀小屋夫入札被仰付候處、札數少ク、其上入札之直段高直ニ有之由ニテ、札御入直させ被成候間、右之品々望之者ハ、明廿五日、廿六日兩日之内、坂本小左衛門殿御宅ニ參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

閏八月廿四日〇延寶

町年寄

人

一、御佛殿御用之錫鑊、御買上ケ被成候間、右之商賣人望之者、明廿四日朝迄之内、松平傳左衛門殿御宅へ參、御注文寫取、同廿五日四ツ時分、傳左衛門殿御宅へ入札持參可申旨、町中不殘可被相觸候。

九月廿三日〇延寶

町年寄

人

一、御佛殿御作事ニ付、壁塗屋根葺瓦師入札被仰付候間、右之諸職人望之者、來ル五日、大久保兵九郎殿御宅へ參、御注文寫取、同七日五ツ時分、札御披候間、請人召連、伺可仕旨、町中不殘可被相觸候。

一月二日〇延寶

町年寄

人



一、上野御佛殿外ケ輪石垣築手間入札ニ被仰付候間、望之者ハ、明十六日之朝、十七日迄之内、上野御普請小屋へ參御注文寫取可申候。來ル十九日四ツ時分札御披被成候間、家質仕度仕、請人召連參候様ニ、町中不殘可被相觸候。以上。

町年寄

人

一、今度上野御佛殿就御普請細工人銅瓦葺塗師蒔繪書右之手間取共可出情候。無情成者ニ可爲曲事候。右之手間取共、此旨爲申聞情可出候。急度相觸候様可被申付候。

町年寄

人

廟所石垣竣成

十四日〇延寶九年三月

東叡山嚴有院贈大相國公之御廟所石垣造營之功を終り、〇下

憲廟實錄

上棟安鎮

廿一日〇延寶九年四月〇中略

一、於東叡山嚴有院様御堂今卯刻上棟之御規式、首尾能相濟之由、奉行之面々注進。

延寶遺錄

廿一日〇天和元年四月〇中略。此日嚴有院殿靈廟上棟并に安鎮あり。事にあづかるともがら監臨し、大工鈴木修理に行平御太刀一振鞍馬一匹給ふ。

常憲院殿御實紀

遷座

廿三日〇延寶九年四月〇中略。

尾張中納言殿

大道寺立蕃頭

水戸宰相殿

山邊右衛門

紀伊中將殿

戸田市郎右衛門

紀伊中納言殿

水野隱岐守〇重

尾張中將殿

遠山彦右衛門

水戸少將殿

太田新藏

右者、昨夕上野御遷座首尾能相濟候付、被差上之躑躅之間、内膳正〇板倉出座、各退去。

延寶遺錄

廿二日〇延寶九年四月。東叡山にて布薩戒。天真法親王并に公海出座あり。

廿三日〇延寶九年四月。山にて供養あり。合行曼陀羅供、導師天真法親王つかふまつる。公卿參堂せらる。よて阿部豊後守正武代參す。舞樂被物あり。

常憲院殿御實紀

勅額下賜

二月廿六日〇延寶九年。今度上野ニ嚴有院ノたまや造立之。仍テ門ノ額被染勅筆。今日於御前拜見。

額御傳授之後、未神社之額不被染勅筆、御代始ノ額之あそはしそめニ魂屋ノ額尤不

可宜歟、不可言之。

堯恕法親王記

四月七日〇延寶九年。天晴。油小路前大納言入來。稱明後東行之由、謁之被退出了。入夜内府被來被稱明後東行由、益酌退出了。

今日左衛門督〇難波持勅額東行發足。

兼輝公記



四月七日<sup>〇</sup>延寶晴。難波相公<sup>〇</sup>宗關東へ發駕勤額使、勅額昨日出來。文字金字、縁黒漆、別

ニ紙ニ寫一枚被遣。青蓮院宮發足。爲武家法事導師。

——基量卿記

四月八日<sup>〇</sup>延寶嚴有院殿勅額使難波宰相殿<sup>〇</sup>兼左衛門督宗量。發足。

九日、嚴有院御一周忌御法事贈經使從禁裏大炊御門内大臣<sup>〇</sup>經本院<sup>〇</sup>油小路大納言

貞<sup>〇</sup>隆新院<sup>〇</sup>日野黃門<sup>〇</sup>資女御<sup>〇</sup>愛宕三品御發足。妙門青門毘門御法事ニ付御下向。

——百式錄<sup>〇</sup>偏年史料收。

銅燈籠獻建

三月七日<sup>〇</sup>延寶大久保忠朝ノ用人ヨリ大平宗次樋口兼忠へ書面到來、又其趣ニ曰、

嚴有院様上野御佛前へ被獻候御燈籠、來ル二十一日ヨリ來月七日迄之内御勝手次第

第可被獻候。此旨各迄可申達之由、加賀守被申付候。何頃可被獻哉、日限可被仰聞候。此

方ニテ割致候付、如此候。以上。

三月九日<sup>〇</sup>延寶

角田 數馬  
近藤吉左衛門

上杉彈正大弼様

御留守居中

同年<sup>〇</sup>延寶九 十一日、嚴有院殿ノ御佛前へ銅燈籠御献上ニ付テ、大久保忠朝ノ官邸へ

窺問フ書ヲ遣サル。其趣ニ曰、

覺

一、銅御燈籠四月二日出來仕筈ニ御坐候間、三日献上仕度候。場所地築爲仕ニ御坐候間、前場所御渡可被下裁之事。

一、銅御燈籠銘書御差圖可有御座候哉、但、勝手次第可仕候哉之事。

以上

右之通相調、忠朝ノ官邸へ大平宗次持參スル處、右場所相渡サル、日限ハ重テ申入へシ、銘書ノ儀ハ前々上野へ獻セラル、通ノ趣ニテ、延寶九年五月八日ト相調フヘキ旨差圖也。其内上野御普請役吏松平傳左衛門大久保兵九郎坂本小左衛門へ使价ヲ以テ場所地築等ノ儀窺問シ玉フヘキ由、差圖アリ。

四月二日<sup>〇</sup>延寶大久保忠朝ノ用人ヨリ書面ヲ以テ告達ノ趣ハ、上野へ被獻候御燈籠

今月五日ヨリ同七日マテノ内建立アルヘシ、彼地御普請場マテ家來差出御奉行衆へ

仰入ラレ、御燈籠ノ場所請トラセ、五日ヨリ地形等拵フヘキ旨、御留守居中マテ告達也。

右御請トシテ忠朝ノ官邸へ大平宗次參仕、夫ヨリ東叡山へ高坂三之丞政之同伴ニテ、

宗次罷越、御普請奉行松平傳左衛門大久保兵九郎坂本小左衛門へ右ノ旨趣申達、御燈

籠場所請取、明後四日ニ地形、同五日臺石ヲ居、同六日ニ御燈籠獻セラル處也。

四月六日<sup>〇</sup>延寶今般嚴有院殿ノ一周御忌ニ付、東叡山御靈前へ銅燈籠ヲ獻セラル。去

四日右場所請取、地築相極、同五日地盤石ヲ居へ、同六日建之。高地盤石上場ヨリ寶珠マ

テ八尺二寸、地盤石高地ヨリ八寸、差渡四尺五寸。



右燈籠ノ銘

奉獻

武州東叡山 銅燈籠兩基。

嚴有院殿 尊前。

裏ニ御釜屋

堀野山城大掾清次作之。

延寶九年辛酉五月八日米澤城主從四位下侍從兼彈正大弼藤原朝臣綱憲

右御燈籠建極ルニ付上野御普請奉行松平傳左衛門大久保兵九郎坂本小左衛門へ今日大平宗次此ヲ告達ス。大久保忠朝ノ官邸へ宗次ヲ以テ右ノ旨ヲ仰遣サル。

上杉年譜○綱

三月廿八日○延寶及暮嚴有院殿御廟所へ御献上ノ銅燈籠二基柴田中務長屋前へ飾ラセ御覽。

四月二日乙酉○延寶嚴有院殿御廟へ御献上ノ胡銅燈籠兩基今日東叡山へ奉納ニ就テ公儀使三好助左衛門ヲ率ヒ小梁川修理斗披露之公沐浴シ玉ヒ内對面所へ御出聽セラル。

十二日乙未○延寶御献上ノ胡銅燈籠製作ノ賞鑄師淨久ニ判金百枚石工勝太夫ニ判金三十枚銘彫工後藤彦右衛門ニ銀子二十枚湯村長右衛門ニ給三領齋藤安右衛門ニ銀子五枚渡邊久之丞ニ二枚德江左衛門佐藤次助高橋甚兵衛ニ各一枚賜之。

伊達次家記録山○背

授賞

一、同○天和元 十六日阿部美作守武○正家來御褒美被下。

阿部美作守家來

銀卅枚。時服二。羽織。

高木與惣兵衛

同廿枚。時服三。

川野半右衛門

同 斷。

大岡十右衛門

銀十枚。時服二。

三宅惣左衛門

同 斷。

石川彌太夫

同 斷。

鈴木六太夫

右者、今度上野御普請御石垣御手傳相勤候付テ爲御褒美被下之。

天和日記○萬天

十四日○延寶九年三月○中略。嚴有院靈廟構造の助役せし阿部美作守正武が家人等時服羽織

常憲院殿御實紀

銀賜ひ褒せらる。

正武○善七郎。美作守。豊後守。從五位下。從四位下。侍從。

天和元年三月十四日東叡山嚴有院殿御寶塔造營の事をつとめしにより、其事にあづかれる家臣等に時服白銀をたまふ。

寛政重修諸家譜



忠義初忠治。小五郎。左衛門尉。從五位下。從四位下。  
○酒井。天和元年三月十九日嚴有院殿御靈屋をよひ御廟の普請をつとめしにより、時服を  
たまひ、家臣等にも時服白銀等をたまふ。  
——寛政重修諸家譜

一、同日延寶九年五月十五日。大久保加賀守御前に被爲召備前ノ助成之御刀代金廿五枚拜領  
之。是ハ今度上野御法度相濟付テ、爲御褒美被下之由。  
——萬天日録

十五日天和元年五月。大久保加賀守忠朝前代靈廟成功の勞を褒せられ、御手づから備  
前助成の御刀を給ふ。  
——常憲院殿御實紀

忠朝初教廣。木工。奎之助。出羽守。加賀守。從五位下。從四位下。侍從。致仕號木工頭。後號二  
木工。大久保。

七月二十九日延寶八年。常憲院殿のおほせをうけたまはり、御靈屋造立の惣奉行をつ  
とむ。天和元年五月十五日先に嚴有院殿一回の法會及び御靈屋造營の惣奉行  
を勤めしにより、御手づから備前助成の御刀をたまふ。  
——寛政重修諸家譜

一、同日天和元年四月十六日。二、大久保兵九郎松平傳左衛門坂本小左衛門

右三人御前に被爲召之、諸大夫之被仰付之。是ハ嚴有院様御小納戸衆也、今度上野御普  
請奉行ニ付罷有候。  
——天和日記萬天日録同。

十六日天和元年四月。寄合松平傳左衛門利正大久保兵九郎忠直坂本小左衛門重治從五

位下に叙し、利正は下野守後に右近將監。忠直は伊豫守、重治は右衛門佐と稱す。嚴有院殿靈  
廟の奉行たるをもてなり。

廿六日天和元年五月。嚴有院殿靈廟成功をもて、大目付内藤新五郎正方、坂本右衛門佐  
重治、町奉行北條新藏氏平、鎗奉行酒井小平次忠村、持筒頭秋山十右衛門正房、持筒頭久  
永源兵衛重之、落合源右衛門道勝、堀田五郎右衛門一輝、寄合松平右近將監利正、大久保  
伊豫守忠直、儒員人見友元、宜卿に、各金時服羽織等をたまひ、又右筆小普請奉行、賄頭、勘  
定組頭、代官、大工頭、植木奉行、被官、大工頭、同大工、手大工等にも、金銀時服たまふこと差  
あり。酒井左衛門尉忠義も、人夫出したるをもて、その事にあづかる家人に時服羽織、銀  
たまふ。  
——常憲院殿御實紀

利正初正光。市之丞。市左衛門。傳左衛門。右近將監。下野守。右近大夫。從五位下。

略。上この日延寶八年七月廿九日。大久保兵九郎忠直、坂本小左衛門重治と共に、御廟新造の  
事をうけたまはる。○中、天和元年四月十六日造營終りしかば、從五位下、右近將監に  
叙任し、東叡山にして、周忌のみほう會をせりし、のち、五月二十六日御靈屋つくられ  
しを奉行せし賞行れて、時服四領、羽織一領に、黄金三枚を副てたまはり。

忠直平十郎。長九郎。伊豫守。從五位下。致仕號伊豫入道。

この日延寶八年七月廿九日。松平傳左衛門利正、坂本小左衛門重治とともに、おほせをか  
ぶり、御靈屋普請の事を奉行し、○中、天和元年四月十六日造營をはるにより、從五位



下伊豫守に叙任し、五月二十六日時服四領羽織一領黄金三枚をたまふ。  
重治初重秀。久五郎。小左衛門。右衛門佐。内記。從五位下。

この日延寶八年七月廿九日、大久保兵九郎忠直松平傳左衛門利正と同じく御靈屋造營の  
事とを奉行すべきむね鈞命を蒙り、後略中先にうけたまはりし營作事畢るにより、

天和元年四月十六日從五位下に叙せられ、右衛門佐に任す。略。中  
二十六日天和元年五月、御靈屋造營の奉行をつとめ、御法會の中も其席に候せしを賞  
せられて時服四領羽織一領黄金三枚を賜ふ。——寛政重修諸家譜

廿四日延寶九年七月○中略。

銀百枚。

金子五十兩

大佛師  
左 鑄物師  
権名 伊豫 京

右者上野御佛殿御造立御用相勤候ニ付被下之。席檜之間。大久保加賀守出座。

——延寶遺錄

一、同日天和元年十一月廿五日、上野嚴有院様御佛殿御用相達候付テ、繪師共ニ不殘并石屋久  
三郎爲御褒美白銀時服等被下之。

狩野 永眞 狩野 養朴  
洞雲 同 探信

同 探雲 同 左衛門  
同 宮内 同 久壽  
同 内記 同 春雪  
同 求馬 同 内匠  
同 主税 同 主膳  
同 左門

——天和日記

右拾五人に金八百兩被下之。

一、嚴有院殿家綱公御 延寶八年庚申五月八日薨去。元光院津梁院圓珠院三寺地、本院  
東北地モ切テ靈殿ノ地トナル。同九年靈殿落慶。附官田千三百石、充供料。勅額靈元院震  
翰。貞享二年乙丑二月石寶塔ヲ唐金ニ改。元祿十一戊寅年九月六日靈殿燒失。御廟殘ル。  
尊躰御位牌別當所へ移シ奉ル。元祿十二年己卯年三月靈殿成ル。御寶塔本尊如意輪觀  
音。

——東叡山記

〔參考〕 玉露叢二、

一、當年延寶八年、嚴有院様高嚴院様、右兩御靈屋共ニ御造立ト也。就夫上野御普請丁場  
ニ、十二月十日ニ石切ト薦ノ者口論ヲ仕出シ、双方ノ仲間立別レテ、力量ニ任セテ  
タ、キ合ケル程ニ、大勢兩方ニ怪我シタル族多キ也。其喧嘩更終テ御穿鑿ノ上、双方

市街充實時代



増上寺刃傷

ノ當人ヲ牽舍被仰付ケルトナン。是ニ依テ一兩日御普請相止ケリ。  
一、鳶ノ者六、酒井左衛門尉殿支配ト云。  
一、石切ハ阿部美作守殿支配ナリ。

増上寺刃傷  
事蹟

六月廿六日癸未○延寶八年(紀元二三三四) ○癸未(三正綜覽) 増上寺○市内芝區 法場ニ於テ、鳥羽○志  
國摩城主内藤忠勝○和泉守 宮津○丹後國 城主永井尙長○信濃守 ヲ刺ス。廿七日甲申○延寶八年(紀元二三三四) ○甲申(三正綜覽) 忠勝○和泉守 ニ死ヲ賜ヒ、七月九日丙申○延寶八年(紀元二三三四) ○丙申(三正綜覽) 其封ヲ除キ、府邸ヲ收ム。尙長○永井信濃守 亦嗣無クシテ除封シ  
邸地ヲ收公セラル。○日記。柳營日次記。常憲院殿御實紀。憲廟實錄。

増上寺刃傷 左ノ如シ。

廿六日○延寶八年  
六月○中略。

一、今七過、於増上寺本堂初夜之御經之節、内藤和泉守○忠勝 致亂心、永井信濃守○尙長 を脇指ニテ切殺候。同座有之遠山主殿頭直○頼抱 留之、伊奈兵右衛門○忠易 御預ケ。

——柳營日次記

一、同八年○延寶 六月廿七日、昨日七ツ時分於増上寺本堂、永井信濃守ヲ内藤和泉守切殺申候。信濃守當死。依テ和泉守切腹被仰付之。

上使

板倉石見守

檢使

渡邊大隅守  
能勢惣十郎  
御徒目付

——萬天日錄

二十四日○延寶八年 増上寺ニテ嚴有院贈大相國公之追福ニ御法夏あり。奏者番土屋相模守政直、永井信濃守尙長奉行たり。内藤和泉守忠勝、永井伊賀守直敬副ふ。廿六日○延寶八年 増上寺の御席ニテ和泉守忠勝佩刀を抜て、信濃守尙長を殺す。即日ニ忠勝ニ死を賜ふ。志摩國鳥羽の城を收ム。尙長も子なくして、丹後國宮津の城を收ム。

——憲廟實錄

この日○延寶八年 増上寺の法場に於て、内藤和泉守忠勝失心し、佩刀をぬき、永井信濃守尙長をさしころす。遠山主殿頭頼直はしりよりて、和泉守忠勝を抱留しかば、關東郡代伊奈兵右衛門忠易へめしあづけらる。

この日○延寶八年 内藤和泉守忠勝西久保春龍寺にて死をたまふ。寺社奉行板倉石見守重種大目付渡邊大隅守綱貞目付能勢惣十郎元之組頭中山平右衛門勝早監臨す。  
——常憲院殿御實紀

收封收邸

九日○延寶八年  
七月。

市街充實時代



右領知屋敷被召上旨、家來可立退旨、内藤新五郎○正を以被仰付之。

内藤和泉守  
永井信濃守

右同斷、大井新右衛門直○政を以被仰遣之、是内證願有之。

柳營日次記

九日○延寶八年。さきに縁山○中略の永井信濃守尙長を切害したる内藤和泉守忠勝が封地志摩國鳥羽城三萬三千二百石并に府邸收上せらる。信濃守尙長も子なきをもて、丹後國宮津城七萬三千六百石餘同しく收公あり。この信濃守尙長は、尙征か三男にて、兄ども世を早うしければ、よつぎとなり、寛文六年五月廿七日はじめて見え奉り、八月十二月廿七日從五位下に叙し、土佐守と稱し、後に信濃守にあらため、延寶二年正月十日家をつき、七年十一月朔日奏者番となり、今年六月廿七日忠勝が爲に害せられしなり。又和泉守忠勝は、飛驒守忠政が次男なり。兄忠重病氣によりよつぎとなり、寛文十年十二月廿八日叙爵し和泉守と稱し、延寶元年九月十一日家繼、ことし縁山の警衛うけたまはりしが、發狂して尙長を害し、死をたまはりしなり。——常憲院殿御實紀

忠勝尙長二人ノ邸ヲ收公後、轉賜スル所有リタルコト、下文之ヲ記ス。

高巖院靈牌所營造

八月六日壬戌○延寶八年紀元二三四。老中土井利房○能ヲ總奉行トシテ高巖院○德川家綱夫人淺姫顯子。靈牌所○市內ヲ營造ス。小姓組庄田安利○小左衛門書院番永井茂虎○傳之ヲ奉行ス。掛川○遠江國城主井伊直武○伯耆守。役ヲ助ク

高巖院靈牌所營造事蹟

九年辛酉○延寶〇一年紀元二三四。六月十八日己亥○己亥、三成功シテ、奉行及直武○伊井家人等受賞ス。○柳營日次記。萬天日錄。町觸。東叡山記。天和。日記。憲廟實錄。常憲院殿御實紀。寛政重修諸家譜。

高巖院靈牌所營造

高巖院ハ、將軍家綱夫人伏見宮淺姫顯子也。延寶四年八月五日薨ズ。

奉行任命

○延寶八年八月六日○快晴。

一、高巖院殿御佛殿御普請付、惣奉行土井能登守○利房。手傳井伊伯耆守武○直。被仰付之。伯耆守事依、爲在所、奉書を以右之趣相達之。

安藤壹岐守組  
永井傳八郎○茂

森川攝津守組  
庄田小左衛門○安

右兩人事、御普請中奉行被仰付之旨、老中列座、加賀守保忠朝○大久。傳之。席

御右筆部屋縁類。

——日記

六日○延寶八年八月。

御靈屋御普請中奉行

森川攝津守組  
庄田小左衛門  
安藤壹岐守組  
永井傳四郎  
惣奉行  
土井能登守

在國奉書

御手傳 井伊伯耆守被仰付。

右高巖院様御靈屋御普請奉行、且能登守へ差引可承之由、被仰付之。

市街充實時代



——柳營日次記

六日〇延寶八 高巖院太夫人之靈廟營建之惣奉行を執政土井能登守奉る。井伊伯耆守直武、人夫を出す事を奉る。

——憲廟實錄

一、同〇延寶八 六日〇中 高巖院様御靈屋御造營付テ、惣奉行土井能登守、御手傳井伊伯耆守、下奉行庄田小左衛門、右之通被仰付候。但伯耆守事在所ニ在之付テ、御奉書以テ被仰付之。

——萬天日錄

工事

一、今度高巖院様御佛殿御造營ニ付、御入用之材木入札ニ被仰付候間、望之者ハ、長田馬場ニシテ永井傳八郎殿御宅ニ參、御注文寫取、入札仕候様、町中不殘可被相觸候。以上。

町年寄

人

閏八月十七日〇延寶八年

一、今度高巖院様御佛殿御造營入用之小買物小屋夫桶井土ヶ輪屋根葺井土堀、砂利土瓦、入札被仰付候間、望之者ハ、明廿九日晦日兩日之内、長田馬場永井傳八郎殿御宅ニ參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

町年寄

人

閏八月廿八日〇延寶八年

一、今度高巖院様御佛殿御造營御入用之薄、入札ニ被仰付候間、望之者ハ、明十七日庄田小左衛門殿御宅ニ參、御注文寫取可申旨、町中不殘可被相觸候。以上。

町年寄

人

九月十六日〇延寶八年

——町觸

竣成

一、同日〇天和元年 五月廿二日。二、井伊伯耆守登城會老中ニ退出。是ハ東叡山高巖院様靈屋御普請手傳相勤之、頃日御造畢付テ。

一、同日〇天和元年 五月廿二日。二、庄田小左衛門、永井傳八郎、右兩人ハ、右御普請奉行相勤之付テ、是又登城調加賀守〇大久保 忠朝。而令退去、席菊の間。

——天和日記〇萬天 日錄同。

授賞

一、同〇天和元年 六月。十八日ニ、高巖院殿御佛殿御普請相濟付、御褒美被不之。

御普請奉行

永井傳八郎

庄田小左衛門

御被官大工  
鈴木與次郎

吉田又兵衛

甲良豊前

井伊伯耆守家來

銀三十枚。時服三。羽織。

銀十枚。時服三。羽織。

同斷。

小野七郎左衛門

越石半左衛門

水野彌五右衛門

市街充實時代



銀十枚。時服二。羽織。

同斷。

增田助右衛門  
水野門右衛門

——天和日記

十八日○天和元 東叡山高巖院靈牌所成功により、奉行せし書院番永井傳八郎茂虎  
小姓組庄田小左衛門安利、金時服羽織賜ひ、助役せし井伊伯耆守直武か家人にも銀時  
服羽織下さる。  
——常憲院殿御實紀

利房○七助。能登守。從五位下。從四位下。侍從。

八月六日○延寶 高巖院殿の御佛殿造立により、このことを奉行すへきむね仰下  
され、事就て備前長義の御刀をたまはる。

直武○菊千代。萬千代。伯耆守。從五位下。

天和元年六月十八日東叡山高巖院殿御佛殿の造營を助けしにより、其ことにあつ  
かりし家臣等に物をたまふ。

安利○萬千代。三左衛門。小左衛門。下總守。從五位下。

寛文七年十一月二十一日御小姓組の番士となり。○中 天和元年六月十八日高巖院

殿御靈屋普請のことにあづかりて、時服三領、羽織一領及び黄金三枚たまふ。

茂虎○初尙照。傳八郎。

寛文三年十一月十九日御書院番に列し。○中 天和元年六月十八日高巖院殿御佛殿

御造營の奉行を勤めしにより、時服三領、羽織一領及び黄金三枚をたまふ。  
——寛政重修諸家譜

入佛供養

五日○延寶九

年八月。東叡山高巖院太夫人之靈廟之上棟遷座。

一、同日○天和元年 二、上野高巖院様御靈屋出來付テ、昨日御入佛、今日御供養有之付

テ、御老中松平因幡守興。信被遣之。 ——天和日記

五日○天和元年 高巖院殿靈牌所遷座上棟により、大久保加賀守忠朝土井能登守利

房、社奉行稻葉丹後守正徳監臨し、安鎮執法あり。大工木原内匠重弘銀三十枚下さる。

六日○天和元年 上棟により日光門跡天真法親王の許に大久保加賀守忠朝使して、銀

百枚布施し給ひ、毘沙門堂門跡公海へ時服二十、衆僧に銀三百枚下さる。

——常憲院殿御實紀

一、高巖院殿 嚴有院 御臺所。延寶四丙辰年八月薨去。高巖院殿從一位月澗圓真大姉ト號ス。伏

見貞清親王ノ公女。延寶八年庚申御靈屋御造營。御寶塔本尊彌陀。附五百石充供料。 ——東叡山記

〔附記〕 高巖院佛供料

廿日○延寶九年

四月○中略。



一、高巖院殿爲御佛供料、新規五百石御寄附之、同別當春性院自分之普請料金子五百兩並殘材木古屋被下之旨、觀理院信解院に於波之間板倉内膳正殿○重被仰渡之。

延寶遺錄

廿日○天和元年。高巖院殿供養料五百石寄たまふ。又作事料五百兩並に靈牌所遣材を別當春性院廣海に下さる。

内藤氏永井氏邸其他收授

九日乙丑○延寶八年(紀元二三三四年)○前内藤忠勝○泉守和。邸永井尙長○信濃守。邸其他

他ヲ收授ス。十五日辛未○延寶八年(紀元二三三四年)○辛未、三正綜覽。○ニモ屋鋪ヲ賜フ者有リ。

日記。柳營日次記。寛政重修諸家譜。子爵大河内家回答。萬天日録。寛政呈譜。

内藤氏永井氏邸其他收授事蹟

内藤氏永井氏邸其他收授。賜ニ上收スル所ノ内藤忠勝邸永井尙長邸ヲ松平信輝其他

ニ賜ヒ之ニ伴フ邸宅ノ收授有リ。

八月九日○延寶八年○中略。

一、屋鋪被下之所謂。

内藤和泉守○忠勝上屋敷

松平山城守元屋敷

永井信濃守○尙長上屋敷

右之通被下之旨、老中列座、雅樂頭○酒井傳之、席山吹間。

九日○延寶八年○中略。

松平○重治。山城守に  
永井○直圓。城守に  
松平○信輝。之丞に  
伊豆○守に

日記

堀田正俊  
牧野成貞

永井信濃守上ヶ屋敷

伊豆守上ヶ屋敷

備中守上ヶ屋鋪

内藤和泉守上ヶ屋敷

山城守上ヶ屋敷

右之通屋鋪被下之。

豐橋藩

延寶八年庚申八月九日轉二橋御門内屋鋪於筋違橋御門内賜之。一橋屋鋪賜堀田屋鋪永井信濃守尙長(内藤和泉守忠勝、殺尙長、依尙長沒收領知)舊宅也。

子爵大河内家回答○豐橋藩。

成貞○從四位下。侍從。備後守。幼名兵部成恒。後藏人。號大夢。

延寶八年八月九日壹萬石御加増、御側被仰付、於西丸下堀田筑前守元屋敷拜領。

寛政呈譜

永井直圓ハ、是年八月七日新ニ和州新庄一万石ヲ賜ヘル也。

○延寶八年○中略。

八月七日○中略。

一、永井信濃守事、先頃不慮之儀有之、而相果領地被召上之、弟有之由依被及聞召、今日弟

万之丞並永井伊賀守○直青山和泉守○忠殿中召之、新規壹万石萬之丞被下之旨、

市街充實時代



上意之趣、雅樂頭酒井忠清傳之。老中列座。席山吹間。

直圓初直員直好萬之亟。大膳。靱負。能登守。從五位下。

延寶八年八月七日兄尙長不慮の横死せしにより、その城地をおさめらるといへども、弟あるよしをきこしめされあらたに直圓に大和國新庄にをいて一萬石をたまひ、これより後菊間廣縁に候す。

寛政重修諸家譜

○延寶八年八月十五日 快霽。中略。

一、永井信濃守尙鮫ヶ橋之下屋敷萬之亟永井直圓被下之旨、永井伊賀守青山和泉守

の老中列座有之、大久保加賀守忠申渡之。本庄上野ニ有之下屋敷被召上之。

一、内藤和泉守勝下屋敷小日向内藤伊織忠勝弟ニ被下之。濱町屋敷被召上旨、

内藤出雲守清に加賀守申渡之。

一、同延寶八年八月永井萬之丞ニ鮫ヶ橋之下屋敷被下置、本庄ノ屋敷上ル。

一、内藤和泉守弟伊織、小日向ノ下屋敷被下、濱手ノ屋敷上ル。

一、同延寶八年八月永井萬之丞ニ鮫ヶ橋之下屋敷被下置、本庄ノ屋敷上ル。

十二日 戊辰延寶八年八月町奉行松平忠冬徳川徳松勘定頭甲斐庄正親喜

軍綱 吉男 側衆ニ轉ジ、晦日 丙戌延寶八年八月勘定頭甲斐庄正親喜

内藤忠知

町奉行更任

町奉行更任

右衛門

町奉行更任

町奉行更任 左ノ如シ。○日記。萬天日録。町觸。

松平與右衛門冬忠事、徳松様被附之、知行三千石被下之。

但、只今迄取來貳千石ニ、惣領被下之、云々。

一、次、甲斐庄喜右衛門親被召出之、町奉行被仰付之。

一、同延寶八年八月晦日、御役替、松平與右衛門跡甲斐庄喜右衛門に於御座之間、町奉行ニ

被仰付之。

十二日 〇延寶八年八月 町奉行松平與右衛門忠冬、徳松君に付られ、あらたに三千石給ひ、

原祿二千石は、その子吉十郎忠成にくださる。

三十日 〇延寶八年八月 勘定頭甲斐庄喜右衛門正親は、町奉行となり、〇下

常憲院殿御實紀

町奉行 同延寶八年八月八月八日三千石御加増

松平與右衛門 忠冬

甲斐庄飛驒守 正親

元祿三年八月晦日御勘定奉行より、一人宛可罷出旨。

柳營補任

市街充實時代

六二七



覺

一、今日松平與右衛門様御事、御加増拜領被成、德松様之御付被成候。町中御訴訟之儀申上候者ハ、出雲守様忠政、御番所之可罷出候。尤與右衛門様之爲御祝儀罷出候者ハ、常々別御出入仕候町人之外、堅無用被御付候。以上。

八月十二日延寶八年

町年寄

人

一、今日甲斐庄喜右衛門様町御奉行之被御付候。就夫町中之者御祝之喜右衛門様元誓願寺前之御屋敷之伺公仕儀、前々御出入申候町人之外、一切無用之可仕旨被御付候。重此方申渡候迄ハ、無用之可仕候。此旨面々支配之町中、可被申渡候。以上。

八月晦日延寶八年

町年寄

人久撰要永

覺

一、甲斐庄喜右衛門様諸大夫被爲成、甲斐庄飛彈守様と申候間、左様之相心へ可申候。時分柄之候間、必御悅之上り申間敷候。以上。

十二月廿九日延寶八年

町年寄

人久撰要永

大風雨

閏八月六日壬辰。延寶八年紀元二三三四年。江戶大風雨、海嘯有り。倒潰家屋三千四百廿餘戸ニ及ビ、溺死者七百餘人ヲ出シ、兩國橋内ヲ損ズ。災變

大風雨事蹟

大風雨 顛末變災篇ニ記述ス。

同月延寶八年。六日巳ノ刻ヨリ風雨、午ノ刻ヨリ未ノ刻迄強雨也。依テ風破水損夥シ。江戶中吹タラシタル家三千四百廿餘、本庄深川方々ニテ溺死七百餘人、ヌレ米廿萬石餘也。本庄深川木挽町築地芝へムケテ高潮ノアグル、所ニヨリ家ノユカヨリ四尺五尺、或ハ七尺八尺也。又ハ床ノ上五寸六寸モアリ。前代未聞ノ沙汰也。——玉露叢六日。延寶八年。風雨甚く、深川本所濱町靈岩島鐵炮洲八町堀海上漲上テ、家やぶれ人溺る。——憲廟實錄

閏八月六日延寶八年。大風雨、深川本所濱町靈巖島鐵炮洲八丁堀海水漲り上テ、家を損し人溺る。兩國橋損し往來止る。谷中法恩寺本堂梁折れて半傾く。了翁僧都再建の東海道筋所々浩波あふれて民家を溺らす。——武江年表

兩國橋改架

十一月丁酉延寶八年。寄合船越爲景門。松平忠勝女ヲ奉行トシテ、兩國橋内ヲ改架セシム。六日壬辰。城主眞田信利賀守。役ヲ助ノ風水災ニ損破シタルヲ以テ也。沼田野國上。城主眞田信利賀守。役ヲ助ク。乃仮橋ヲ谷藏前ニ架ス。然ルニ橋材備足スルニ至ラズ。天和元年辛酉紀元二四一年。十一月朔日庚戌正統。爲景左門。忠勝采女。ニ閉門ヲ命ジ、廿三日壬申天和元年。信利伊賀守。ノ封ヲ除キテ、山



形前國。城主奥平昌章次郎。ニ預ケ、其府邸ヲ收ム。○日記。天和日記。柳營日記。次。記。甘露叢。地誌。御調書上。寬

兩國橋改架

諸家譜。

兩國橋改架 成ラズ。既ニシテ江東市街撤退ノ舉有ルヲ以テ、本橋ノ架設ヲ停メ、往還假

橋ニ由ル。

○延寶八年 閏八月十一日 晴

一、松平采女勝。船越左門景。爲兩人殿中招之、兩國橋懸直奉行被仰付之旨、於菊間、老中

列座、土井能登守房。利傳達之。

十一日 八月 延寶八年 閏 中略。

舟越左門

松平采女

右兩國橋掛直奉行被仰付之。

柳營日記

十一日 八月 延寶八年 閏 松平采女船越左門兩國橋を改メ架る奉行を奉る。

憲廟實錄

一、同日 天和元年 十一月朔日。兩國橋御普請奉行松平采女舟越左門、右兩人昨日閉門被仰付之。

○柳營日記

一、同年 天和元年 十一月。廿三日、真田伊賀守利。信義、今度兩國橋御材木之義ニ付テ不埒成仕形、

其上家中并領内之仕置惡敷段及上聞、重疊不届被思召、依之領地被召上之、伊賀守真松

平小次郎昌。章。平 依御預ケ、惣領彈正信。貞。田 真。淺野内匠頭長。矩。依御預ケ之旨、昨日

評定所ニテ水野右衛門大夫春。○坂本右衛門佐治。○重 兩町奉行何表出座、上意之旨申渡之。

二十三日 天和元年 十一月。上野國沼田城主真田伊賀守信利か所領三萬石を没入して、奥平

小次郎昌章ニ預けらる。子彈正信成を淺野内匠頭長矩ニ預けらる。兩國橋を改架する

により信利ニ領地より材木を出すべきことを命じ給ふに、教を奉じて無狀なるうへ、

平生之處行并家中領内之政教、宜を乖くゆへなり。

一、廿三日 天和元年 十一月。真田伊賀守儀、於評定所被仰渡。

伊賀守儀、今度兩國橋御材木之儀ニ付、不埒成仕形、其上常々家中并領内之仕置惡敷、士

民百姓迄困究仕段達上聞、重々不届被思召、依之領地被召上、伊賀守儀奥平小次郎へ御

預、嫡彈正真。淺野内匠頭へ御預ノ旨、被申渡。

一、天和元辛酉年霜月、兩國橋かけかへの奉行松平采女船越左門閉門被仰付候。是當年

中に橋かけ渡し可申候由上意をうけ候て、當月に至て橋の柱さへしかじか寄不申候

に付る也。

一、霜月廿二日 天和元年。

真田伊賀守を 奥平小次郎に御預ケ。

真田 彈正を 淺野内匠に御預ケ。

武藤源三郎を 遠藤外記に御預ケ。



真田辰之助を 仙石越前守に御預ケ。

右は、兩國橋之材木を伊賀守領上野沼田山より無滞出し渡し候半と、兩國橋御請合申候町人と約束致金子を請取候て、材木をば出し不申候御科故也。——御當代記

信利 ○兵吉。伊賀守。從五位下。

天和元年十一月二十二日信利兩國橋の普請を助け勤むるところ、材木の事により、不束のきこえあり、しかのみならずつねに行跡正しからず、且封地の制度もよからざるのむね上聞に達し、御氣色かうぶりて、城地を沒收せられ、奥平小次郎昌章にめしあづけらる。

爲景 ○左太郎。左門。

船越 ○左門。

延寶八年閏八月十一日仰によりて兩國橋普請の事を奉行し、天和元年十月二十九日そのことにより越度ありて閉門せしめられ、十二月八日ゆるさる。

忠勝 ○半三郎。采女。半左衛門。

八年 ○延寶。閏八月十一日兩國橋を修造あるのとき、其ことを奉行す。天和元年十一月朔日越度のことあつて閉門せしめられ、十二月八日ゆるさる。

——寛政重修諸家譜

覺

一、兩國橋御掛ケ直シ一式之事、假橋一式之事、御材木藏之内假橋之道筋木戸橋土橋竹

垣惣地形迄之一式之事、古橋望之者ハ入札之事、右之品々入札望之者ハ、明後廿七日朝五ツ時分ハ同晦日迄兩日之内、松平采女殿御宅へ罷越、仕様帳寫取、來ル霜月八日之朝五ツ時分ハ舟越左門殿御宅へ右入札ニ敷金指添可致持參候。此旨町中不殘念を入急度相觸可申候。少も油斷有間敷候。以上。

十月廿五日 ○延寶八年。

町年寄

人

——町觸

一、天和元酉年同國橋。掛直御修復、並矢之御藏ハ本所堅川北口ハ假橋相掛申候。其節本橋御普請御手傳真田伊賀守様、爲御奉行之御普請御奉行松平采女様船越左衛門様被仰付候處、本橋御材木出度役不足、橋出來兼候間、御手傳真田伊賀守様奥平大膳大夫様ハ御預ケニ相成、松平采女様船越左衛門様御兩人閉門被仰付候。

但、右矢御藏ハ相懸り候假橋之儀、本橋御取掛り之以前、松平采女様船越左衛門様御懸りニ致出來、其後本橋御取懸り之處、右様ニ御預ケ閉門等被仰付候ニ付、元祿

九子年迄拾六年之間、右假橋ニ致往來候。尤右年月中假橋御修復等々、伊奈半左衛門様

御預ケ御掛り之由。——地誌御調書上

府邸ヲ收公セラレタルコトハ、下文抄スル所甘露叢ニ、「天和元年十二月廿五日ノ條、真田伊賀守上ケ屋敷永井伊賀守賜之ト有リ。

〔參考〕 伊賀守。延寶八年。

市街充實時代



附記  
上野新道  
及黑門轉  
移工事

太筭や六江のはし兩國橋

〔附記〕 上野新道及黑門轉移工事

一、上野新道並黒門御付替引家之御普請、入札被御付候間、望之者來ル廿三日廿四日  
兩日之内、阿部四郎五郎殿○正、大久保甚右衛門殿○長、松平甚三郎殿○隆、  
家手寄次第參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候以上。  
閏八月廿一日○延寶八年、  
町年寄  
三  
人

材種

屋鋪給賜

屋鋪給賜事  
蹟

松平忠冬

荒川重好  
有田光明  
松平忠重

廿七日癸丑○延寶八年、紀元二三四○屋鋪ヲ賜フ者有リ。九月朔日丁巳○  
實八年○、紀元二三四○、  
年○、丁巳○、正綜覽。  
屋鋪給賜 左ノ如ク傳フ、  
閏八月廿七日○晴○、  
一、松平隼人正冬○、忠○、  
九月朔日○陰○、  
一、御側御小性衆御小納戸衆屋敷拜領。所謂、

大澤右京大夫上ケ屋敷  
大森信濃守上ケ屋敷  
小石川中根大隅守抱屋敷

荒川長門守○好重  
有田伊勢守○明光  
松平佐渡守○重忠

曾我助路

大井甲斐

服部貞世

河内常政

石原正次

飯塚重方

花村正親

長山直利

山口光久

加藤正岑

板倉筑後守上ケ屋敷半分充西之方

同所 東之方

牛込逢坂大久保孫介上ケ屋敷

小石川安藤彦三郎上ケ屋敷

四谷伏見權八郎上ケ屋敷

池端井上岩次郎上ケ屋敷

小石川中山茂兵衛上ケ屋敷

表四番町渡邊六左衛門上ケ屋敷

小日向前田安藝守上ケ屋敷

赤坂築地牛込傳左衛門上ケ屋敷

右之通被下之。

朔日○延寶八年、  
九月○中略。

一、屋敷拜領之衆、

板倉筑後守上ケ屋敷  
同東之方大井甲斐守  
大澤右京大夫上ケ屋敷  
大森信濃守上ケ屋敷  
中根大隅守上ケ屋鋪

市街充實時代

曾我土佐守○助

大井甲斐守○貞

服部庄三郎○常

河内半兵衛○政

石原太郎左衛門○正

飯塚喜兵衛○重

花村三郎兵衛○親

長山彌三郎○直

山口五郎兵衛○光

加藤源太左衛門○正

日記

曾我土佐守へ。  
荒川長門守へ。  
有田伊勢守へ。  
松平佐渡守へ。



大久保孫兵衛上ヶ屋敷  
小石川安藤彦三郎上ヶ屋敷  
四ツ谷伏見權八郎上ヶ屋敷  
池之端井上岩次郎上ヶ屋敷  
小石川中山茂兵衛上ヶ屋敷  
前田安藝守上ヶ屋敷  
牛込傳右衛門上ヶ屋敷

服部庄三郎へ。  
河内半兵衛へ。  
石原太郎左衛門へ。  
飯塚喜兵衛へ。  
長山彌三郎  
山口五郎兵衛  
加藤源太左衛門

柳營日次記

一、朔日○延寶八年

一、御側御小性御納戸衆屋鋪拜領之面々、

大澤右京大夫上  
大森信濃守上  
大根鷹匠上  
中根小石川抱  
西丸下板倉筑  
後上割被下  
兩上人ニケ被下  
大久保孫介上  
大藤牛込逢坂  
安藤小石川上

荒川長門守  
有田伊勢守  
松平佐渡守  
西方我土佐守  
東方井甲斐守  
大井庄三郎  
河内半兵衛

松平忠成

伏見權八郎上  
上屋三郎上  
井上岩三郎上  
屋敷池ノ端上  
中敷山兵衛上  
屋敷邊六左衛門上  
ケ屋敷表左衛門上  
前田安藝守上  
ケ屋敷小日向  
ケ屋敷赤坂築地  
右ノ外林相摸守○直  
立申上候迄御延引被遊被下候様之、内證ニテ願被申候故、只今不被下之候。

萬天日録

忠冬○幼名鶴松丸。長八郎。權兵衛。與右衛門。  
同月○延寶八年。廿七日、小石川牧野備前守○成。屋敷被下置、赤坂之元屋敷之嫡子吉之助○忠。被下置候。  
同年○延寶八年。九月廿七日、小石川備後守屋敷父忠冬之被下置候節、赤坂元屋敷を忠成に被下置候。  
光明○始吉明。伊勢守。後左衛門大夫。縫殿頭。幼名忠三郎。  
延寶八年九月朔日、元鷹匠町大森信濃守上り屋敷被下之。  
延寶八庚申年

寛政呈譜

市街充實時代



九月六日渡。同斷。  
 一、牛込大坂七百貳拾六坪  
 九月六日渡。同斷。  
 一、小日向四百九拾八坪  
 九月六日渡。同斷。  
 一、田安四百六拾七坪六合  
 九月十二日渡。同斷。  
 一、小石川四百六拾六坪  
 九月十二日渡。上ヶ地不知。  
 一、鷹匠町九百四坪九合  
 同日(九月十二日)渡。同斷。  
 一、小石川千五百廿五坪五合  
 但、長屋共。  
 九月十四日渡。上ヶ地不知。  
 一、四谷御門外六百三拾貳坪九合  
 十月三日渡。上ヶ地不知。  
 一、新鷹匠町五百九拾三坪八合五勺

役名不知。  
 同 服部 庄三郎  
 同 山口五郎兵衛  
 同 河内 半兵衛  
 役名不知。  
 同 花村三郎兵衛  
 役名不知。  
 同 有田 伊勢守  
 松平 佐渡守  
 同(役名不知)。  
 同 石原太郎左衛門  
 飯倉 喜兵衛

屋敷書拔

附記一 評定所修理

町觸二、

一、今度御評定所御修覆入札被仰付候間、望之者ハ、明後三日四ツ時分御評定所ニ參、萩原彦次郎殿岩出瀬兵衛殿御指圖ヲ請破損之場所致見分、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。

九月朔日 〇延寶八年

町年寄

人

附記二 橋普請

町觸二、

一、今度本八町堀三町目四町目間橋、並明石町ハ南飯田町ハ渡ル橋、貳ヶ所新規御普

深川船庫修理

九月四日庚申 〇延寶八年(紀元二三三四) 書院番角南重秀 〇主 小姓組渡邊久  
 永助 〇孫 二命ジテ、深川船庫 〇市内 区 ヲ修理セシム。 〇日記、柳營日次記、常憲院殿御實紀、寛政重修諸家譜。

深川船倉修理

〇延寶八年 細雨、辰刻。  
 九月四日 止 〇中略。

一、深川御舟藏修復奉行、

池田帶刀組 角南主

馬 〇重

大久保豊前守組 渡邊 孫

介 〇久

右兩人被仰付之旨、能登守利房 〇土井 申渡之、松平因幡守 〇信

石川美作守 〇乘

侍座。

席御右筆部屋縁頼。

——日記

四日 〇延寶八年 中略。

一、池田帶刀組角南主馬、大久保豊前守組渡邊孫介、深川御船藏破損奉行被仰付之。

——柳營日次記

四日 〇延寶八年 中略。書院番角南主馬重秀小姓組渡邊孫助久、永深川船庫修理奉行を命

——常憲院殿御實紀

重世 〇初重秀、久二郎、左源太、主馬。

市街充實時代



二十三日〇寛文三年十二月御書院番に列し、〇中八年〇延寶八年九月四日仰をうけて深川御船藏修復の奉行をつとむ。  
久永〇八十郎九助孫助渡邊。

板倉重大賜邸事蹟

承應三年二月二十七日御小性組の番士となり、〇中延寶八年九月四日深川御船藏修復の奉行をつとむ。  
——寛政重修諸家譜

十日丙寅〇延寶八年九月側衆板倉重大〇市大手前〇市內二屋鋪ヲ賜フ。

板倉重大賜邸事蹟

板倉重大賜邸 板倉重大ハ、延寶八年閏八月九日留守居ヨリ轉ジテ、新ニ側衆ト爲リタル者也。

十日〇延寶八年九月

一、板倉市正〇重ハ、本多土佐守元屋敷被下之。

——延寶遺錄

延寶八庚申年九月十四日渡上ヶ地不知。大手前貳千四百六拾八坪餘但、建家共。

板倉市正  
——屋敷書拔

附記  
火事場法令

廿五日〇延寶八年九月

一、火事之節其場へ猥不懸集様可仕旨被仰出此のとき可相守之旨書付。

覺

一、從此以前被仰出之通、火事之節親子兄弟其外從弟迄之分、竝舅輦子舅に見廻、此外には見廻又之使遣間敷事。

一、火事之節爲見分家來之者遣之儀、馬上之不及申、歩行之も、火元近所へ堅差越間敷事。

一、近年火場へ火消其外火元は罷出御役人之外、人多集之由相聞、向後相改之、不審成者召搦之、又之可爲討捨間可被存其趣事。

附、親類等へ見廻之節、火場一切不通之、脇道可相越事。

右之通可相守者也。

——柳營日記

堀氏其他下屋鋪

廿八日甲申〇延寶八年九月須坂〇信濃國邑主堀直佑〇長門守其他下屋鋪替地ヲ賜フ。〇日記屋敷書拔。

堀氏其他下屋鋪事蹟

堀氏其他下屋鋪傳フ、〇延寶八年九月廿八日〇快晴中略。

一、堀長門守〇直北條新藏〇氏兩人下屋敷御用付る先頃被召上之、其替地被下之旨、今日老中傳之。

——日記

堀直佑北條氏平

延寶八庚申年

市街充實時代



十月十二日野代彦太夫御代官所

役名不<sub>レ</sub>知。北條新藏平<sub>〇</sub>氏

一、駒込村千八百五拾三坪壹合餘

——屋敷書拔

但、谷中下屋敷御用地之被召上候爲代地、元坪之二割増之可渡。

附記、一 屋鋪給賜

〔附記、一〕屋鋪給賜

〇延寶八年 十月晦日 曇<sub>〇</sub> 中略。

〇延寶八年 十月晦日 曇<sub>〇</sub> 中略。

若藤高

一、若藤左衛門<sub>〇</sub> 高<sub>〇</sub> 事、飯田町下荒川又七郎上ヶ屋敷被<sub>下</sub>之旨、能登守傳達之。

席御右筆部屋縁頼。

——屋敷書拔

〇延寶八年 十一月六日 晴<sub>〇</sub> 中略。

林直秀

一、林相摸守<sub>〇</sub> 直<sub>〇</sub> 兼松彌五左衛門上ヶ屋鋪被<sub>下</sub>。

——日記

同<sub>〇</sub> 延寶八年 十一月七日 晴<sub>〇</sub> 中略。

一、兼松彌五左衛門上ヶ屋敷林相摸守被<sub>下</sub>。

同<sub>〇</sub> 役名不<sub>レ</sub>知。萬天日錄

一、西之窪千八百五拾八坪四合餘

林相摸守

——屋敷書拔

附記、二 借米還上

〔附記、二〕借米還上 町觸二、

一、町中拜借米代金之内三分壹、去年通常月上納仕候間、近日集候<sub>〇</sub>、其町々之可支度

仕置可申候。代金集候<sub>〇</sub>、前方書付<sub>〇</sub>、相觸候間、左様心得可申候。

十一月十日 〇延寶八年。

町年寄

人

附記、三 淺草谷兩藏修理

〔附記、三〕淺草谷兩藏修理

一、淺草谷兩所御藏、來西ノ年御普請御入用之釘、鐵物、銅物、小買物、大工諸日用人足、屋

ね方、竝樽木、壁方、瓦方、入札ニ被<sub>〇</sub>仰付候間、望之者<sub>〇</sub>、來ル十五日<sub>〇</sub>同十八日迄之内、御

藏普請小屋<sub>〇</sub>參、御注文寫之、同廿一日入札仕候様<sub>〇</sub>、町中不殘可被<sub>〇</sub>相觸候。少も油斷

有間敷候。以上。

町年寄

人

十一月十三日 〇延寶八年。

増上寺台徳院靈屋修理

十一月廿四日己卯

〇延寶八年(紀元二三三四年)己卯三正綜覽。

是頃増上寺台徳院靈屋

芝<sub>〇</sub>市内

ヲ修理ス。〇柳營日記。

増上寺台徳院靈屋修理

是頃増上寺台徳院靈屋修理中ナリシト見エ、柳營日記記ニ、

廿四日 〇延寶八年 十一月 〇中略。

一、増上寺御佛殿御修復未出來<sub>〇</sub>付、紅葉山御名代土井能登守<sub>〇</sub>房。利

日記ニハ、單ニ左ノ如ク有リ。

〇延寶八年 十一月廿四日 快晴。

一、紅葉山御佛殿<sub>〇</sub>爲御名代土井能登守參詣。

晦日乙酉<sub>〇</sub>延寶八年(紀元二三三四年)乙酉三正綜覽。城門番所ノ制ヲ定ム。憲院殿御實紀。

城門番所制 左ノ如ク定ム。

城門番所制 事蹟

市街充實時代



延寶八庚申年十一月。

御本丸

定

- 一、御三家甲府殿之供挾箱也、如常可通之事。
  - 一、國持大名を始、其外登城之面々挾箱也、中之御門外中腰掛之向、又二丸調御門之前、可差置之事。
  - 一、御城之部屋在之面々也、挾箱如常可通之事。
- 右出仕多時分也、自今以後可相守此趣也。

西丸

定

- 一、御三家甲府殿之供挾箱也、如常可通事。
  - 一、國持大名を始、其外登城之面々供之者、中之御門より内々侍壹人草り取壹人之外不可通之、但雨天之時は、笠持壹人可通之事。
  - 一、挾箱也、中仕切御門と大手番所之間に可置之事。
  - 一、出仕日に留守居罷出候義、無用之事。
  - 一、御城之部屋在之面々也、挾箱也、如常可通事。
- 右出仕多時分也、自今以後可相守此旨也。

以上。

十一月晦日〇延寶八年。

右、慶錄記・大成令・御書付寫・令條留。

——教令類纂

延寶八庚申年十一月晦日

覺

一、馬場先御門

一、外櫻田御門

一、和田倉御門

右三ヶ所之御門、自今以後也、下馬被成候間、出仕多時分也、御徒目付出之御門之内に如御本丸侍並六尺御定之外、不可通之、但内之屋敷有之面々也、斷次第人馬諸道具共可通之候。以上。

申〇延寶八年。十一月晦日

下馬々下棄迄召連供之覺

一、侍六人或五人或四人 一、六尺四人

一、挾箱貳人 一、草履取壹人

一、雨天之節も傘持壹人

右之通可通之候、雖爲國持大名、此人數之外不可通之者也。

十一月〇延寶八年。晦日

右、大成令・慶錄記・令條留・御書付寫・玉露叢。

——教令類纂



十二月更ニ左ノ令有り。  
延寶八庚申年十二月

覺

於和田倉御門ニ常ニ下馬不仕、如前々之往行可通之、但御禮日其外出仕多時分テ、御徒目付可出之、其節計只今之通りニ下馬可仕者也。

十二月〇延寶八年。

馬場先御門

右同文言。

外櫻田御門

同。

右三ヶ所ノ遺之也。右、大成令・令條留。

——教令類纂

晦日〇延寶八年十月。けふ諸門番所に令せらるゝは、出仕多き日は、三家甲府の挾箱常のごとく通すべし、國持はじめ其他の挾箱は、中の門外または二丸銅門前にとゞむべし。殿中に直廬ある輩は、常のごとく通すべしとなり。又西城は、三家甲府の從者竝に挾箱は、常のごとく通すべし、その他は、國持はじめ、從者は中の門内、侍一人草履取一人の外通すべからず、雨天には傘持一人通すべし、挾箱は中仕切門と大手門番所の間に置べし、朝會の日に、諸家の留守居出べからず、殿中直廬あるともがらは、挾箱常のごとくたるべしとなり。また外櫻田馬場先和田倉三門を、この後下馬の所とし、出仕のともがら多き時は、徒目付出て、本城のごとく、侍竝に陸尺等、定の外通行をゆるさず、但しその

附記  
三家以下  
火消役

内に邸宅あるともがらは、そのよし告て後、人馬器械ともに通行をゆるすべしとなり。  
四日〇延寶八年。さきに令したまひし三下馬所の事、往來のもの便とせざるよしきこしめし、下馬牌を廢せらる。朝會の日のみ、先令のごとく、常はむかしのごとくたるべしと令せらる。  
——常憲院殿御實紀

〔附記〕 三家以下火消役

一、御三人方竝國持大名衆、其外萬石以上之諸大名衆へ、大形火消役被仰付之候。然共松平薩摩守殿計御請不被仕候。其趣ハ前代より終に此様之事仕たる儀無御座候處ニ、今更難相勤候也。依之其分也。然共方角之火事之節ハ、御願被成候由也。ケ様ニ御一門方國持大名衆へ、御役被仰付たる事ハ、御前代ニ無之事也。〇延寶八年十一月ノ條。

——玉露叢

屋鋪替

屋鋪替事蹟

十二月十日乙未

〇延寶八年(紀元二三〇四)乙未、三正綜覽。

屋鋪替有リ。

〇柳營日記。萬天日錄。甘露叢。

屋鋪替

岡田善次堀田正英屋鋪替ス。

十日〇延寶八年十月

略。

一、岡田將監〇善

日比谷御門屋敷被召上、堀田對馬守英。〇正

被下之。

一、堀田對馬守

谷之屋敷岡田將監へ爲替地被下之。

——柳營日記

一、同年〇延寶八年

十月、岡田將監日比谷門ノ屋敷堀田對馬守へ被下之、右ノ代對馬守三

市街充實時代

六四七



俣ノ屋敷將監ニ被下之。

——萬天日錄

一、同延寶八年。十日、屋布替、日比谷門岡、田將監、屋布堀、田對馬守、谷ノ藏對馬守、屋布ヲ將監へ。

——甘露叢

附記、一  
借地

〔附記、一〕借地

久忠 平左衛門。

○林。

延寶八庚申年十二月十七日拜領屋敷無御座候。大御番酒井大和守組之節、表四番町ニ願之通拜借地被仰付、右地面ニ住居仕候。

——寛政呈譜

附記、二  
水アビセ

〔附記、二〕水アビセ

覺

一、町中正月水あびせ之支、此以前も如相觸候、親類縁者計、銘々屋敷之内ニ水あびせ可申候。他人ハ壹人も出合申間敷候。親類ハ從弟迄、縁者ハしうと子しうと迄、其外ハ無用たるべし。縦右之縁者たりといふ共、猥大勢寄合へからず。勿論かさほ何ニ為作り物之類、一切仕間敷候事。

一、水あびせニ不限、諸事祝儀事ニ付、ねたりがましき義申かけ候者於有之、其所之名主五人組ハ早速御番所ニ可申上候支。

一、跡々も相觸候とく、町中男たて仕候若キ者、方々にて理不盡成義申かけ候之由、風聞候間、自今以後、其町々名主五人組立合、互吟味仕、見及聞及次第、徒者有之候ハ、早

々御番所へ可申上候事。

一、右之通町中家持ハ不及申、借屋店かり召仕等迄、少も違背不仕候様、急度可申觸候。〔かくし置、脇ハ顯候ハ、勿論名主五人組迄可爲曲事者也。申八年。延寶十二月廿日

右御觸之趣、慥御請負申上候間、町中家持ハ不及申、借屋店かり召仕等迄、急度爲申間、堅相守、少違背仕間敷候。若相背者於有之ハ、何様之曲事ニ爲可被仰付候。爲後日町中連判之手形差、上ケ申候。仍如件。

延寶八年申十二月廿日。

——町觸

社寺異動

是年○延寶八年(紀元二三四〇年)

社寺ノ轉移其他異動有リタル者若干。○文政寺社書上。府内誌殘編。地子

古跡寺社帳。御朱印寺社帳。

社寺異動 延寶八年中社寺ノ異動有リタル者ヲ擧グ。

社寺異動事蹟  
下谷稻荷社

下谷稻荷社 屏風坂邊大久寺隣地ヨリ少林庵抱地ニ移ル。

下谷

本寺東叡山

天台宗 正法院

先規除之  
一、當地稻荷不知年數。

一、社地表、拾壹間裏エ九間。

一、居地貳拾間四方。

除地 下谷。

此稻荷之宮地狹ニ付、正法院寺社奉行衆エ訴訟申、妙心寺末寺禪宗少林庵抱屋敷と替

市街充實時代



地仕、自今以後、少林庵屋敷之罷成候。以上。

延寶八庚申九月

除地古跡寺社帳ノ内 下谷 千手院

除地古跡寺社帳

下谷東叡山末天台宗正法院抱之稻荷社地、御帳面表口十一間、裏行九間、御座候。延寶八年申九月妙心寺末禪宗少林庵抱屋敷表口二十一間、裏行二十四間有之。除地工替地仕度旨、其節寺社奉行衆工正法院願相濟、右地工引移、宮地建立仕候。然處屋敷間數御帳面相載不申候故、今度遂吟味候得、天和三癸亥年七月本多淡路守方々表裏間數書入、添手紙差越申候。因茲同曆八月申上候。

證文ノ上ニ、松平對馬守殿如レ此御改、社地之譯御札ニ付、差出之。豪憲。

一札之事

一、當社稻荷社地、三十七八ヶ年以前、屏風坂近邊大久寺隣ニ有之、百貳拾六坪餘之社地ニ御座候。其時分迄、只今之社地ハ、谷中天眼寺先住少林庵抱地ニ御座候處、拙僧先住豪春、神地狹義難儀ニ存、少林庵方ニ替地仕度由、遂相談、御奉行所願相濟可申、替地之義得其意候。此地惣体沼地ニ平地少ク、手前用事ニ難立、自力地形等難成候故、廣分ニ神慮ニ寄進ニ可仕由ニ付、拙僧先住豪春天眼寺先住少林庵、三十八年以前延寶八庚申年中、御奉行所罷出地替仕度由奉願候處、御吟味之。双方古跡除地ニ

紛無之ニ付、勝手次第地替可仕由被仰渡、只今之地ハ、迂社仕候。其節之御奉行松平山城守殿○忠阿部美濃守殿○美作之由承傳申候。右書物度々之類燒ニ燒失仕候故、明白ニ相知不申候。

一、元社地少林庵ニ相渡し被抱置候處、此地□地之跡と申、□遠方ニ支も澁難之由ニ、少林庵方々此□ニ附候。拾五年以前元祿十六未年中、本多彈正少弼殿○忠ニ寄進地之譯申上候處、双方御吟味之上、寄進地ニ紛無之ニ付、拙僧抱地ニ被仰付候。仍如件。

享保二年酉七月十二日

寺社御奉行所様

東叡山末  
下谷稻荷別當  
正法

院印

下谷稻荷社由緒并繪圖面

下谷稻荷社

下谷 不唱小名。

境内除地五百二十五坪餘。

古來より古跡除地ニ御座候得共、先年類燒之節、記録燒失仕、鎮座之年代等相知不申候。但、當社延寶年中迄、屏風坂近邊大久寺隣ニ有之候。其節社地百廿六坪餘有之候。其頃只今の社地、谷中天眼寺先住少林庵之抱地ニ御座候處、拙僧先住豪春、社地手狹ニ難儀仕候間、少林庵抱地と替地仕度、遂相談候處、當地所ニ沼地ニ、少林庵自力ニ地

市街充實時代



形築立候儀難相成候間、坪數多有之候分、當社に寄進可仕旨相極、延寶八庚申年御奉行所に奉願候處、御吟味御座候上、双方古跡除地之紛無之に付、願之通勝手次第替地可仕旨、被仰渡候に付、唯今之社地に引移申候。其節之御奉行松平山城守殿、阿部美作守殿之由承傳候。右書物等度々類焼之燒失仕候故、明白相知レ不申候。——續府内備考

天台宗 東叡山末 慈雲山長榮寺正法院略中

一、第五十一世豪春 萬治三庚子年住職。元祿四未年閏八月廿七日寂。住職三十貳年。生國野州都賀郡皆川領、栃木城内田宿邑父と早乙女藤右衛門俊秀、母若色氏。父母常乙八幡宮の祈請之る懷妊云々。寛永十一甲戌八月十五日卯刻生。慶安元子年隣邑從圓通寺豪辦剃髮、年拾五歲、承應元辰年當山圓順爲附弟、年拾九歲、萬治三庚子年住職。延寶三乙卯年從本照院宮慈雲山長榮寺引直し、當院山寺號ト被成下。延寶八庚申年十一月元社地ト當所に遷社、假殿建立。貞享二乙丑年四月九日日本社幣殿建立。同月十五日上棟。同十一月十八日遷宮。導師凌雲院慈海僧正、衆僧兩執當衆徒中拾人。元祿四辛未年閏八月廿七日寂。住職三十二年。

——文政寺社書上

紫の一本ニハ、下谷稻荷二月廿一日の祭なり。此宮ハまへ下谷おかち町のうち三明院の東近藤平三郎の屋敷の西にありしか、一とせ下谷火事の節、家屋多く焼たれとも、此稻荷の氏子一人も類火にあはず。其後天野氏の家へきせいの事有りしにより、寺社奉行まで訴へ、其年より祭始り、其明る年社地を廣德寺前大宗寺のむかひにうつさる。ト見ユ。

〔参考〕慶應四年四月別當正法院<sup>○住職</sup>實達代。提出スル所ノ<sup>武藏</sup>江戸下谷稻荷大明神鎮座由緒書ハ、左ノ如ク記シ、延寶轉移ノ事蹟ヲ傳ヘズ。

武藏國豐島郡下谷岡正一位稻荷大明神緣起

抑當社之明神も、人皇四十五代聖武天皇の御宇天平年間洛陽三の峯の神靈行基菩薩に託し、師佛法弘通の爲に諸國を遊行せ、必有緣之地あらん、其所に我神影を鎮座すべし、醍醐の法味を嘗、永く國家を鎮護し、五穀成熟せしめ、一切衆生の諸難を除かしめんと告給ひし事、三の寶珠となり、東をさして空中に飛去給ふ。師不斜欽喜の思ひをなし、其後武藏國豐島郡北下谷ヶ岡に至り給ふ時、奇瑞の事ありしによりて、爰ぞ有緣の靈地なるべし、迎親しく出現の神影并十一面觀世音の尊像手自彫刻し、則勸請し給ふとなり。爾來より光景を送りきて、人皇六拾一代朱雀帝の御宇天慶三年朝敵相馬次郎將門を追討のため、常陸の大掾國香、其子平貞盛、下野國の住人田原藤太秀郷、出陣の時に臨、秀郷當社に參籠し、朝敵退治の祈願をこめしかは、終に將門を誅して、速に戦功をあらはし、東國悉く平均す。依之社頭を造營して、彌神威を尊崇し、此時三月十一日を以神詞の祭禮を行なはしむ。爾來每歲此日を恒例とはなせり。然るに開基以來殿舎敗壞、回祿數度に及といへとも、神託空しからず、天平の始より文祿の子令至り、星霜既にうつり八百五拾餘年に及へり。今年我徒圓順蒙宣命、別當職たらしむるに、より、依舊記、畧して錄綱要已耳。



維時文祿二年癸巳九月

右前書之通古緣起之寫御座候。

一、正一位神階之事

右々宣旨、明曆三年燒失仕候。依之享保三年戊八月中出願仕、宣旨頂戴仕候。

一、諸國大小之神社於「京都御用」之付、當所所在之分不洩様書付差上候様、御達御座候之付差上候控。

乍恐書付を以申上候。

一、正一位下谷稻荷大明神

右社人無御座候。以上。

元和八年壬戌九月

右之通寶曆九年己卯九月中、前條之通御取調御座候之付書上申候控。

一、御額面之事

享保二年三月  
崇保院宮公寛法親王御染筆

安永七年十一月  
安樂心院宮公延法親王御染筆

一、下谷稻荷社地之事

右々古跡除地之御座候。尤元地之儀々、寛永年間東叡山御艸創之砌、當時山王下と稱候所に代地之相成、其後元祿年中上野中堂御建立之付、當所に鎮座之相成候。右之地所往古々稻荷神輿渡行之節、三ヶ所其旅所之内之邊、古跡除地御座候。

武州豐島郡下谷村稻荷別當

正法院 印

一 社

以上。

一、別當慈雲山長榮寺正法院儀々、古來々比叡山末御座候處、寛永年間東叡山御艸創以來、御室御造營被爲在候之付、延保三年從本照院宮様、當院寺山號共、往古之儘之引直シ、延曆寺離末、以後東叡山御室え附屬、御直末被仰付候事。右々今般從御所被仰出候、神社鎮座之由緒等、巨細之書上可申旨御達之付、前書之通取調申上候。尤當社起立、古來年久敷、數度之燒失、明白相知不申候得共、燒失殘舊記取調書上申候。以上。

慶應四年戊辰四月

下谷稻荷社別當  
正法院

長運寺

長運寺 飯倉町ヨリ三田四國町ニ移ル。

身延山久遠寺末  
榮松山長運寺

三田四國町

境内坪數三百二十一坪。内、拜領地九十九坪、御年貢地二百二十二坪。當寺起立之儀々、寛永七庚午年於飯倉町之寺地草創仕、罷在候處、延寶八申年御用地被召上、同年於當所如元之地坪、拜領仕申候。其節町人利兵衛と申者、其地之住持從弟之由緒有之候之付、右利兵衛所持之町年貢地町並貳百貳拾貳坪之處、致寄附候之付、寺社御奉行松平山城守様の御願濟之際、其節々境内之圍込、御年貢諸役町並之通差出來申候。

續府内備考

妙圓寺

妙圓寺 百姓地ヲ借添フ。

市街充實時代



海藏寺

白金臺町妙圓寺内七百三拾坪に狭難儀仕に付、伊奈半十郎篤。○忠御代官所百姓地五百四拾八坪年貢地に借添之訴訟、寺社奉行所へ申候處、吟味之上願之通申付候。此借添境内へ圍入候得共、古跡之坪數には不申付候由、延寶八庚申年正月板倉石見守種。○重より斷申越、住持所之名主、右之段申來候。  
海藏寺 本所牛島ヨリ青山久保町ニ移ル。  
——地子古跡寺社帳

攝津州西成郡難波村慈雲山瑞藏寺末  
武州豊島郡青山  
禪宗黄檗派 青山海藏寺

一、境内年貢地合千百五拾七坪。

内、百九十坪餘、享保十八年丑年九月願之上添地、但シ伊賀衆給地之内添地寄進人有之候得共、不知。

一、當寺起立、往古本所牛島に承應年中禪宗卓峰と申僧取立致住居候庵に御座候。其後當寺開山鐵眼從卓峰譲り受候、延寶八年に青山久保町只今之寺地取引移し致住居候。  
——文政寺社書上

海藏寺

海藏寺ハ、豊島郡青山原宿に在、青山と號す。境内年貢地千百五拾七坪、内百九十坪餘ハ、享保十八年癸丑檀越の願により、伊賀之者の給地を添地に賜はる。○中此寺舊ハ、本所牛島に在。承應年中卓峰といふ僧起立して住持せしを、鐵眼和尚譲りうけ、延寶八年庚

護國院

申當所へ移す。

——江戸黄檗禪刹記

護國院 寛永寺子院也。境内用地ト爲リタル所有リ、替地ヲ給セラル。

延寶八庚申年十月七日渡。上ケ地不知。一、上野五百四拾坪、但、同院寺地之内、御用地に上召上、以爲代地、地續に渡。

護國院  
——屋敷書拔

感應寺

感應寺 境内用地ト爲リタル所有リテ替地ヲ給セラル。

御朱印地 一、當地貳百拾五年

法華宗 谷中 感應寺

一、寺内三萬三千七百六拾九坪

一、門前町屋貳拾貳軒

法華宗谷中感應寺寺内三千百貳拾貳坪八合、上野御用地に上り、爲替地同所なる本坪三千百貳拾貳坪八合、増坪六百貳拾四坪五合七勺、都合三千七百四拾七坪三合七勺、拜領仕、惣坪數合三萬四千三百九拾三坪五合七勺に罷成候。

延寶八庚申年九月

——御朱印寺社帳

本立寺

本立寺 谷中清水坂ヨリ螢澤東岡ニ移ル。嚴有院靈屋營造ニ關シテノ轉移歟。

日蓮宗 谷中 本立寺

當寺、永和三年之起立に開基、九老僧日輪上人之弟子本立坊と號、開闢之地處豊鳴郡千代田邑之傍に一字を建立し、妙見尊を本尊として妙見山本立寺と號と有之、不

市街充實時代



詳。天正十四年神田の迂ル。亦元和年中谷中清水坂を移ル。其後延寶八申年閏八月嚴有院様御佛殿御用地に相成候に付、螢澤東之岡を替地被下置、並引料として金三拾兩添て賜る、今之地處是也。

古跡地拜領地内惣坪數 三百五拾坪。

——文政寺社書上

本立寺 感應寺門前町ノ横丁ニアリ。妙見山ト號ス。京本國寺ノ末ナリ。永和三年ノ起立ニシテ、九老僧ノ内日輪ノ弟子本立坊ト云フ者、千代田村ノ地ニ一字ヲ建立シテ妙見ヲ安置ス。依テ妙見山ト號セシ由傳フレトモ、記録散失シテ詳ナラスト云フ。天正十四年神田ノ地ニ轉シ、元和年中清水坂門ノ邊ナルベシ。今ノ東叡山清水ニ移リシカ、延寶八年御用地トナリ、今ノ地ヲ拜賜セシト云フ。略。中境内三百五坪拜領地ナリ。

——府内誌殘編

觀音寺

觀音寺 谷中清水坂ヨリ感應寺中門前町向ニ轉ズ。

谷中 觀音寺

一、境内拜領地表間口三拾七間四尺五寸餘、裏行四拾五間餘、千六百八拾坪餘、權現様御代神田北寺町拜領仕候。御奉行米津勘兵衛様嶋田治兵衛様御役所中ニ御座候。  
一、大猷院様御代御用地ニ相成被召上、代地谷中清水坂ニ在、右之坪數程拜領仕候。御奉行安藤右京様。重松平出雲守様。勝被仰渡候。  
一、嚴有院様御代御用地ニ相成候。延寶八庚申年只今之場所代地拜領仕候。

靈梅院

靈梅院 谷中金杉村ヨリ七面前ニ移ル。亦嚴有院靈屋營造ニ關スル者歟。

延寶八庚申年

——府内誌殘編

同日(○十一月廿日)渡。同斷(年貢地)

淺草海禪寺末

一、同所中。谷 貳百七拾五坪

靈梅院

一、當地 貳拾三年

——屋敷書拔

一、寺内坪數

禪宗 本寺海禪寺 靈梅院

貳百四拾貳坪。

此寺上野金杉村ニ罷在候所、延寶八庚申十一月上野御用地之上、谷中七面前ニ在、元坪之通り替地被下拜領地ニ罷成候。

——古跡寺社帳

市街充實時代



海藏院

靈梅院 片町ニアリ。百丈山ト號ス。淺草海禪寺末ナリ創立ノ年代ヲ傳ヘス。元ハ金杉ノ地ニアリシカ、延寶八年彼地御用地トナリ、貞享元年今ノ地ヲ拜賜スト云フ。○中境内二百七十坪餘、拜領地ナリ。

海藏院 金杉ヨリ谷中片町ニ移ル。

延寶八庚申年

十一月廿日渡年貢地。

一、谷中貳百七拾七坪八合

但、大猷院御用地ニ被召上代地渡。

京都妙眞寺末

藏院

——屋敷書拔

續府内備考ハ、貞享元年ヲ以テ代地ニ轉ズト傳フ。

京都華園妙心寺末

谷中 不唱小名。

福聚山海藏院

境内拜領地二百七十七坪。當寺元金杉ニ有之候處、延寶八庚申年嚴有院様御佛殿御用地ニ被召上、貞享元甲子年谷中片町へ代地被下置候。寺社御奉行松平山城守様被御渡候。爲引越料、金貳拾貳兩貳分被下置候。

眞光菴

眞光菴 深川海邊大工町ニ起立ス。

眞光寺 境内年貢地二萬祥寺の東に隣れり。○深川海邊大工町。當寺も黃檗宗にて、上州不動寺の末なり。慧日山と號す。開山ハ潮音禪師にて、二世ハ大綱和尚なり。此寺もはじめハ江戸八ヶ庵の一なり。潮音禪師年譜云、延寶八年師五十三秋、眞光菴落成、蓋以道婆名扁

附記、一、延寶中寺院異動、稱名寺

之也。請師居焉。示衆偈曰、眞光菴裡解安身、不著菜根徹骨貧、惡辣家凡人會少、金毛個々得相親、衲子輻湊譜紳歸嚮と、是也。——葛西志

〔附記、一〕延寶中寺院異動

稱名寺 麻布善福寺地中ニ起立ス。

京都本願寺末  
麻布善福寺地中  
淨土眞宗 稱名寺

一、境内坪數百五拾貳坪 持地

一、寺起立ハ延寶年中、善福寺弟子教運、右地中ニおゐて建立仕候事。右開基教運貞享元子年九月七日死去仕候事。——文政寺社書上

普門寺 起立年月ヲ知ラズ。開基ノ示寂是年ニ在リ。

東叡山末  
武州豐島郡牛込若宮  
天臺宗 光明山長松院普門寺

一、延寶年中法印元隱開基、延寶七未年四月二十五日寂。

一、拜領地境内貳百四拾坪餘。

一、本尊若宮八幡宮、馬上座像、作人不知申、御丈々壹尺貳寸程。——文政寺社書上

善心寺 延寶中大塚上町ニ移ル。

京都本傳寺末

小石川大塚上町

境内除地七百七十坪。買添年貢地七百七十四坪。

市街充實時代



華嚴寺

起立年代不知。右々麻布ニ有之候處、延寶年中當所ニ引移申候。——續府内備考  
華嚴寺 本所荒井町ニ開基ス。

小石川傳通院末

本所荒井町

淨土宗 大方山廣佛院華嚴寺

一、境内 東八間五尺五寸。西同斷。 南三拾壹間半。南同斷。 貳百七拾六坪 年貢地。

一、當寺起立之儀々、堅固院と申、年久有來候處、延寶已來、林山ト申僧開基仕。○下  
——文政寺社書上

附記、二、  
延寶中市  
街異動

○延寶八年、築地西本願寺再建ノ事アリタルヤニ覺ユ。

〔附記、二〕 延寶中市街異動

芝三島  
町

芝三島町 文政町方書上ニ、

芝中門前壹町目略。○中

一、町内名主之儀々、往古々之儀々相分り不申候得共、私先祖之儀々、三州出生之者ニ  
舊來芝三嶋町北角表京間六間奥行貳拾間有之家屋敷所持仕、右地面ニ罷在、并抱  
屋敷等六ヶ所程も有之、相應ニ相暮罷在候處、近邊家持共進ニ任せ、延寶年中名主ニ  
相成候由申傳候。尤起立ハ相分り不申。其後右三島町家屋敷并外抱屋敷共賣拂、年月  
不知中門前壹町目所持之地面ニ引移候得共、毎年正月三日御城ニ御年頭ニ上り候  
節、芝三島町名主と名札相認差上候。尤私迄七代相續仕候。

金剛寺  
武家貸地  
及門前家

金剛寺武家貸地及門前町家 延寶中起立ス。

一、寺號

金

剛

寺 ○○小日向略。

一、武家貸地願濟之儀々、延寶年中より御免ニ委相成候由ニ御座候得共、記録物等虫  
喰、年月并借り主姓名等之儀、得と相分不申候。尤拾ヶ年目切替之儀、寺社奉行所ニ相  
願候。

一、門前町屋之儀々、同延寶年中より御免之由ニ御座候得共、右同様年月等と得相分  
不申候。

一、七百五拾貳坪貳合五勺

右々門前町屋、只今借地家作之坪數ニ御座候。

——文政寺社書上

川添屋  
敷

川添屋敷 延寶頃家作シ、後享保七年町屋ヲ免サルト云フ。

川添屋敷 ○小日向。

一、町名之儀、往古延寶年中之頃、吉岡宗緯所持之畑地有之候處、其頃百姓市郎兵衛と  
申者、小作致來、右畑地之内市郎兵衛家作補理、其後年月不知、同人儀右畑地讓讀、市郎  
兵衛々町屋御免度々御願申上候處、享保七寅年中町御奉行大岡越前守様御番所願  
之通被仰付。○中

——府内備考

淺草天  
王町

淺草天王町 鳥越橋際非人小屋建ツ。  
淺草天王町略。○中

市街充實時代



一、右町内鳥越橋際有之候非人小屋之儀、凡百年餘ニ相成候由、延寶年中三五郎と申小屋頭、町内掃除仕、其外捨物等用心之ため、小屋九尺貳間ニ相建差置申度段、町内奉願上候處、願之通被仰付、其後年數不存、御普請橋之砌出火有之、右小屋之非人共御橋防助ケ候ニ付、又々小屋相建候節、二間ニ三間仕度奉願上候得、右御橋防助ケ候ニ付、是又願之通被仰付候由申傳候。當時小屋頭長左衛門迄八代程も相成候由ニ御座候。

八軒町

八軒町 半ヲ小揚者ノ屋鋪トス。

八軒町 此所ハ山谷淺草町ノ舊地ナリ、寛文以前火除ノ爲上リテ、中略其蹟閑地ニシテ、中略駒形廣小路ト呼リ、延寶中其半ヲ小揚ノ者ノ屋鋪ニ賜リ、中略下

— 文政町方書上

附記、三

橋本所六ノ

〔附記、三〕 本所六ノ橋

六ノ橋跡 延寶八年梓行の江戸安見圖を閲るに、逆井渡の口より豎川に架して、南へ通る橋あり、是六ノ橋なるべし。その後貞享三年の江戸繪圖に此橋なきとき、此中間五六年のうちに取拂されしならん。

弘擴江戸ハ、一時六ノ橋ニ達セムトシタルコト有リシ歟。

— 葛西志

附記、四

延寶江戸

〔記附、四〕 延寶江戸

大道之法

南	東海道品川ノ驛カ	日本橋へ	貳里。
西	甲州ノ口高井戸ノ驛カ	同所へ	三里。
乾	中山道板橋ノ驛カ	同所へ	貳里。
北	奥州道千秋ノ驛カ	同所へ	貳里。
良	總州葛西ノ驛カ	同所へ	二里半。
東	安房上總カ舟路濱カ	同所へ	三里。

小路之法、但、日本橋カ。

巽	鐵炮洲之湊へ	廿町。	東ノ方	小松川ノ渡シへ	一里八町。
長	角田川之渡シへ	一里十二町。	上	同	一里。
北	駒込ノ富士へ	一里六町。	上	箕輪橋へ	一里。
乾	像師ヶ谷へ	一里十町。	上	本郷追分へ	卅町。
坤	妻籠不動へ	二里。	西	四谷追分へ	一里。

是カ澁はしへ十町餘、此間カしわぎノなるこじゆく。

同名異所

一、追	分	本郷森川宿。	一、二	本	榎原高輪上。
一、鼠	穴	代官丁ノ臺近。	一、金	杉	芝増上寺ノ南。
一、地獄	谷	湯島ノ金坂丁。	一、切	通	増上寺ノ西ノ後。
一、佐久間町	向	柳ハラの。	一、久右衛門町	向	柳ハラの。

市街充實時代



- 一、旅籠町 ゆしまの坂下。浅草馬場七次。
- 一、六間町 おやちのびの坂下。おやちのびの坂下。
- 一、浮世小路 お室の南町。お室の南町。
- 一、村松町 お室の南町。お室の南町。
- 一、飯田町 お室の南町。お室の南町。
- 一、清水町 お室の南町。お室の南町。
- 一、鹽町 お室の南町。お室の南町。
- 一、萱葉町 お室の南町。お室の南町。
- 一、田町 お室の南町。お室の南町。

右の外同名ノ町有といへども、日本橋ノ南ニテ南何町ト云、又新何町ト云、遠國人心得ノためニ如此。又御單司町百人町與力町等ノ諸役人居所、方々ニアリ。氷川ノ明神も六ヶ處アリ。

同所異名

- 一、神田ノ臺ヲ駿河臺。 一、神田橋ヲ大炊殿橋。 一、新小田原町ヲ三河町。
  - 一、浮世小路ヲ照降町。 一、しあん橋ヲあらめ橋。 一、將監殿橋ヲ海賊橋。
  - 一、山下御門ヲひめ門。 一、御成町ヲ幸町。 一、大塚ヲ吹上。
  - 一、外櫻田ヲあたごノ下。 一、道三がしヲ内がし。 一、左内坂ヲ上ルリ坂。
- 如此ノ類數多アリ。畧之。
- 江戸方角安見圖鑑○延寶己未七年三月ノ序有リ。

堀田正俊大

堀田正俊大  
下馬屋鋪事

九年辛酉 天和元年九月廿九日改元。 正月十五日庚午 庚午、三正綜覽。 老中安中  
城主堀田正俊 中守備。 前大老厩橋 野國上。 城主酒井忠清 樂頭。 ノ大下馬  
屋鋪 野國上。 堀田正俊大下馬屋鋪。前大老酒井忠清ノ大下馬屋鋪ヲ收メテ、之ヲ老中堀田正俊ニ賜  
フ。

一、同日 正月十五日。二、酒井雅樂頭清。下馬屋敷堀田備中守俊。正ニ被下。

明治十一年十一月調

——萬天日録

屋敷	町名	位置	坪數	給	收	年	月
同(○上)	大手町一丁目	内務省	不詳	右同年同月(○天和元年正月)右同人(○堀田正俊)ノ時給シ、貞享元年甲子年十月正作(○堀田)ノ時上ル。			

——伯爵堀田家回答○佐倉藩。

〔参考〕 酒井忠清

酒井雅樂頭清。忠事、先祖は徳川の總領にて候。徳川殿松平の家に成給ひ、まうけ給ひし次男、松平の家をつゞけ、今御當家の御先祖なり。此うへ酒井の家を以御代々御家老の職に補せらるゝ、其上酒井先雅樂頭は、松平御先祖の御下腹の御子に、酒井の家に被下たるとの云傳へあり。此段はしかとしらす。云傳へは如此し。しかるに延寶

市街充實時代



申の年十二月九日、雅樂頭に御役御免と被仰出候。是に依て、諸人不審致候は、雅樂頭は御代々家老職にて、定りたる御役儀といふ事なし。病氣の節なれば、登城も不仕、心まゝに緩々と養生仕候へなども、被仰付べき事なるに、是は思ひの外なるよし、諸人うたがふ。一説にいはく、嚴有院様御機嫌悪く、御本復被成がたき御様體みえ候に、若君もおはしませず、依之御養子の事をはかるに、當公方様○徳川綱吉は御連枝の御事、誰あつてあらそふべき人なく、ひが事と思ふ者もあるまじ。然れども天下を治させ給ふべき御器量なし。此君天下のあるじとならせ給はば、諸人困窮仕、惡逆の御事つもあり、天下騷動の事もあるべし、しからば、權現様御精魂をつくされ取しづめられし天下騷動の事あらば、御先祖御家へ對し、不忠不義のわざなり、御子孫は何れも同じ御事なれば、天下を治給ふべき御器量を以、將軍に守立可申候、徳松様は御幼少なれば、徳松殿を御養子にと思へども、是は嚴有院様御ために甥也、同じ御甥とあらば、甲府様なるべし、松平攝津守殿○義行は千代様の御子なれば、是も御甥なれども、甲府殿をさしおきては、なりがたき也、所詮花町天皇の御子有須川の皇子を御養子と申おろし、しばらく將軍に仰奉り、國政を執行、其後有須川殿より尾張の中將殿か攝津守へ天下をゆづらせ申、天下太平にして、御代萬代のはかり事をなすべき心入の所、嚴有院御氣嫌急に御つまり、此事難叶、御老中も不合點の衆、依有之、館林様を御養子と定る也。此儀必定なれば、雅樂頭があやまり、御にくみ尤の事なり。此相談の趣を堀

田筑前守○正一に館林様へ由上候に付、御本丸へ被爲入候より、筑前守を忠臣とおほしめし、段々御取立といふ。又一説、御本丸へ入せ給ひてより、雅樂頭様子あし、是は嚴有院様御代の時、けには雅樂頭おごり超過仕、諸人下馬將軍といひし程の事なり。さるにより、嚴有院様御名代として、上野へ參詣の時も、上野より歸り候と、私宅にて休足致、扱登城す。此段當將軍様兼御聞被及候にや、上野へ御名代に雅樂頭を被遣候て、後御上下をめし、雅樂頭下向を急度御まち被成候所、例之如く私宅へ歸登城おそし、依之上意に、何とて雅樂頭はをそく下向するぞと、間をおき、兩度之御尋なり。御そばの衆、此段雅樂頭所へ人をはしらかし告る故、雅樂頭登城せしめて、御名代相勤唯今下向の由申上ると、其段聞召、雅樂頭には何とも御言葉なく、御立腹の御聲にて、かた衣をとるべしと被仰、是は上野へ御名代に被遣候に、下向までは御行儀をくつろけられず御座候に、我まゝに、私宅にて雅樂頭休足仕候て、登城遅々仕との御とがめと聞えし。又慶昌院様小石川御下屋敷に御座被成候を、御城へ御入可被成と、堀田備中守に御普請被仰付、出來御移徙の節、御褒美として、堀田備中守に御刀を被下、桂昌院様の御盃を頂戴仕る。其座過て後、酒井雅樂頭、稻葉美濃守も桂昌院様へ御目見え仕候へと被仰付候に付、先規ならば何事にも雅樂頭、其次に美濃守と、段々如此たるべきに、今備中守が跡へ可罷出様無之とや思ひけん、重御次之節、御目見え可申上と、其日御目見え不仕候事。又越後守光長卿の家臣、永見大藏、荻田主馬兩人



と、小栗美作守相論の事ありて、越後騒動す。依之先年兩方對決の上にて、永見大藏菝田主馬御預け成、小栗美作は越後へ歸。此段雅樂最負を以私の裁判のやうに思召。又越後守仕置よろしからざれば、越後を御つぶし可被成との御心得なり。雅樂頭申上るは、越後の御家は、結城の秀康卿の御すゑ一伯殿の御子にて、公方の御家より御總領家なり。然れども秀康卿は太閤の御養子と御なり、其後結城の家を御繼被成候故、御舎兄様と申ながら、天下の御讓をうけさせ不給、御三男にて台徳院様秀忠。川將軍にならせられ候。權現様御草創の事も、秀康卿の御武勇にて御座候。秀康卿の御子一伯殿御心隨意にして、御氣まゝにて、あらしき事多く候ゆへ、一伯殿御舎弟方へ御知行を分つかはされ候て、越後守殿は嫡々の御家なれども、廿四萬石を領じおはしませ、御一門の中には、一に重き御家にて候へば御つぶし被成候事いかゞ、其上先規より主人と家老との出入さへ、家老をば御流主人には科を御免被成候例也、まして是は家臣とくゝとの出入にて候へばいかゞと申上る。上意にいはいはく、然れども越後守は大悪人なりとの御意也。雅樂頭又申上る、今の世善人と申は、御一門様方を始一人も御座有間敷候と申。上意に、然らば我をも悪人とおもふにやと被仰候。雅樂頭申上、御仕置三年はやく御座候と申。上意に曰、それは唐の例也、今の世にはあふべからずと、大に御立腹の體なるゆへに、雅樂頭申上る、拙者儀年罷寄、そでもなき事を申上候て、上意にさばり申候とて出座仕、雅樂頭上意にそむきぬる事は、三の諫言申上候ゆへ

米麥大豆在  
高錄上

米麥大豆在  
高錄上事蹟

廿九日甲申

也。一つは右越後殿の事。二は若君様を西之丸へ被爲入候事早く御座候よし。是は嚴有院様御遺命に、徳松様へは館林を御城御人ともに進ぜらるゝとの儀に候へば、若君様と御仰被成候事少早く御座候との儀。三には御能を自身あそばし候事を留候事也。酒井雅樂頭が家に、權現様被仰置候御軍法、其外様々の御書付有。それを被聞召、御城へ上候へとの上意也。雅樂頭申上る、右之御書付は誰にもみせ申など、權現様御誓文書御座候まゝ、上意に候とても差上候事難成由申上る。又上意に、それは他門の事、天下のあるじたる我等にはくるしかるまじ、遣可申との上意也。雅樂頭申上る、何と上意たりといへども、指上候事は成間敷由申上、子息河内守方へ越候て、右之書付を河内守に渡し、誰人の方より取に參候とも相渡し申間敷候、其科により切腹いたし候者、右の御書付を火に焼、水にて吞て、腹中におさめ候て残すべからず、もし是を背たらば七世までの勘當と申渡し、十二月廿六日下馬前の上屋敷を出て、菅藻の下屋敷へ引込、夜四ツ時分、常のもち鑓をばとゞめ、よの鑓一本、六尺も無紋の物をきせ、供廻りわづかにて忍びたる體にて菅藻へ參候。延寶九辛酉の年五月十九日に、酒井雅樂頭忠清於菅藻病死仕る也。此だんは皆雜説にて、實正は——御當代記

セシム。

○延寶九年(紀元二三四)一月三日

米麥大豆在高錄上

撰要永久錄ニ據ル。

市街充實時代



覺

一、米、麥、大豆。

右之品々、町中諸問屋諸商人其外ニ悉買置、自分藏又は貸藏ニ入置候分、不殘明朔日ノ相改、石高俵數何程有之候旨、有躰ニ書上可申候。但其内悉買手有之候ハ、何程ニ有之賣拂可申候。相改候内、諸國ノ追々到來候分ハ、其町之名主五人組ニ相斷、書上可申候。是又賣拂候義ハ勝手次第賣拂可申事。

一、前々如相觸候、買置しめ賣一切仕間敷候事。  
一、所々藏々ニ重々奉行廻し相改可申候間、其節石高相違無之様可仕候。爲其前以相觸候事。

右之條々相背相違於有之ニ、可爲曲事者也。

西〇延寶九年正月廿九日

右御觸、町中連判

護國寺創建

二月七日辛卯

延寶九年紀元二三〇、辛卯三正綜覽。

上野國八幡別當大聖護國寺住持亮

賢ニ高田藥園

石川區小

ノ地ヲ賜ヒテ寺院ヲ創セシム。大聖護國寺ト

號ス。○天和日記。憲廟實錄。萬天日錄。延寶遺錄。甘露叢。雜載。渡邊幸菴對話。常憲院殿御實紀。江戸名所圖會。東京通志。

護國寺創建

願末左ノ如シ。

一、同年二月

天和元 七日ニ、上州碓氷八幡別當大聖護國寺御座之間ニ被爲召、高田御藥園

之内ニテ屋敷被下之。

——天和日記〇萬天錄同。

七日〇延寶九年

上野國八幡別當大聖護國寺住持法印亮賢ニ、高田御藥園之地を賜て寺とす。仍て大聖護國寺と號ス。亮賢初メ御在胎のときより御祈禱を奉りしゆへなり。

——憲廟實錄

七日〇延寶九年

一、於御座之間上州八幡大聖護國寺高田御藥園寺地ニ被下之旨、被仰出之。依之只今迄

御藥園御預ケ田澤道哲營中ニ招之、御用地入候間、來ル十日以前、自分并同心迄早々引

拂可申之旨、内膳正○板倉列座、能登守○土井傳達之。美作守○石川侍座也。席御

右筆部屋縁頼。——延寶遺錄

一、七日〇延寶九年

上州碓氷八幡別當大聖護國寺御坐間へ被召、高田御藥園ノ内ニテ

屋敷被下。

——甘露叢

七日〇天和元

上野國碓氷郡八幡宮別當大聖護國寺亮賢召て、高田藥園の地を賜は

り、寺を構造すべしと命ぜらる。今の太塚の護國寺これなり。○中略。世に傳ふる所。此

尊ありけれハ、御母君懐胎の時より、平産の御祈りなど仰付られ、御誕生の時も、御

尊の外よりこばれ給ひ、潜邸の御時より——常憲院殿御實紀

二月〇天和元 高田にて護國寺開創。上野國八幡別當護國寺住持法

——武江年表

市街充實時代

六七三



延寶九辛酉年  
二月十一日渡上ヶ地不知  
一、雜司ヶ谷御藥園壹萬八千壹坪  
但、建家共

大聖護國寺  
——屋敷書拔

護國寺由緒并來歴書

桂昌院様○本庄氏。正保元年之頃初瀬觀音へ御立願之儀御座候テ、上野國八幡大聖護國寺住亮賢へ御祈誓被仰付候所、同三戌年正月八日若君様○徳川綱吉。御誕生被遊候。彌無怠慢御祈禱申上候處、御願成就ニ付、天和元酉年常憲院様○徳川綱吉。御代、御當地比御藥園之地初瀬觀音ヲ御寫シ被遊、觀音堂御建立并護國寺御取立被遊、桂昌院様御信仰之琥珀佛之觀音ヲ被遊、御安置、右護國寺住職ニ、上州八幡大聖護國寺亮賢ヲ被仰付、御室御所之末寺ニ被遊、御室之法流相傳ニテ、護持院同様ニ永々長日御祈禱無怠慢相勤候様常憲院様御直ニ被仰付候ニ付、無怠慢相勤來り候。○下略。

——雜載

將軍家光公○徳川。出頭の女中に、一位殿と申女あり。細工の上手にて、家光公の御像を透くに木像に奉刻、或時風と部やへ被爲入、急成に依てかくし申間もなく、箱に入側に置候處に、將軍家其蓋を御取被遊候て、御覽被遊、何れに候哉と御尋候處に、一位殿御受なく、赤面す。時に彼像をつくく、と御覽被遊候て、是は予が像に似たり、鏡を御乞被爲合、御覽候て、正敷予が像なりと上意の時、御請被申上候、日頃御厚恩難有まゝに、順死を申さへ先つ君ハ私より先へ被成御座苦なり、左候ハ、宮仕の心得にて朝暮可拜ため

に奉刻旨、心底を有の儘に申上る處、御機嫌にて、とても事の事に予ハ髮爪をも可遣と、夫をうへ可申旨上意にて被下様、家光公より御拜受の唐佛の觀音を御安置、其郭内に堂を建られ、右木像二躰を被移、二重也。扱木像出來、部やに安置する處に、上意に神君の御繪像を被成爲御見、御木像に可刻旨被仰出、出來、御殿に御安置也。二代共に家綱公御代になり、御城内に被指置を憚思召て、内々糺町の天神の郭内へ可被移と御僉儀有之といへども、郭内せハきゆへ、大塚の御茶園を引ならし、其跡へ何となく表向は觀音堂を御建立、桂昌院厨子に被仰付堅く鎖し、花立釣燈籠各金にて造立、神君の御前にハ金幣二本被建之、寺號を護國寺といへるも故有歟。寺領千二百石なり。

——渡邊幸菴對話

神齡山護國寺 悉地院と號す。音羽町の北にあり。新義の眞言宗にして、和州長谷小池坊に屬す。開山を亮賢僧正と號す。公より寺領千二百石を附せられ盛大の地なり。古鹿子に云、寺領三百石、大猷公守御本尊馬腦石觀音像開基とあり。  
本堂本尊如意輪觀世音。瑪腦石にして、天然のものなり。元祿半の頃、前川三左衛門老師の弟子黒瀧の潮音、前川氏と師弟の縁あるが故に、潮音に授與す、其後故あつて桂昌一位尼公○本庄氏崇敬し給ひし由事跡合考に見えたり。本堂の柱を猿柱と云て、木理猿の面に等し。  
藥師堂。本堂左にあり。本尊藥師佛ハ、昔當寺草創の時、此地蟹か池より出現ありし置。

市街充實時代



西國三十三番順禮札所寫 本堂より西の方の山間にあり。天明年間深林を伐開き、

の眼をよる

歡喜天 不境門壽命院に安す。桂昌一位尼公尊信の本尊なりとそ。永代

仁王門 の仁王の裏に安置の廣目増長の法を修せしめられ、寺産を給ふ。

今宮五社 大當所鎮守と云。天照太神宮、八幡大神、春日大明神、今宮大明神、三部

涅槃像大幅 當寺寶物を祭る音羽町青柳町櫻木町等の鎮守なりと云傳ふ。

當寺ハ延寶九年二月七日上野國八幡別當大聖護國寺の住持法印亮賢に、高田御藥園

の地を給ひて寺とす。依て大聖護國寺と號亮賢初御在胎の時より御祈禱を奉りし故

也。天和元年に憲廟將軍の宣下蒙り給て、同年五月廿八日都下新建の大聖護國寺を仁

和寺に録して院家とす。依て寺領三百石を附し給ふ。貞享二年十二月廿八日に大聖護

國寺住持法印賢廣黃衣を許る。其後元祿年中桂昌院殿一位尼公の御志願によつて、御

藥園の地を轉じ、其頃御建立ありし江戸密乘最大の梵宇にして、結構備れり。春時は櫻

花爛漫として、頗る地勢洛の御室に髣髴たり。武江神寺錄に、元祿十丁丑相馬彈正少

此地元御藥園なりしを、後白山にうつされ、其跡へ當寺を御建立ありしといへり。

求涼亭云、當寺ハ京の清水寺を摸するに、故に前の町を音羽となつて、又青柳町

櫻木町などなつつけられ、又音羽町九丁あるも、京に一條より九條までの名

當寺に桂昌一位尼公御遺物を收らる。今猶傳へて開帳の頃諸人に拜せしむ。金銀をち

りはめ其結構言葉にのへ盡しがたし。

——江戸名所圖會

神齡山悉地院護國寺

小石川區大塚坂下町ニアリ。域内壹萬九百八十五坪、眞言宗。初徳川綱吉母本莊氏

院。桂昌 僧亮賢ニ歸依シ、延寶八年庚申春綱吉命シ藥園ノ地ヲ寄セ、堂宇ヲ造營セシ

メ、天和元年辛酉三月ヲ以テ成ル。亮賢ヲ以テ開山トナシ、寺領三百石ヲ付ス。亮賢ハ

上野小野村 甘樂 人ナリ。幼ニシテ同村得成寺僧慶深ニ從ヒ薙染シ、大和ニ遊學シ、

兼テ筮ヲ善クス。貞享四年丁卯三月寂ス。 權僧正 法弟賢廣第二世トナリ、元祿三年

庚午春西北清境ノ地壹町許ヲ付シ、同七年甲戌寺領三百石ヲ加フ。十一月賢廣隱栖

シ、三世僧快意ノ時、同十年丁丑正月綱吉院内ニ觀音堂ヲ營ス。即今ノ堂ナリ。同八月

寺領百石ヲ加フ。同十六年癸未九月綱吉本莊氏ト共ニ來臨シ復五百石ヲ加賜シ、壹

千貳百石ヲ領ス。享保二年丁酉護持院ヲ併ス。本尊觀音像ハ、 琥珀或瑪瑙 唐佛ニシテ

立像ナリ。堂前柱聯ハ、清沈德潛書スル所ナリ。

——東京通志

〔參考〕桂昌院

常憲院公 桂昌院殿の傳系

御母堂 一、二條關白光平公家臣本莊氏は、北小路家の末葉にして、京都賀茂の神職より出た

り。然るに本莊太郎兵衛宗利代に至て、始て本莊氏と改。前妻は二條家の女にて、男子

一人女子二人出生す。一人の女子は松平左門義賢 本名花井 妻とす。一人の娘は佐野善

兵衛妻也。男子は二條家の雜掌也。本莊宮内少輔宗孝是也。後妻は京都堀川通西籤屋

市街充實時代

六七七



町八百屋仁左衛門とて、太郎兵衛方にも出入の者の妻成しが、仁左衛門死後やもめとなり、女子二人連れて本莊太郎兵衛方へ奉公に來りしに、手を付て男子一人出生す。則本莊因幡守宗資是也。連來りし女子一人は、大宮大内藏大輔妻とす。同一人は常憲公の御母堂桂昌院殿一品大夫人也。桂昌院の始はおたまといひし時、六條宰相有純卿息女お梅の方の縁を以、京都より江武に來り、大猷公御代に春日の局諸事指南し、御側へ被召出、秋野と名を稱す。然るに正保三丙戌年正月八日、徳松君常憲公御事也。奉産、其後徳松君館林の御殿に御住居の所、延寶八庚申年五月八日、將軍家綱公薨御に付、館林の綱吉公、不慮に御養君と成給ひて、御代々御相續成りしとき、桂昌院にも三の丸に御移り有、御代々御外族多しといへども、桂昌院の如く御仁惠深きは又類ひあらず。本莊一族は云に不及、其餘御縁類御遠族多勢御取立、何も高位采地を授て、其門葉大きに繁昌す。第一に神佛を御信心有て、諸寺諸山神社佛宇、夥敷御再興有。元祿十五年二月十一日、從一位に御昇進有。爰に於て彼御家本莊安藝守宗資、同敷美濃守宗春、同兵庫頭宗信父子二人は、松平の稱號を賜る。其外御由緒によりて、其家を再興せらる。或は門信を輝し、榮盛なるもの多しといへども、中にも六角越前守廣治、大澤出雲守基珍、大澤播磨守宗質、戸田中務大輔長興、森安藝守頼利、佐野豊前守直行、佐野信濃守勝昌等也。右桂昌院殿、莫大の御恩に預れり。寶永二酉六月二十二日逝去也。則桂昌院殿、從一位仁譽、興國惠光大姉と號す。扨導師は時の住職貞譽大僧正也。御遺

桂昌院本庄氏筆蹟

東京護國寺所藏

桂昌院筆蹟 整一尺四寸三分、横一尺六寸七分。

觀音にまうて、

此寺のあらんかきりはちかひぬる君をば守れ大慈大慈も

高き屋の松のめくみにおのづから五地の御法も長くてらさん

ト有リ。牧野成貞ノ添書 整一尺五寸七分、横一尺七寸七分。ヲ附ス。

右二首も、桂昌院様御歌也。庚午元禄三年九月廿五日、護國寺觀音堂に御參詣被遊、御拜畢、天下太平、國土安穩、御武運長久、御子孫繁昌なることを、御念被遊、自御筆を染らる。堂主吾に跋書を求む、恐多けれ共、後代に至まで御筆の跡をあらはさんがため、辭せずして録之。

從四位下侍從兼備後守源成貞



町八百屋仁左衛門とて、太郎兵衛方にも出入の者の妻成しが、仁左衛門死後やもめとなり、女子二人連れて本莊太郎兵衛方へ奉公に來りしに、手を付て男子一人出生す。則本莊因幡守宗資是也。連來りし女子一人は、大宮大内藏大輔妻とす。同一人は常憲公の御母堂桂昌院殿一品大夫人也。桂昌院の始はおたまといひし時、六條宰相有純卿息女お梅の方の縁を以、京都より江武に來り、大猷公御代に春日の局諸事指南し、御側へ被召出、秋野と名を稱す。然るに正保三丙戌年正月八日、徳松君常憲公御事也。奉産、其後徳松君館林の御殿に御住居の所、延寶八庚申年五月八日將軍家綱公薨御に付、館林の綱吉公、不慮に御養君と成給ひて、御代々御相續成りしとき、桂昌院にも三の丸に御移り有、御代々御外族多しといへども、桂昌院の如く御仁惠深きは又類ひあらず。本莊一族は云に不及、其餘御縁類御遠族多勢御取立、何も高位采地を授て、其門葉大きに繁昌す。第一に神佛を御信心有て、諸寺諸山神社佛宇夥敷御再興有。元祿十五午年二月十一日從一位に御昇進有。爰に於て彼御家本莊安藝守宗資同敷美濃守宗春同兵庫頭宗信父子二人は、松平の稱號を賜る。其外御由緒によりて其家を再興せらる。或は門信を輝し榮盛なるもの多しといへども、中にも六角越前守廣治、大澤出雲守基珍、大澤播磨守宗質、戸田中務大輔長興、森安藝守頼利、佐野豊前守直行、佐野信濃守勝昌等也。右桂昌院殿莫大の御恩に預れり。寶永二酉六月二十二日逝去也。則桂昌院殿從一位仁譽興國惠光大姉と號す。扱導師は時の住職貞譽大僧正也。御遺

桂昌院本庄氏筆蹟

東京護國寺所藏

桂昌院筆蹟横一尺四寸三分、縦一尺六寸七分。

觀音にまうて、

此寺のあらんかきりはちかひぬる君をば守れ大慈大慈も

高き屋の松のめくみにおのづから五地の御法も

長くてらさん

ト有り。牧野成貞ノ添書横一尺五寸七分、縦一尺七寸七分。ヲ附ス。

右二首も桂昌院様御歌也。庚午○元祿三年。九月廿五日護國寺觀音堂に御參詣被遊、御拜畢、天下太平、國土安穩、御武運長久、御子孫繁昌なることを、御念被遊、自御筆を染らる。堂主吾に跋書を求む。恐多けれ共、後代に至まで御筆の跡をあらはさんがため、辭せずして録之。

從四位下侍從兼備後守源成貞











言にて、御廟所の傍に常念佛を始、念佛料五百石、靈屋料七百石、都合千二百石御寄附也。

一、本莊は北小路宮内少輔俊孝。其頃太郎兵衛利宗、二條殿家臣也。——玉輿記

〔附記〕 延寶頃ノ東叡山

玉露叢左ノ如ク記ス者、延寶頃ノ東叡山ヲ想見ス可シ。

一、武州上野ノ山院寺號ハ東叡山圓頓院、寛永寺ト云々。日門御寺ノ事。

輪 王 寺

一、三千石

輪 王 寺

一、五百石

昆 沙 門 堂

前大僧正公海九條殿御養子也。

一、天台宗ハ法眼ヨリ大僧都法印迄ヲ和尚ト云。

門跡方ハ紫衣、其外ハ何色ニテモ着用也。僧正ハ紅衣、其外ハ何色ニテモ、但、紫衣ハ許サス。院家ハ白衣、黃衣、木蘭色、云ナリ。紫衣ノ袈裟ヲ着用ス。但、門跡ヨリ免許アリテ餘ノ色ヲモ着用ス。

右東叡山之夏、堯惠法印吾妻道之記ニ曰、往昔ハ忍ノ岡ト云シト也。依テ麓ノ池ヲハ不忍ノ池ト云。中嶋ニ辨財天ノ小社アリ、是近代ニ水谷伊勢守勝隆ノ再興ナリ。叡前ハ離レ島ニテ、小舟ヲ以テ往來シケレ、近年橋ヲ掛ラレシ、參詣ノ往來自由ヲ得タ



リ。不忍ノ堤ノ末ニ鎮坐、五條ノ天神靈社アリ。

東叡山ハ南光坊大増正慈眼ノ開基ニテ、寛永年中ノ御草創、江城之鬼門ニ當テ、惡

魔外道ヲ降伏シ、是鎮護國家ノ靈地ニテ、常ニ法燈ヲ挑ケソヘ、東照大権現ノ御宮ハ

金銀ヲノヘラレ、琢キ立タル軒ノ葦、敬拜スルニマバユシ。竝ニ大猷院殿寶樹院殿高

巖院殿ノ御靈屋、寔ニ寂光淨土モ遠カラネハ、參詣ノ貴賤殊ニ青陽ノ時ニ至リテハ、

花見ノ男女、衣紋ヲカヒツクロヒ、袖ノ匂ヒ鼻ヲ貫、永日ノ暮ナン、衷ヲ愁慕フ。

加々爪直清  
等處罰

九日癸巳延寶九年紀元二三四一掛塚江國邑主加々爪直清佐守ノ封ヲ

除キ、府邸ヲ收ム。代官伊奈忠利門左坐シテ米澤前國城主上杉綱憲彈

弼正大ニ預ケラレ、賜フ所ノ町屋鋪ヲ公收セラレ。紀玉露叢。寛政重修諸家譜。

加々爪直清  
等處罰事蹟

加々爪直清等處罰ハ、

一、同日二月十日。二、昨日於評定所、御預ニ被仰付之。

松平土佐守昌豐昌御預。

加々爪甲斐守澄直

石川美作守良總良御預。

加々爪土佐守清直

上杉彈正大弼綱御預。

伊奈左門利忠

右之通於評定所、彦坂壹岐守紹重

彦坂源兵衛治重

宮崎助右衛門景重

中根主税和正

天和日記

九日天和元年。この日遠江國掛塚領主加々爪土佐守直清封地一萬三千石收公せ

られ、實兄石川若狹守總良にあづけられ、致仕せし養父甲斐守直澄は、松平土佐守豊昌

にあづけらる。これは書院番成瀬吉右衛門正章が采邑と野論のことによて上裁をへ

しに、直清より注記し出したる所差誤あり、其上父直澄前に奉行職をも勤め、制度をも

辨へなから、加恩給はりし時、つばらに其地境をもたゞさず請取しひがごとあれば、嚴

科に處すべけれど、寛宥によてかく仰出さるとなり。代官伊奈左門忠利も、領地引渡す

とき、證狀を受とらざらしは心とゞかざることなりとて、これも采邑沒收せられ、上杉

彈正大弼綱憲にあづけらる。

——常憲院殿御實紀

一、延寶九辛酉之年二月九日、加々爪甲斐守を松平土佐守に御預け、子息加賀爪土佐守

を石川若狹守に御預け、是は嚴有院様御加増被下御知行高之外餘地候つるを不存振

にて、年貢を受納仕候に付て也。此儀に付、御代官伊奈左門を上杉彈正に御預け也。

——御當代記

一、伊奈左門町屋布多有之、公儀へ上り屋布ニ成ト、云々。延寶九年二月十七日加々

野論ニ連累シテ上杉彈正大弼ニ

預ケラレ、手代二人追放セラレ、

忠利伊奈。

略。其後御代官となり、中天和元年二月九日加々爪土佐守直清成瀬吉右衛門

正章か采地の農民等境界のことより争論に及ぶ。忠利先に加々爪甲斐守直澄に領



地を渡すのとき、券書をもとらざりしより、これ等の事に及びしこと、重き御沙汰にも及はるべしといへとも、これを宥められて、上杉彈正大弼綱憲に預けられ、元祿五年五月九日ゆるさる。

—寛政重修諸家譜

直澄府邸ノ收公ハ、下文ニ大岡彦坂二人ニ分賜スルコト見ユ。江戸方角安見圖鑑今ノ築地輕子橋外ニ、加々爪土佐ト有ル者是ニシテ、貞享元年ノ江戸繪圖ニハ、大岡備前彦坂伯耆ト記ス。

本所奉行更任

十九日癸卯延寶九年(紀元二三三四年)二月○癸卯三正綜覽。本所奉行中坊秀時兵衛長。目付ニ轉ズ。

廿九日癸丑延寶九年(紀元二三三四年)二月○癸丑三正綜覽。書院番松下重良孫太夫。代リテ本所奉行ト爲ル。天和日記。延寶遺錄。柳營補任。寛政重修諸家譜。

本所奉行更任事蹟

本所奉行更任 左ノ如シ。  
一、同日天和元年。二、本庄奉行中坊長兵衛跡役、池田帶刀組松平孫太夫被仰付之。

廿九日延寶九年。中略。  
—天和日記

一、池田帶刀組松平孫太夫召之、本庄奉行被仰付之。中坊長兵衛跡役也。加賀守保忠朝傳達之。石川美作守乘。松平因幡守興。侍座。席御右筆部屋縁頼也。

—延寶遺錄

本所築地奉行

天和元酉二月十九日御使番。  
同(延寶)九酉二月廿九日同(○御書院番)池田帶刀組。

中坊長兵衛時秀。松平孫太夫重良。柳營補任。

重良八十郎。孫太夫。美濃守。從五位下。  
十一年寛。九月十三日御書院番に列し、中略。天和元年二月二十九日より本所

廿二日丙午延寶九年(紀元二三三四年)二月○丙午三正綜覽。郡山和國大。城主松平信之向日守。烏山下

野。城主板倉重種勝正。還上スル所ノ龍口市內。賜フ。天和日記。甘露叢。

松平信之賜邸 左ノ如ク傳フ。  
一、同日天和元年。二、松平日向守信。御座之間に被爲召、板倉内膳正重。龍口

上ケ屋敷被下之。  
廿二日延寶九年。松平日向守御坐ノ間へ召テ、御心易思召、大手先龍。板倉内膳屋敷

ヲ賜ノ由被仰付。  
—甘露叢

三月十五日己巳延寶九年(紀元二三三四年)二月○己巳三正綜覽。令シテ駄賃人足賃二割ヲ増額ス。

久撰要永。録。町觸。  
駄賃人足賃二割増 左ノ町觸有リ。

東海道宿々貳割増之覺

市街充實時代

松平信之賜邸事蹟

駄賃人足賃二割増

駄賃人足賃二割増事蹟



一、江戸の品川に貳里。

本駄賃 百四文。

から尻賃 六十四文。

人足賃 四拾八文。

中仙道宿々貳割増之覺

一、江戸の板橋に貳里半。

本駄賃 百七文。

から尻賃 六拾七文。

人足賃 五拾貳文。

日光海道宿々貳割増之覺

一、江戸の千壽に貳里八町。

本駄賃 百五文。

から尻賃 六拾六文。

人足賃 五拾文。

一、江戸の岩淵に三里拾五町。

本駄賃 百五十四文。

から尻賃 百四文。

人足賃 七拾四文。

一、江戸の下高井戸に四里。

本駄賃 百六拾四文。

から尻賃 百拾三文。

人足賃 七拾九文。

甲州海道貳割増之覺

一、江戸の上高井戸に四里拾參町。

本駄賃 百七拾文。

から尻賃 百拾九文。

人足賃 八拾六文。

當年道中就困窮。右之通駄賃人足賃共ニ増候間、當酉三月十五日より同十月晦日迄、如書面取之、十一月朔日より延寶三年卯正月可爲相定之通候。以上。延寶九年酉三月右之通道中筋駄賃人足賃貳割増ニ被仰付候間、此旨相守可申候。若違背仕候、可爲曲事者也。酉<sup>九</sup>年<sup>延寶</sup>三月<sup>九</sup>日<sup>延寶</sup>三月<sup>九</sup>日<sup>延寶</sup>御觸。町中連判。

○布令文略。(上文に同ジ。)

右御觸之趣、慥承届申候間、町中家持ハ不及申、借屋店かり地かり下々等迄爲申聞、急度相守可申候。若違背仕候、何様之曲事ニモ可被仰付候。爲後日町中連判之手形、差上ケ申候。仍如件。

延寶九年酉ノ三月十五日

町三人 寄衆 中

十月廿五日更ニ左ノ令有リ。

覺



一道中駄賃人足賃之儀、去ル延寶三年卯正月御定之上、貳割増ニ當西三月十五日、同十月晦日迄可取之旨、被仰付候得共、米高直ニ付、來戊三月、和五月迄、駄賃人足賃共ニ彌貳割増ニ被仰付候間、此旨相心得、町中家持ニ不及申、借屋店借裏々迄爲申聞、急渡相守可申候。若違背致候ハ、曲事可被仰付候。以上。

十月廿五日 ○天和元年

——撰要永久錄

附記、一  
運輸取締

〔附記、一〕運輸取締

覺

一道中、大名衆竝在番衆之荷物飛脚之由、かり名を申罷通者有之候。穿鑿之上、於相知、當人ハ不及申、江戸ニ宿可有之候間、可爲同罪候。西九年、延寶ノ三月

右之通被仰出候間、此旨急度可相守者也。西九年、延寶ノ三月

右御觸之趣、隨承届申候間、町中家持ハ不及申、借屋店かり地かり下々等迄爲申聞、堅相守可申候。若相背、御大名御在番衆之荷物飛脚之由、假名申、道中罷通候者御座候、當人ハ不及申、其者之宿共、如何様之曲事ニモ可被仰付候。爲後日町中連判之手形差上申候。仍如件。

延寶九年酉ノ三月十五日

町三人 年寄衆中

——町觸

附記、二  
相生橋際其他修理

〔附記、二〕相生橋際其他修理

一、相生橋之際、筋違橋御門近所、飯田町御門四ツ谷御門御堀之土手、並水際石垣、破損之所々御修覆入札ニ被仰付候間、望之者來ル十八日、廿二日迄之内、向寄次第、松平甚三郎殿見。隆大久保甚右衛門殿昌。阿部四郎五郎殿重。御宅へ參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

三月十六日 ○延寶九年

町年寄 三人

一、相生橋之際、筋違橋御門近所、飯田町御門四谷御門御堀之石垣、破損御修復被仰付候。依之、築石入札被仰付候間、望之者ハ、來ル十日、十一日兩日之内、大久保甚右衛門殿松平甚三郎殿御宅に勝手次第に參、御注文寫取、入札可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

卯月八日 ○延寶九年

町年寄 三人

——町觸

酒井忠舉等  
賜邸

廿一日乙亥。○延寶九年(紀元二三三〇)一、鹿橋野國上。城主酒井忠舉。河内守。二、明石城主松平信之。○乙亥、三、正綜覽。邸ヲ賜ヒ、徳川徳松傳内藤重頼。○若二、若松國播磨。代城主保科正容。○重四、邸ヲ賜フ。廿三日丁丑。○延寶九年(紀元二三三〇)一、二、七屋鋪ヲ賜ヒタル者有リ。○天和日記。萬天日録。屋敷書。拔内藤家懷舊叢書。

酒井忠舉等  
賜邸事蹟  
酒井忠舉

酒井忠舉等賜邸 傳フ、

一、同日 ○天和元年 松平日向守之。信屋敷酒井河内守舉。忠被下之日。錄同。

市街充實時代



内藤重頼

東京市史稿

一、同日三月廿一日。保科重四郎容。正屋敷内藤若狭守頼。重被下。○萬天。同日三月廿六日。内藤若狭守拜領之屋敷。昨日移徙之由。天和日記

阿部明正

延寶九年辛酉三月廿二日重頼公。内外櫻田御門之内保科肥後守重四郎。上ケ屋敷御拜領。糺町ヨリ三月廿五日御引移。糺町跡御屋敷。同年十一月廿八日阿部七三郎明。正被下之。同年九月。七月五日。糺町之御屋敷御門前傳養地面御借被成候付。爲代銀七十二匁被遣之。内藤家懷舊叢書

大岡清重  
彦坂重治

一、同○天和元。廿三日。加々爪甲斐守澄。直鐵炮洲上ケ屋敷大岡五郎右衛門重。清彦坂源兵衛治。重兩人被下。天和日記  
一、廿三日。延寶九。加々爪甲斐守屋敷鐵炮洲。大岡五郎右衛門彦坂源兵衛兩人之賜之。甘露叢

延寶九年酉年  
四月七日渡。同斷。○上ケ地不知  
一、鐵炮洲。千七百坪。但。建家長屋共。  
同日。○八月三日渡。同斷。○上ケ地不知  
一、鐵炮洲。築地千八百八拾九坪。

同。○役名不知  
彦坂源兵衛  
役名不知。  
大岡五郎右衛門  
屋敷書拔

町奉行交迭

廿七日辛巳。年○延寶九年。紀元二三四一。町奉行島田忠政。職ヲ奪ハレ閉門ヲ命ゼラル。四月六日己丑。年○延寶九年。紀元二三四一。持弓頭北條氏平。藏。町奉行ニ任ズ。院殿御實紀。柳營補任。町憲。

町奉行交迭  
事蹟

持弓頭北條氏平代リ任ズ。町奉行島田忠政。松平光長家人鞠問ノ事ニ依リ職ヲ褫レ閉門セシメラル。

一、同日三月廿八日。二、嶋田出雲守政。忠。昨日御役被召上之。閉門被仰付之由。  
一、同○天和元。七月。御役替被仰付之。略。中。

御先手弓  
北條新藏○氏  
天和日記○萬天。錄同。

二十七日。年○延寶九。町奉行島田出雲守忠政。役を免して閉門。松平越後守家司所論の事を承りて、未決せざるうちに役を免せんことを請に依てなり。憲廟實錄

四月六日。年○延寶九。同弓頭。北條新藏町奉行と成。天和元。三月。○中略。この日町奉行島田出雲守忠政職うばはれて閉門せしめらる。こは松平越後守光長が家人鞠問の事奉りてありながら、其事いまだ決せざるに、其身近來遺忘多ければとて、職とかむこと請出しは、いとひが事なりとの御答なり。天和元。四月。○中略。同職弓頭。北條新藏氏平町奉行となり。○下。市街充實時代



常憲院殿御實紀

町奉行

延寶九酉三月廿七日御役被召放、小普譜入差控。

島田久太郎忠政出雲守。

延寶九酉四月六日御持弓頭ヨリ。

天和二戌四月廿一日御役料千俵地方直御加増。

北條新藏氏平安房守。

貞享四卯年向後一人宛火事場可出旨。

柳營補任

元祿四未十二月廿五日〇十日敷五百石御加増。

同 六酉十二月廿六日〇十五日敷御留守居。

氏平孫七郎新藏。安房守。從五位下。致仕號常圓。

延寶五年四月十四日御持弓の頭にうつり、天和元年四月六日町奉行にす、み、十二

月二十六日勤務怠りなき事を賞せられて時服四領を賜ふ。二十七日從五位下安房

守に叙任す。二年四月二十一日上野國山田新田兩郡のうちにをいて采地千石を加

賜せられ、貞享元年十二月十二日其つとめに精入るにより、時服四領を賜ふ。元祿三

年十二月十九日時服三領黃金五枚をたまふ。四年十二月十日また同國邑樂新田兩

郡のうちにをいて五百石の地を加へらる。

覺

一、昨日北條新藏様町御奉行被仰付候。就夫町中之者御悦之新藏様四軒町之御屋敷に  
伺公仕候義、前々御出入町人之外、一切無用可仕旨、被仰付候。重る此方申渡候迄は、

無用可仕候。此旨町中不殘可被相觸候。以上。

四月七日〇延寶九年

町年寄三人

覺

一、明後廿三日北條新藏様町中名主御禮御請可被成由被仰候間、月代をそり、麻對之上  
下を着明後廿三日朝五ッ奈良屋所に可被參候。若病氣之る不罷出候ハ、令明日中、  
其斷喜多村所に可被申越候。尤悴など名代之罷出候事無用可仕候。以上。

五月廿一日〇延寶九年

町年寄三人

——撰要永久錄〇町同。

一、北條新藏様、昨日御官位被仰付、安房守様之御成被成候間、左様相心得可被申候。時分  
柄之候間、必御悦上り申間敷候。

十二月廿八日〇天和元年

町年寄三人

——町觸

附記 屋鋪給賜

〔附記〕 屋鋪給賜

依田守

延寶九辛酉年

安山木正

四月二日〇延寶九年同斷〇上ヶ地不知  
一、清水御門前七百貳拾坪四合  
同日渡。同斷。

一、同所七百貳拾坪四合

同役名不知  
依田三右衛門〇安守  
同 山木五郎左衛門〇正次。

——屋敷書拔

市街充實時代

六九一



土井利房其  
他屋鋪給賜

四月七日庚寅延寶九年紀元二三  
四年足利野國。邑主土井利房登守能。其他屋

土井利房其  
他屋鋪給賜  
事蹟

鋪ヲ賜フ者若干錄。天和日記。萬天日  
錄。甘露叢。寬政呈譜。

土井利房其他屋鋪給賜

一、同日天和元年。二、屋敷拜領之面々、

酒井河内守○忠。上ケ屋敷

土屋相摸守上ケ屋敷

三宅内藏助上ケ屋敷

三河町酒井雅樂頭抱屋敷

三人に割被下レ之。

伴道由上リ屋敷

土屋能登守房○利  
金田遠江守○正  
北村安齋  
岡了雪  
箕浦壽元  
高麗春澤  
元康宗順

——天和日記○萬天  
日錄同。

一、七日○延寶九  
年四月。

屋鋪酒井河内守上ケ屋鋪土井能登守へ、土屋相摸守上ケ屋鋪金田遠江守へ、三宅内藏  
介上ケ屋鋪北村安齋、酒井雅樂頭三河町抱屋鋪岡了節、箕浦壽元、高麗春澤、道三河岸塙  
道由上ケ屋鋪元康宗順賜之。

——甘露叢

土井能登守源利房幼名七之助。

土井利房  
金田正勝  
北村安齋  
岡了雪  
箕浦壽元  
高麗春澤  
元康宗順

一、同年○延寶九年。四月七日常盤橋内酒井河内守上ケ屋敷被下之。但、此節是迄之大手前屋  
敷差上候儀と被存候得共不詳候、  
正勝金田近江守。始與三左衛門。又三左衛門。隱居梅山。  
同年○天和。四月七日、神田橋内ニる屋敷拜領仕、同年七月廿二日御加増貳千石拜領、都  
合五千石罷成相勤。

——寬政呈譜

延寶九辛酉年

四月九日渡。同斷。上ケ地不レ知

一、駿河臺七百八拾八坪貳合

但、建家長屋共。

四月十二日渡。同斷。上ケ地不レ知

一、三河町四間町六百六拾坪

但、建家長屋共。

同日渡。同斷。

一、同所六百五坪

但、右同斷。

同日渡。同斷。

一、同所五百五拾坪

但、右同斷。

役名不レ知  
喜多村安齋

同  
岡了節

同  
箕浦壽元

同  
高麗春澤

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

同  
屋敷書拔

屋敷書拔ニ據レバ、堀田正英○對ノ鐵炮洲邸ヲ領受スル亦是日ニ在ル者ノ如シ。

延寶九辛酉年

四月七日渡。同斷。上ケ地不レ知

一、鐵炮洲貳千六百拾壹坪

但、右同斷。○建家長屋共。

堀田正英

市街充實時代

六九三



萬天日錄左ノ如ク見ユルバ、本邸歟非歟。正英是年九月六日若年寄ニ任ズ。

一、同年十月。晦日、堀田對馬守今度拜領之屋敷ハ昨夜移ノ由。

本所奉行更

十四日丁酉年〇延寶九年紀元二三四一 本所奉行松平重良〇孫太夫 目付ニ轉ジ、

廿五日戊申年〇延寶九年紀元二三四一 書院番井戸良弘〇十郎右衛門 本所奉行ト

爲ル。〇寛政重修諸家譜柳營補任。

本所奉行更

本所奉行更任 寛政重修諸家譜松平重良譜ニ、重良延寶九年四月十四日本所奉行ヨリ

目付ニ轉ズト見ユルコト、既記ノ如シ。

一、同日〇天和元年四月廿五日。ニ御役被仰付面々〇中。

本庄奉行

安藤壹岐守組 井戸十右衛門〇良

天和日記

本所築地奉行

同年〇延寶九年四月廿五日同〇御書院番安藤壹岐守組 井戸十郎右衛門〇良

良弘〇十右衛門。三十郎對馬守志摩守。從五位下。致仕號春雪。

柳營補任

承應三年二月二十七日御書院番となり、〇中天和元年四月二十五日より本所の奉行をつとめ、三年三月二日御先弓の頭となり、〇下 寛政重修諸家譜

松平信興等

十六日己亥年〇延寶九年紀元二三四一 若年寄松平信興〇因幡守 足利〇下野國 邑主

土井利房〇能登守 返上スル所ノ大手邸〇市内麴町區 ヲ賜ヒ、十八日辛丑年〇延寶九年紀元二三四一 返上スル所

ノ神田橋内邸〇市内麴町區 ヲ賜フ。〇天和日記延寶遺錄寛政呈譜

松平信興等賜邸 頭末左ノ如シ。

一、同年〇天和元年四月。十六日、御前に松平因幡守〇信被爲召之、土井能登守〇利大手ノ上ケ

屋敷被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

天和日記

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

牧野成貞等

五月十三日乙丑年〇延寶九年紀元二三四一 側衆牧野成貞〇備後守 故鳥羽〇志摩國 城

主内藤忠勝〇和泉守 ノ濱町邸〇市内日橋區 ヲ賜ヒ、忍藏〇武藏國 城主阿部正武〇豐後守 前

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

市街充實時代

稻葉正往

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。

一、同日〇天和元年四月十八日。二、松平因幡守上ケ屋敷稻葉丹後守往〇正被下之。



掛塚

江國。邑主加々爪直清○土守。ノ土器町邸○市内ヲ麻布區。ヲ賜フ。○天和日記。萬天日錄。寬政呈譜。

牧野成貞等賜邸

牧野成貞等賜邸事蹟

成貞○牧野。從四位下。侍從。備後守。幼名兵部成恒。後藏人。號「大夢」。

阿部正武

延寶九○天和元年。五月十三日於濱町内藤和泉守元屋敷拜領。

寬政呈譜

同日○天和元年。五月十七日。乙、阿部豐後守○正武。下屋敷拜領之。是ハ土器町加々爪土佐守○直上ク屋敷也。

夕屋敷也。

天和日記○萬天日錄同。

廿日壬申

延寶九年○紀元二三四一。五月廿日。府内定杭内ノ駄馬騎乘ヲ申禁ス。○撰要永

町久錄。

定杭内駄馬騎乘申禁 是年四月ノ發令也。五月廿日町觸有リ。

定杭内駄馬騎乘申禁事蹟

覺

一、先年所々御定置候杭より内ニシテ、駄賃馬竝小荷駄馬口付之者馬ニ乘申間敷旨、堅被仰付候處此頃猥ニ乘候由相聞ニ付、今度御改、杭打場所新規御定被成候間、町中辻番之者ニ申付、堅ノセ申間鋪候。若押候ニ乘候馬子有之候ハ、其者之宿ニ預ケ置其様子兩御番所○可申上旨。被仰付候間、辻番之者無油斷相改可申候。自然見のかしに仕候由相聞候ハ、其所之辻番急度可爲曲事由被仰出候事。

東

一、深川元番所。

- 一、同靈岸橋。
- 一、横山内記屋鋪前。
- 一、深川大學院前。
- 一、本所三ツ目橋横堀南向。
- 一、本所横堀末水野小左衛門組屋鋪近所。
- 一、同北本所業平橋。
- 一、同所源兵衛橋。

北

- 一、淺草聖天町。
- 一、同所門跡前。
- 一、下谷宗源寺前。
- 一、同所安藤傳右衛門組屋鋪前。
- 一、谷中永隆寺前。
- 一、同所甲府様御屋鋪前。
- 一、本郷之末森川宿。
- 一、小石川高音寺大膳寺前。
- 一、同所傳通院前小路。

市街充實時代



西

- 一、小日向馬場近所小林勘右衛門前。
- 一、半込寺町末松平内匠頭組屋敷前。
- 一、川田窪妙圓寺町。
- 一、加賀屋鋪松原助太夫・横田次郎兵衛土屋忠次郎屋敷前。
- 一、同所戸田相摸守長谷川久三郎組屋鋪前。
- 一、四ッ谷大久保山城守組屋敷前。
- 一、鮫ヶ橋。
- 一、青山宿青山和泉守前。
- 一、麻布六本木梅了院前。
- 一、同所大久保加賀守屋敷前。

南

- 一、芝金杉新堀之堀留石川若狹守前。
- 一、同所同川筋有馬中務前。
- 一、芝車町。

右口々を限、在郷荷付馬并駄賃小荷駄口付之者、乘候ハ、下馬致、夫々内ニシテ一切不可乘旨、可申渡事。

延寶九年酉四月

右、五月廿日御觸町中連判。

○町

右御觸之趣、慥に御請負申上候間、町中家持ハ不及申、借屋店借之馬持共ニ可申聞、今度御改杭内ニシテ口付之者堅乘申間敷候。辻番之者共ニ申付、駄賃馬小荷駄馬口付之者町中ニシテ堅乗申間敷旨、被仰付候。奉畏候。若違背仕乘候者有之候ハ、早々宿元ニ預置、兩御番所ニ御斷可申上候。右之御觸之趣相背者有之候ハ、何様之曲事ニモ可被仰付候。爲後日町中連判之手形差上申候。仍如件。

延寶九年酉ノ五月廿日

御奉行所様

青山御手大工町略○中

一、御定杭

右ニ當町ノ御城之方ニ壹丁程隔、青山大膳亮様御下屋敷角ニ、延寶九年五月中ノ御建被置、享保七寅年正月申迄ニ御代官伊奈半左衛門様ニ申立、御建替有之來候處、同十五戌年七月中御建替之節、町方御懸ニ罷成、御手大工町六軒町若松町淺河町御爐路町五拾人町、右六ヶ町見守被仰付置、朽損御建替等之節、御手大工町月行事ノ申立候仕來ニ御座候。

市街充實時代

撰要永久錄○町觸同。

町觸



右御文言左之通、

此杭の内、小荷駄馬駄賃馬口附之もの不可乗者也。

麻布廣尾町○中

下馬杭 壹ヶ所

但、從是内、口付無之馬、不可乗もの也。

右之町内西南之方ニ有之。右杭ノ東ニ貳間七尺、西ニ壹丈三尺、南ニ壹丈八尺、北之方屋敷土臺迄六間四尺ニ相建候由、往古町内割付之節、御定杭除地と、町内舊記ニ有之候處、去文政七申年中出火之節、燒失仕候後、無御座候。尤建始年月等相知不申候。

山谷淺草町○中

山谷淺草

一、高札場無之町内ニ小荷駄馬士御定杭。

右御定杭之儀も、先年聖天町ニ建有之候處、寶曆四戌年九月中土屋越前守様御番所ニ御願申上、翌亥年六月廿七日當町ニ御建替ニ相成。其後追々燒失竝朽損候時々御建、御番所ニ御願申上候儀ニ御座候。

廿八日庚辰○延寶九年紀元二三四一 大聖護國寺○市内小 二寺領三百石

ヲ寄ス。○憲廟實錄。常憲院殿御實紀。

護國寺領 傳フ、

護國寺領

護國寺領事

二十八日○延寶九年五月 都下新建之大聖護國寺を仁和寺殿ニ隸して、院家とす。依て寺領

三百石をつけ給ふ。

——憲廟實錄

廿八日○延寶九年五月 大聖護國寺亮賢、寺院創建せしをもて、新に寺領三百石を給ひ、仁和寺の所隸に附せられ、院家を仰付らる。

廿九日○天和元年五月 大聖護國寺亮賢十帖一卷献じ、こたびの特恩を謝し奉る。

——常憲院殿御實紀

市人處罰

是日○延寶九年紀元二三三 市人六兵衛ノ奢侈ヲ罰シテ追放シ、宅地ヲ没

入ス。○常憲院殿御實紀。甘露叢。町觸。明良。洪範。御當代記。江戸眞砂六十帖。我衣。

市人處罰事

市人處罰 左ノ如ク傳フ。

廿八日○天和元年五月 淺草黒船町の市人六太夫といへる豪商、この八日寛永寺御參のとき、御行装を拜せむと、市人等あまた道路につどひたる中に六太夫おのがとめるまゝ、家の男女みな華麗によそひ出しを御覽あり、市人に似つかはしからぬ奢侈なりとて、其宅地收公せられ、其身を追放せしめらる。

——常憲院殿御實紀

一、廿八日○延寶九年五月 江戸小舟丁町人石川六兵衛、商家不似合奢侈仕ニ依テ、妻子共ニ追放、淺草小舟町兩屋敷共家財闕所有之。

——甘露叢

一、淺草山ノ宿六兵衛揚り屋敷有之候、植木庭石竝石垣御拂ニ被仰付候間、望之者ハ、今明日中彼地へ參、見分いたし、入札可仕候。來ル廿三日札披候間、夫前ニならや所ニ入札

市街充實時代



持參可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

六月廿日〇延寶

町年寄三人

町觸

一、五月廿四日〇延寶。石川六兵衛と申町人夫婦、籠者被仰付候。是は富貴の町人にて、淺草山の宿淺草川のはたに下屋敷をもとめ、大きに家を作り、結構の造作を仕、大名衆御役人を招請いたし、おごりを極め申を兼、上聞に達し候所に、五月八日上野へ御社參の節、右六兵衛が女房かくれなきだて者にて、すでに先年、上方に小べに屋權兵衛と申者の女房だてものなるよしを聞、江戸にはなる善兵衛が女房などだてものと聞たれ共、中々我には及ぶものなしとて、右小べに屋が女房とだてくらべせんとて、上方へわざわざのほりたる程の女なれば、當公方様へもだてを仕、世上に無隱名をとらんとやおもひけん、御成おがみに上野の下の町屋をかり、金の屏風を立廻し、こしもの振袖の女二人花の如く出た、せしんみやう六人にもけつこうなる衣裳をさせ、臺子をしかけ、伽羅を夥敷くべ、御駕籠の通り候時に臨で、こしもと二人に金の扇子をもつて、伽羅の煙をあふぎかけ申候に付、誰が妻と御穿鑿有て、右のとをり也。

一、石川六兵衛を籠者に被仰付候も、總る御仕置き敷ゆへなれば、當御代になり候て、少しの御料あるものも、御改易御追放閉門あるひは御役を御とりあけ、延慮の人、町人も少しも家をきれいに立、町屋の門などをひらき門に作り、庭の植木石なども大き

六兵衛夫妻寄進鏡

東京 淺草寺所藏

寛文十一年二月石川六兵衛せき夫妻ノ淺草寺ニ寄進シタル者、清水吉次作ニ係ル。豪奢ノ狀想ヲ可シ。



持參可仕旨、町中不殘可被相觸候。以上。

六月廿日〇延寶九年。

町年寄三人

——町觸

一、五月廿四日〇延寶九年。石川六兵衛と申町人夫婦、籠者被仰付候。是は富貴の町人にて、淺草山の宿淺草川のはたに下屋敷をもとめ、大きに家を作り、結構の造作を仕、大名衆御役人を招請いたし、おごりを極め申を、兼上聞に達し候所に、五月八日上野へ御社參の節、右六兵衛が女房かくれなきだて者にて、すでに先年上方に小べに屋權兵衛と申者の女房だてものなるよしを聞、江戸にはなる善兵衛が女房などだてものと聞たれ共、中々我には及ぶものなしとて、右小べに屋が女房とだてくらべせんとて、上方へわざくのほりたる程の女なれば、當公方様へもだてを仕、世上に無隱名をとらんとやおもひけん、御成おがみに上野の下の町屋をかり、金の屏風を立廻し、こしもの振袖の女二人花の如く出た、せしんみやう六人にもけつこうなる衣裳をきせ、臺子をしかけ、伽羅を夥敷くべ、御駕籠の通り候時に臨で、こしもと二人に金の扇子をもつて、伽羅の煙をあふぎかけ申候に付、誰が妻と御穿鑿有て、右のとをり也。

一、石川六兵衛を籠者に被仰付候も、總御仕置き敷ゆへなれば、當御代になり候て、少しの御科あるものも、御改易御追放閉門あるひは御役を御とりあけ、延慮の人、町人も少しも家をきれいに立、町屋の門などをひらき門に作り、庭の植木石なども大き

六兵衛夫妻寄進鏡

東京 淺草寺所藏

寛文十一年二月石川六兵衛せき夫妻ノ淺草寺ニ寄進シタル者、清水吉次作ニ係ル。豪華ノ狀想フ可シ。











なるをかまへたるは、御とがめにあふ御ふれなれば、俄に家をこほち、庭の木を切、石をほりうめ、人の心さらにおちつかず。殊に庚申の年<sup>〇延寶</sup>閏八月六日、大風洪水にて田畠損じ、五穀みのらざるに、御代替りなれば、さらぬだに城主々々も米をたしなむべきに、殊更御仕置きび敷、科人多く出来候へば、自然に氣短なるものいかやうの心がありて、逆心もあらんかと世をあやぶみ、一しほ米を廻さず候へば、江戸中米の高さ大飢饉のごとし。武具馬具、鎧長太刀の外は、求める物なければ、諸色かつてあきなひなく町人もこまり果申候。

——御當代記

石川六兵衛女房奢之事

小舟町三丁目下角屋敷向ふ荒布橋といへる橋を俗にてりふり町といふ。雪駄屋足駄屋軒を交てありし故にや、角屋敷の地も石川六兵衛といふ町屋敷場所よく繁昌の土地、又六ヶ所持大有徳なり。渠が女房はなほだ奢り者にて、平生の立入目立ぬ。常憲院様御代始に、はじめて上野へ御佛參の御成拜見に、下谷廣小路本阿彌向ふ仕立屋の内を借り、赤毛氈を敷、その身衣裳を飭り、腰元三人下女二人奇麗に出立ぬ。はや人留の頃に成て、己が膝元に香爐をたき、名木焼しに、御駕籠の前駟の大小名、此名木下谷大名小路へ入ると匂ふ。歴々不審に思しめし程なく、廣小路本阿彌邊にあり、六兵衛女房が前に香爐あり、甚美麗なり。御駕籠より御目に留り、何者成ぞ、尋可申よし上意なり。則だん々々仰送られ、御徒小頭吟味に付、石川六兵衛女房のよし、翌日言上す。即刻町奉行へ御吟



味にて、六兵衛夫婦半舎被<sub>レ</sub>仰付、町人の身として敷物いたし、香爐持參、また本所に屋敷一ヶ所、廣地にて、座敷庭構夥しく、六兵衛召仕つねく、本所下屋敷といふ。是を誠に憎み強く、町人として下屋敷と申事、甚越度になり。家屋しき家財闕所になりて、六兵衛夫婦江戸十里四方追放に仰付らる。然れども相州かまくらに六七百石田地有て、かまくらへ引籠りて暮しぬ。今に建長寺の西町屋敷に子孫有之。

——江戸真砂六十帖

寛文中に至ては惣鹿子の小袖を著す。地白綸子或は紺緋紫の結鹿子惣地にせり、尤結構也。小舟町一丁目石川六兵衛と云者の妻、甚奢なり。此女常にさやちりめん綸子の類を著し、晴がましき所へは純子綸子金入等を著す。常憲院殿上野へ始て御成の時、延寶年中御代彼の六兵衛御成を拜すに、黒門前に棧敷をかけさせ、御簾をあけ、幕を打せ、名香を焚き、蘭香待と左右に女の切禿兩人、緋縮緬の大振袖を著せ、真中に座す。御通行の節、御簾を卷かせて拜せり。是東照宮御他界以後四十餘年の御事なるに、増て御城は明曆御燒失に間もなく、御三代の御代替り、其外キシ由井丸橋等天草亂、其外色々天災有て、其節迄は下々町人體へは御政務不行届も尤也、しかれども石川六兵衛が程迄女房に爲奢、上を憚らず、仕方心付ぬと云はあまりなる事也、ひつきやう萬事に付、身の分限を忘れ、放埒千萬也、愚かなる町人の心なり。其時の上意に、是は何れの大名の奥方ぞや、あまり結構成様子なり、あれ尋よとの嚴命にて、則町人妻のよし申上候。是よりして町奉

行吟味の上、石川夫婦遠島に被<sub>レ</sub>仰付、缺所となる。金入の小袖計、奢もの不久のたとへなり。六兵衛たわけにもせよ、名主町役人これを止めぬは、皆々心なき事共なり。是より町人百姓男女の衣類殊の外嚴重の御停止にて、寛永の加く成にけり。夫迄遊女も縹子純子を著し、衣具も緋縹子に金紋などぬはせたり。此時より相止む。——我衣

略。上奢ル者ハ次第ニ多クナリ、商家ノ身トシテ貴人高位ノ眞似ヲナシ、或ハ聖護院峯人ノ供ヲシ、又ハ家官堂上ノ扶持ヲ乞テ、其家人ト號シ、鎗ヲ持セ、馬ナド率スルヤカラモ有ケリ。其風婦人ニ移リテ、京ニテ難波屋左衛門ガ妻、江戸ニ石川六兵衛ガ女房ナド、テ、奢侈ヲキソヒ、其衣服ヲ競ベンタメニ、京ニ登リケル。難波屋ガ妻是ヲ聞トヒトシク、ヒヂユスニ洛中ノ圖ヲ縫物シケリ。石川ガ妻京ニ着シテ、東山邊ヲ遊行シケル。黒羽二重ニ立木ノ南天ヲ染タル小袖ヲ着タリ。比フル迄モナク京ノ方コソ結構ナレト云ヒシニ、能々ミレバ南天ノ實ニサンゴ珠ヲ打碎キヒシト縫付ケルニソ、難波屋負ケタリト延寶ノ末ノ世話ナリキ。然ルニ此石川オゴリノ餘リ、綱吉公御代初ニ江戸ヲ追放セラレ、夫ヨリ町家ノオゴリヲ糺問有テ、町人ノ帶刀コトノク奪ハレ、衣服モ絹ツムギノ外堅制禁セラレケレト、京都ハ猶モ花美重疊ニシテ、石カケ茶屋ナドトテ、新タニ普請結構シ、河原表ヲ見オロシ、四壁ヲ金純子ニテハリ、床ヲバビロウドヲ以テ包ミ、天井ハ水ヒシヤウノ合天井ニシテ水ヲタ、へ、金銀ノ魚遊行ス。障子ハ硝子ヲ以テ張立ケレバ、光輝目ヲ驚カシ、山海ノ名物等其味ヒテ調ヘテ、善盡シ美盡セリ。カクテ美婦人



是ヲ配前シケリ。サレバ高貴ノ人ヨリ農商ニ至迄、金銀ヲ費ス事限ナキ、遊興放逸甚シカリケリ。稻葉丹後守正通諸司代ノ時、天和年中是等ノ奢侈悉ク禁止セラレケリ。貞享年中ヨリ町人ノ奢リハ全ク斷絶シケリ。

明良洪範

松平光長收封

六月廿一日壬寅○延寶九年(紀元二三三四年)○壬寅(三正綜覽)將軍綱吉○德自ラ高田○越城主

松平光長○後守家人ノ訴ヲ裁シ、廿二日癸卯○延寶九年(紀元二三三四年)○癸卯(三正綜覽)家宰

小栗美作、其子大六ニ死ヲ賜ヒ、永見大藏、萩田主馬ヲ八丈島○伊ニ、岡

島壹岐、本多七左衛門ヲ三宅島○伊ニ、小栗兵庫、同十藏、安藤治左衛門

ヲ大島○伊ニ流ス。廿六日丁未○延寶九年(紀元二三三四年)○丁未(三正綜覽)光長○松平ノ封

ヲ收メテ伊豫國松山ニ謫シ、養嗣子綱國○松平ヲ備後國鞆ニ謫ス。其

江戸邸亦公收セラレ。記。常憲院殿御實紀。前橋松平家系譜事蹟詳細書。御府内沿革

書。圖

松平光長收封事蹟

松平光長收封 松平光長家臣ノ諍論ハ既ニ記ス所ノ如シ。是ニ於テ將軍綱吉親裁シテ、夫々處罰スル所有リ、遂ニ光長ノ封ヲ收ム。

二十一日○延寶九年 大廣間ニ出御。松平越後守光長か家司小栗美作、萩田主馬、永見大

藏を召て、延決せり。御家門衆並ニ譜代之諸大名諸番頭諸物頭諸役人列候ス。二十二日

年○延寶九年 松平越後守光長か家司小栗美作驕恣不忠之罪を以て、松平越前守綱政か

宅ニ於て死を給ふ。其子大六も松平伊豫守綱昌か宅ニ於て死を給ふ。永見大藏、萩田主

馬ハ家中之騷動をかへりみず諍論ニ及ぶ、不忠之罪を免れざるゆへ、八丈島ニ流さ

る。小栗兵庫、同十藏、安藤治左衛門も、美作か動類なるゆへ、大島ニ流さる。瀧川若狭守か

組戸川主水ハ美作か異父兄なるゆへ、所領を没入して、南部遠江守直政ニ預らる。僧一

音も罪ありて大島ニ流さる。松平因幡守信興御使を承りて、尾張中納言光友、水戸宰相

相光、因幡守、越後守光長か家司等處決之品を告らる。紀伊中納言光貞、中府宰相綱豊

卿ニハ、石川美作守乗政御使をうけて承る。二十三日○延寶九年 松平越後守光長か家

司片山外記を、稻葉右京亮景通ニ預らる。中根長右衛門を、水谷左京亮勝宗ニ預け

らる。小栗右衛門、渥美久兵衛、林内藏介、野本右近、安東平六郎ハ追放、定式之處々を鑑ス。

二十五日○延寶九年 松平越後守光長か家司本多八太夫を、淺野式部少輔長瀬ニあつけ

らる。本多小膳ハ、九鬼和泉守隆仲ニ預けらる。安藤次郎兵衛ハ、京極甲斐守高任ニ預け

らる。二十六日○延寶九年 松平越後守光長家中を鎮撫する事あたわす、騷動ニ及ひし

罪を以て、領地を没入して、松平隱岐守定直ニあつけらる。御扶持方一萬俵を給り、京極

備中守高豊、伊豫國ニ護送す。光長が養子三河守綱國ハ、水野美作守勝種ニ預らる。御扶

持方三千俵を給り、黒田甲斐守長重、備後國鞆ニ護送す。大久保加賀守忠朝御使を承り、

此趣を尾張中納言光長、水戸宰相光圀卿ニ告ぐ。紀伊中納言光貞、中府宰相綱豊卿

ニハ、板倉内膳正重通御使を奉る。二十七日○延寶九年 松平越後守光長か高田城并ニ

市街充實時代

七〇七



所領二十六萬石餘を没入之依て、松平日向守信之秋元攝津守喬朝坂本右衛門佐重治、高木善右衛門御使を奉りて、越後國之赴く。松平大藏大輔正甫榊原式部大輔正俊、牧野駿河守忠唇、高田城を收め、水野隼人正忠直溝口信濃守信直是を守る。糸魚川城を收て守る目付時田八郎左衛門中坊長兵衛岩瀬吉左衛門も參る。松平大和守直矩、松平上野介近榮ハ、松平越後守光長か家司爭論のことをあつかひあしきゆへ閉門ス。大目付渡邊大隅守綱貞ハ、己か職掌をわすれ、酒井雅樂頭忠清久世大和守重之か旨を承る罪ニシテ、八丈島ニ流さる。其子書院番組頭渡邊半右衛門ハ相馬彈正大弼昌胤ニ預けらる。安藝守綱高ハ、金森万作頼時ニ預けらる。平岩七衛門ハ大關信濃守増榮ニ預けらる。二日朝覲をうけ給えず。松平越後守光長か事、罪あるによりて國除き給へとも、御一族斷絶するを思召ゆへなり。光長か舊友親縁なるともからず、都下之第宅なりとも憚なく居住さすへし、況や郡國之間、何之地なりとも遠慮を存せず居住せしむへしと云吏を、大目附奉りて、諸大名ニ傳ふ。

晦日○延寶九 松平三河守綱國か家司本多監物追放せらる。定式之處々を鑑す。目付衆命を傳ふとき、悖逆之言あるに依てなり。  
 四日○延寶九 松平越後守光長か家司本多伯秋田信濃守輝季ニ預けらる。家司小栗兵庫か子三人、松平陸奥守綱村ニ預けらる。四人細川越中守綱利ニ預けらる。同十藏か子二人南部大膳大夫重信ニ預けらる。

—— 憲廟實錄

一、同○天和元 廿一日ニ、大廣間ニ出御、中段着御。御三人方甲府殿御左ノ方着座、松平越後守家來、永見大藏、萩田主馬、小栗美作三人、御中段御向之板縁ニ出ル。出御已前ヨリ伺公。於御前御僉儀有之。御次之間ニ、御譜代大名御詰衆諸番頭諸物頭諸役人等並居。  
 一、永見大藏、萩田主馬、小栗美作三人、和田倉御疊藏之前マテ、御預リ之家來差添、乗物ニテ來ル。右之所ニテ乗物ヨリ下シ、三人ニ御目付一人宛、御徒目付二人宛、町與力並同心差添、此所ニテ請取之、御預之家來右之所ニ差置。  
 一、御玄關迄右之衆中差添、御玄關ニテ町與力同心互ハ相残り、御徒目付請取、天井之間拭縁マテ召連來ル。

御前エ出ル時、社奉行、大目付、町奉行、御目付相添、落縁ヲ通罷出ル也。罷飯節、右同斷。  
 永見大藏御城ヨリ罷飯、松平大膳大夫殿○毛利 網廣。エ御城ニテノ様子申上候。  
 一、最初ニ堀田筑前守殿○正 御取次ニテ、大藏エ御尋被遊候ハ、美作奢ノ様子申上候ヘト被仰出候。其時大藏申上候ハ、越後守去々年御鷹ノ鶴拜領被仕候、例年ハ家老共并諸役人ニモ戴セ候處、美作父子マテ頂戴仕、其外エハ戴セ不申候、此外奢ノ義ハ兼々御評定所ニテ申上候通ニ御座候。  
 一、右之通達上聞、筑前守殿御取次ニテ、美作ニ右ノ御返答申上候様ニト被仰出、其時美作申上候ハ、去年ハ内證ニテ披被申候、其節ハ女中モ有之、拙者父子ハ心安被、存兩人ニテ罷出ルト申上候ヘハ、其時大藏申候ハ、イヤ、左様ニテハ無御座候、美作儀ハ家來







同。

三宅嶋へ。

同。

伊豆大嶋へ。

同。

同。

右今朝於評定所、寺社奉行大目付兩町奉行御目付出座、右之趣、寺社奉行申渡之。

一、小栗美作切腹被仰付之檢使、

- 萩田主馬
- 岡嶋壹岐
- 本多七左衛門
- 小栗兵庫
- 同十藏
- 安藤治左衛門

彦坂壹岐守○重

戸田八郎兵衛○忠

松平孫太夫○重

御徒目付衆。

一、小栗大六切腹被仰付之檢使、

坂本右衛門○重

宮城主○和

土屋市之進○正

御徒目付衆。

右父子共ニ切腹被仰付畢。

一、同日○天和元年。二、小栗美作種替リノ弟戸川主水○安。御小姓組瀧川若狹守組ニ

罷有候所ニ、南部遠江守○直。所エ御預被成候。

一、同年○天和元年。廿三日ニ、松平越後守家來御預ケ面々、

稻葉右京亮○景通へ。

水谷左京亮○勝宗へ。

伊東出雲守○祐實へ。

○天享吾妻鑑ニ、

○天享吾妻鑑ニ、

○天享吾妻鑑ニ、

○天享吾妻鑑ニ、

右ノ面々、今朝於評定所御預ケ被成候。大目付衆兩町奉行衆列座ニテ、被仰渡候。

渥美久兵衛

林内藏之助

野木右近

小栗右衛門

安藤平六

右五人追放被仰付之。何れ今朝於評定所、大目付衆町奉行列座ニテ、被仰渡之。

一、同日○天和元年。二、松平三河守○綱。家來本多監物義三、河守居屋敷ニテ御目付中

申渡候節、十方無之儀申段、不届ニ被思召、御定之國々追放被仰付之。

一、同日○天和元年。二、松平越後守家來子共御預。

松平陸奥守○綱村ニ御預。

小栗兵庫子 同 大太郎

細川越中守○綱利ニ御預。

同人子 同 伊八郎

南部大膳大夫○重信ニ御預。

同 岡之助 同 八之助

秋田信濃守○輝季ニ御預。

小栗十藏子 同 小三郎 同 三十郎

市街充實時代

小栗六之助 同 十三郎

市街充實時代

本田不伯